



新宿発
319号

「〈沖縄の声〉を聞いてください」 を読んで

「沖縄」への向き合いかた	森口 裕
「ヤマトの積悪」を、どう償うか	服部 素
「沖縄の声」が日本を拓く	武藤 功
49年目に見つけた「落丁」と、私の沖縄闘争	鈴木 彰
「沖縄の怒り」を、国会に伝えよう	三宅 征子
切ない。苦しい。申しわけない。	丹治 孝子
「少女暴行事件に想う」の感想	荒井 素子
これこそは、ヤマトの問題	福島 幸子
沖縄の怒りは、全労働者の怒り	鶴田ひさこ
米軍基地問題と教科書検定問題ー共通する差別の構造	芦澤 礼子
基地や軍隊をなくさないかぎり、悲劇は続く	木瀬 慶子
「自分の言葉」で「沖縄」を語り、状況を変えよう	玉盛 清
〈沖縄の問題〉は、〈日本〉、そして〈日本人〉の問題	浮田 久子
意見・異見 317号の「見解」をめぐる	吉田 正司vs平山 基生
詩 軍艦がきた	堀場 清子
沖縄から 県議会で新基地反対を決議	桑江テル子
新潟から 中越沖地震から一年	押見 操子
岩手から 岩手・宮城 内陸地震	三船 照子
窓 アレイダさんは、父ゲバラのようにカッコよかった!	星野 弥生
コスタリカ通信 「軍隊のない国」から	笹本 潤
国会から 女性差別撤廃条約の選択議定書の批准	福島みずほ
台所の科学力 放射能は除去できる?	松崎 早苗
読書室 ウミガメと少年	牧 梶郎
中国大がアメリカに占領された日	山城 紀子

この ひろい宇宙に
たったひとつの地球

その大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし
かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう
あなたも
わたしも
地球も

この ひろい宇宙に
たったひとつの地球
たった一度きりの人生だから
思い切り
のびやかに生きよう

だれもが だれをも
ふみしだくことなく
胸の奥まで深く息をし
ああ 生きていてよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう

〈あごろ〉 人と人の出会うひろば
〈あごろ〉 人と人の共に生きるひろば

「沖繩」への向き合いかた

森口 豁

「沖繩は独立したらいいんだよ」「そう、基地問題がよい例。日本になんか頼っていても、決してよくなんかならない」

最近、こう話しかけてくるヤマトンチュによく出くわす。そのとおりだ。ヤマトは頼りにならないばかりか、官民揃つての「沖繩いじめ」は巧妙さを増すばかりだ。だからその言は、わかる。でも僕は〈独立〉をうながすこうした発言の意図が、仮に沖繩の人たちを思ひやつてのことであつたとしても、承服できない。

理由は簡単だ。ヤマトンチュには、沖繩にお節介を焼く前にやるべきことが、いくらもあると思うからだ。僕にはヤマトンチュが〈独立〉を言つたとたんに、「逃げたな」と思えて仕方ないのだ。自分の役割をそつちのけにして免罪符を得ようなどムシがよすぎる。「沖繩」と五〇年以上も関わつてきた僕にはよくわかる。

持ち込んだ者が持ちかえる。コトを起こしたほうが誠心誠意解決する——。これはどんな問題であつても当たり前のこと。沖繩を、軍事基地の掃き溜めにしたのは日米両政府。それを放任しているのは、その政府を支えている国民、つまり有権者だ。

沖繩の基地問題の最大のネックは、ヤマトンチュの無関心だ。僕自身は、沖繩は、もうヤマトに見切りをつけた方がいいと思つてゐるし、〈独立〉に向けてウチナンチュとの協働作業を一日も早く始めたいと願つてゐる。

来年二〇〇九年は島津の琉球侵攻から四百年、明治政府による廃藩置県／琉球処分から一三〇年目の節目の年にあたる。その「二〇〇九年」を前に、沖繩では〈独立〉や〈自立〉をテーマにしたシンポジウムやティーチインが盛んだ。

ヤマトンチュが果たすべき役割はなにか——。「沖繩」を氣遣う人たちの向きあいかたの質が、いま問われている。

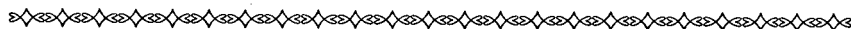
(もりぐち かつ ジャーナリスト)



319号 「沖縄の声を聞いてください」を読んで

目次

巻頭言 「沖縄」への向き合いかた	森口 裕	1
「沖縄の声」を聞いてください」を読んで		
「ヤマトの積悪」を、どう償うか	服部 素	4
「沖縄の声」が日本を拓く	武藤 功	6
四十九年目に見つけた「落丁」と、私の沖縄闘争	鈴木 彰	13
「沖縄の怒り」を、国会に伝えよう	三宅 征子	16
切ない。苦しい。申しわけない。	丹治 孝子	18
「少女暴行事件に想う」の感想	荒井 素子	20
これこそは、ヤマトの問題	福島 幸子	21
沖縄の怒りは、全労働者の怒り	鶴田ひさこ	23
米軍基地問題と教科書検定問題——共通する差別の構造	芦澤 礼子	26
基地や軍隊をなくさないかぎり、悲劇は続く	木瀬 慶子	33
「自分の言葉」で「沖縄」を語り、状況を変えよう	玉盛 清	35



〈沖縄の問題〉は、〈日本〉、そして〈日本人〉の問題……………	浮田 久子	37
意見・異見……………		
基地容認する人であっても、容認できなくなる日が来る……………	吉田 正司	42
ヤポネシア讃歌……………	平山 基生	45
詩 軍艦がきた……………	堀場 清子	52
沖縄から 県議会で新基地反対を決議 〳県政野党、多数を取って初仕事……………	桑江テル子	62
新潟から 中越沖地震から一年……………	押見 操子	64
岩手から 平成二十年六月、岩手・宮城 内陸地震……………	三船 照子	71
窓 アレイダさんは、父ゲバラのようにカッコよかった！……………	星野 弥生	72
コスタリカ通信 1「軍隊のない国」から……………	笹本 潤	78
国会から 女性差別撤廃条約の選択議定書の批准を求める請願を参議院で、全会一致採択……………	福島みずほ	80
〈台所の科学力〉第3話 放射能は除去できる？（物質不滅の法則）……………	松崎 早苗	82
読書室 「ウミガメと少年」野坂昭如「戦争童話集 沖縄編」……………	牧 梶郎	88
「沖縄大がアメリカに占領された日」……………	山城 紀子	90
TOPICS……………		92
会と催し……………		100
あいらのあいら……………		125

「ヤマトの積悪」を、どう償うか

服部 素

弟子が売ったキリスト 兄に売られたヨセフ 日本に売られてしまった沖縄

村山香代子

桜咲く美しき季節の六十年 沖縄はいつ沖縄になる

田村 精進

米軍の基地赤く塗る日本地図 深層火傷負いたるが見ゆ

山本 貞子

〔朝日歌壇〕投稿歌より

317号「沖縄の声」を聞いてください」を読ませて頂き、ヤマトに住む者として、まさに、身にこたえて考えさせられました。そして、それは、「あごろ」が事に応じて即座に反応して特集を組んで下さってきた積み重ねの上にある317号だと思ひますし、特にこの号は、若い方たちの座談会、「根源を断つには、基地問題にどう立ち向かうか」の、コトの根源を見すえた直球のエネルギーに、打たれました。

かねがね「沖縄タイムス」や「琉球新報」の姿勢と、本土のメディアのちがいを思い、それは、「それぞれの受け手の質の相違」と嘆じてはいたのですが、「これは日本の問題だ」ということを、今度こそ、ヤマトの一人ひとりが、「自分だったらどうするか」と、わが身に刻まれる実感として受け止めない限り、沖縄の呼びかけにこたえることはできないでしょう。知念さんの「観光産業だけに特化してお金がおろされ、基地は知らない、遊ぶだけ」という政策への「ノー」に、何とかこたえたいと思います。

九五年の八万五千人集会、仲村清子さんの「私たちに静かな沖縄を返して下さい。軍隊のない、悲劇のない平和な島を返して下さい」と結ばれた、あのメッセージを読み返し、さらに大田元知事の、『沖縄差別と平和憲法』（BOC出版）を取り出し、『平和憲法の日本に復帰したかったのだ』と言われた九条への思い——日本本土からの密航船が新憲法の写しを民政府にもたらした時の感激を述べておられるのには、あらためて震える思いがします。

さらに、引用されているG・H・カーの言葉、「日本全国で、沖縄ほど、太平洋戦争を計画し遂行する上で最小限の関わりしか持たなかったにもかかわらず、その戦争で、最大限最悪の被害をこうむったばかりか、戦後は戦後で、異民族軍政下に放置されたところは、どこにもない」は、「まさしくそのとおり」と、肯くほかありません。琉球処分以来の内国植民地化をズルズルと引きずって来たヤマトの不誠意。ここまで来てしまった積悪を、どう打開するか。

基地のグアム移転は、グアムに同様の災厄をもたらす。日米安保は一年の猶予で破棄できるはず。アメリカ一辺倒の日本政府がしがみついている安保に、どうゆさぶりをかけるかは、難題ですが、これ以外の道はないでしょう。天皇メッセージと共に戦後を固めてきた沖縄差別。沖縄の声をきっかけに、この辺で人間らしい歩みへの転回点としなければ……。

安保返上が第一ステージ。そして二番目には「平和な島を返して下さい」にどう対処するか。知念さんの言われるように、あつてしかるべきいろんな平和産業の立ち上げ。「基地依存は一部の人を肥やしていただけ」とするなら、平和な実業を起こすことに、ヤマトは助力を注ぐべきでしょう。心配なのは、基地の跡地の汚染です。経費はかかるでしょうけれど、思いやり予算を含む七千億円の大変さと思えば、それこそ意味のある復活費でしょう。

そして、六十数年におよぶ「戦後」から脱却できたら、沖縄は、どの道を選ぶのか。もちろん「日本」として、ヤマトと一体になっての歩みは望ましいけれど、沖縄が「沖縄」というか「琉球」というか、小国主義のさがけとして独立する道を選ぶなら、沖縄の位置は、アジアの中心にあつて、その昔からの歩みのままに、「平和の島」として発信する力」は、どこよりも備えている——と、私はひそかに、友邦誕生を夢見ています。

(京都市)

「沖縄の声」が日本を拓く

武藤 功

「あごら」317号の「沖縄特集」を読んで、「沖縄の声」の強さを、あらためて感じた。

その大部分は女性の声であるが、「少女暴行事件」という現実を受けて開かれた「緊急女性集会」の発言を中心に結集された声であることにおいて、その母親としての思い、生活者としての思いが切実に語られていて、胸をうつ。

この「緊急女性集会」は、二〇〇八年二月十九日に行われたが、この成果のうえに三月二十三日には、桑江テル子さんによると「どしゃぶりの雨の中、六千人の老若男女、家族連れ」を結集して「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民集会」が北谷町で開かれた。

そこに集まった県民の思いは一つ。米軍基地の撤去である。この「沖縄特集」でも、その思いが、

さまざま語られている。

「基地があるかぎり、子どもの人権を守ることができない。子どもを安全に育てることができない。安心して暮らせる本当の平和がほしい。」という、沖縄女性の声である。

「基地というオリの中」での暮らし

日本全土のわずか〇・六パーセントしかない県土に、在日米軍基地の七五パーセントが集中しているなかにあつては、基地は、沖縄県民の生活の最大の障害である。この基地に囲まれた「オリの中」では、人間の生存のために不可欠な「生政治」（バイオ・ポリテックス）の最低の条件である日常生活の平和と安全すら守れないからである。その生活の条件が脅かされている現状にあつては、無事に生きていくことができない。

それゆえ、もう県民の我慢も限界にきている。「基地は、いらぬ」と訴える女性たちの声は切迫している。それにもかかわらず、こうした県民の声に、「政治色がある」とか「政治に利用するな」というような声が県議会の一部にはある、と、桑江テル子さんは指摘している。

「思いやり予算」で成立している米軍関係者の「基地外居住」

県議の狩俣信子さんによると、沖縄には四万四千九百六十八人の軍人・軍属と、その家族がおり、それら基地所属の米兵たちの「基地外住宅」居住者も増えているという。

これは民間の住民地域への基地の拡大を意味している。日本政府は、この基地外住宅の家賃のために、月額二十万円から四十五万円も払っているという。「思いやり予算」といわれるものによる支払いである。

「基地外居住」で高まる危険度

この民間住宅問題は、もちろん「思いやり予算」の問題だけではない。この「思いやり予算」は、県民を「思いやらない」基地政策となって住民を苦しめているからである。民間住宅地への「米兵の自由」な居住は、「住民の不自由」となってあらわれていることこそが問題なのである。今年の二月に「少女暴行事件」を起こしたのも、この民間居住地域に住んでいる米兵であった。このため、女性たちは「危険な隣人は、知らない」と抗議の声をあげているのである。桑江テル子さんによると、この米兵の基地外住宅の契約戸数は五千百七戸に及んでいる。いわば、これらの米兵が「危険な隣人」なのである。

県議の比嘉京子さんによると、一九七二年の復帰後に、五千件をこえる事件が起こっており、その七二年から二〇〇八年二月までの間に、米軍兵士などの犯罪や事故のために県議会で決議したり意見書をだしたりしたケースは三百三十一件にのぼるという。このため、政府への要請や抗議のための県議の派遣も五十八回にのぼったという。

また、〈行動する女たちの会〉の高里鈴代さんと県議の比嘉京子さんによると、戦後から今日までの沖縄の「米兵による女性への性犯罪」は、A4サイズの年表にして二十五ページに及ぶという。こ

の事実を比嘉議員が県議会で知事に質したら、知事は、その冊子を読むのを拒否したという。

「日本の沖縄」の認識を欠く日本政府

北谷町長の野国昌春さんは、「この米軍基地にかかわる状況の改善のために、政府がなかなか動かないのは、いまだに〈占領意識〉を払拭できないからではないか」と批判する。また、沖縄市婦連会長の比嘉洋子さんは、「ここは、どこの国ですか？　ここは、どこの島ですか？」と、問いかけずには、いられない。日本の沖縄として、日本政府がしっかり見ているのかどうか、不安と不信があるからである。当然のことである。

政府は、これまで幾多の基地犯罪や軍事的な事故を見てきながら、沖縄県民が納得できるような抜本的な対策は、何も執って来なかった。せいぜい、その事件のたびごとに、米軍に「綱紀粛正を求めろ」とか「再発防止につとめる」とか言ってきただけである。この種の「言葉だけの対応」では、沖縄県民の安全を守ることができないのは、あまりにも明らかである。

しかも政府は沖縄県民の声を十分に聞こうとしていない。その証拠に、政府の主要与党である自民党は、その憲法改正草案において、第九五条に定められている「一つの地方公共団体のみに適用される特別法」については「住民の投票においてその過半数の同意を得なければ、国会はこれを制定することができない」としている条項を抹殺してしまおうとしているのである。その「一つの地方公共団体」が、〈広大な米軍基地を持つ沖縄〉を意味していることは明らかである。これは沖縄住民の意見を聞かずに、基地政策をすすめようとする魂胆を示すものであろう。

それゆえ、「〔核も基地もない平和な沖縄をつくる〕たたかいをすすめるために、〈安保条約や地位協定について、真剣に考えていく〉必要がある」(狩俣信子さん)、「解決策は、すべての軍事基地の撤廃しかない。日本政府は、あいも変わらず安保条約にしがみついているが、ただちに安保条約を破棄すべきである」(〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉の大里英子さん)という声が出されたことは当然であり、注目すべきことである。

沖縄に米軍基地を提供しているのは、この条約を結んだ日本政府であるから、その責任において、「基地のない平和な沖縄を実現する義務」を負う。したがって、この政府の責任と義務から目をそらさずに、その条約の破棄に至るまで行動を貫徹することが肝腎である。

沖縄県民は、「安保廃棄」を、どうとらえているか

しかし、この安保条約の問題には、難題、難問が多々あることも、事実である。根本的な問題は、この沖縄の基地の現状を抜本的に解決するための安保条約の廃棄について、沖縄県民自身がどう見ているのか、そして他府県の「日本人」がどう見ているかという問題である。「あこら」の「沖縄特集」のなかでも、「〈沖縄問題〉は〈日本問題〉なのだ」と指摘されたこととかわる問題である。

安保の廃棄と存続をめぐるのは、他府県の「日本人」の間では大きな分裂があるが、沖縄自身にとっても相当な分裂があるだろう。これらの分裂をどうするかというのが、最初にして最大の難問である。現在、安保条約が機能しているのは、この条約の存続を望む国民が多数派であり、その多数派において政府を作っているからであるが、この、〈廃棄派〉という〈少数派〉を、どう多数派に逆転さ

せることができるか、という問題でもある。

このため、これらの国民的な分裂を一挙に解決することはできないから、当面は「地位協定の不平等」をまず解決しようという声がある。この問題は、桑江テル子さんの、沖縄市長・東門美津子さんとのインタビューでも問われている問題である。そして、この「米兵が日本の法律で裁かれるようにする」という問題は、当然の要求であり、正当な要求である。

しかし、この地位協定の不平等問題にとどまっていたのでは、基地は、なくならない。沖縄県民の本当の要求は、「基地をなくせ」「危険な隣人は、いらない」「戦争にかかわらない平和な沖縄をつくる」ということである。このためには、安保条約と沖縄（日本）とは共存できない、不可能だ、ということと、ころまで進んでいかななくてはならない。その沖縄と本土との〈多数派をめざす活動と運動〉が求められるのである。そして確認しておかなければならないのは、この多数派形成に道を拓く最先端にいるのが、この「沖縄特集」に結集した沖縄女性であるという事実である。いわば、この〈沖縄の声〉が、最後のゴールである〈日米安保条約の破棄に向けた道を拓く牽引の力となる〉ことの確認こそ、肝腎である。

安保条約こそ「沖縄絶滅の引きがね」

歴史は、この〈沖縄の声〉の正当さを、事実によって証明した。

というのは、さる五月一日、メディアは、一九五八年八月の中国・台湾の軍事衝突による「台湾海峡危機」のとき、米国統合参謀本部長が、閣議に、中国領内への核攻撃（十キロトンから十五キロト

ンの核爆弾の投下」を提案し、当時のアイゼンハワー大統領の承認が得られずに中止されたという公文書の存在について、報じたからである。

この公文書は、それを入手したジョージ・ワシントン大学が四月三十日に明らかにしたものであるが、この参謀本部の閣議提案の恐ろしさは、もし米軍が中国への核攻撃に踏み切れば、中国もまた、その報復として「沖縄や台湾にたいする核攻撃」をするだろう、と想定していたことである。この事態は現実に行われていた数かずの米兵による犯罪どころの話ではなく、沖縄全体の絶滅をも意味するものであった。

このことを考えると、「安保条約が日本の安全を守る」というような話は、まったくの神話であるばかりか、現実にはそれが有害きわまりない「不安全」条約である実態を、明らかにした。

一九五八年の核危機は、さいわい分別のある大統領がいたために回避されたが、それがトルーマンや現在のブッシュのような人物であったなら、と思うと、ゾツとする。そして、未来において「そうした好戦的にして覇権的な大統領がアメリカに出現しないという保障」は、何もないのである。民主党大統領候補指名の争いをしていたヒラリー・クリントンですら、イランがイスラエルを核でおどかすような場合は、「イランを消滅させる」と言明した。その意味がイランに核攻撃を加えて、全滅させるということであるのは、言うまでもない。

こうした核使用に至る戦争の危機をもたらす国際状況を考えると、沖縄の核付き米軍基地は、一日、一刻もはやく、撤去されなければならない。「沖縄の声」を発した女性たちの安保廃棄に行き着いた声には、実に大きなアリティ（現実性）があったのである。「米軍基地と沖縄県民の平和的生存権

は両立しないこと」が明らかになったからである。このことは、本土側の日本人が、そのリアリティを自らのものとして、「憲法9条と日米安保条約は共存できないという事実」を、よくよく認識し、その「米軍基地の提供の根拠となっている条約の破棄に向けて責任ある歩みを加速させる国民的義務があること」を示している。「沖縄の声」にこたえ得る道は、ほかにはない。『あごら』315号を読んで、そのことを強く感じたのである。

(文学と思想の雑誌「葦牙」編集長)

四十九年目に見つけた「落丁」と、 私の沖縄闘争

鈴木 彰

「沖縄全県面積の一割を占める米軍基地に、在日米兵の七割が居座っている」というのは、凄まじい数字です。

米軍というのは、〈ひきも切らず世界で戦争をしている軍隊〉ですから、米兵は、「敵国人の命と人権を破壊する任務」に就いていて、それに慣らされています。任地が沖縄であろうとどこであろうと、彼らは、かつて大日本帝国軍の兵士たちが、侵略先で蛮行を繰り返したのと同じ心理と軍規の中で、軍隊生活を送っているのです。

「人を殺して支配する」という野蛮な任務の前では、他国人の命や人権はどうでもよいこと。だから彼らは、平気で人を殺し、平気で行きずりの少女に暴行できるのです。

いま沖縄県民が、「危険な隣人は要らない」と立ちあがっている姿に触れるにつけ、私は、その、「命と暮らし、安全と平穏を求める、のつびきならないたたかい」に、深い共感を覚え、そのたたかいから大きな励ましを受けています。

それにつけても私の胸をよぎるのは、なぜ沖縄は、いまだにこんな目に遭わなければならないのか？ 私たちがとりくんだ「沖縄返還闘争」、七二年に実現した「沖縄返還」は、いったい何だったのだろうか？ という思いです。

「旧安保条約は、一九五二年九月八日、サンフランシスコ『平和』条約調印の日、吉田茂によって、こつそりと署名されました。五〇～五三年の朝鮮戦争の、まっさい中でした。

サンフランシスコ『平和』条約の第三条で、アメリカは、沖縄・小笠原の全面支配を合法化し、第六条a項の但し書きで、日米安保条約締結の法的根拠を据えました。」

……これは、私が一九六九年に執筆した、生協労連の「七〇年安保・沖縄闘争方針」の一節です。

それは「私たちの困難の源である『安保』は、沖縄をテコにしながら日本全土をアジアの侵略基地に変え、日本国民を戦場にかりたてるねらいをもって生まれたものです」と、「安保廃棄と沖縄全面返還」を、一体の課題として提起しています。

当時、祖国復帰をたたかう沖縄で、琉球大学生協の仲間が労働組合をつくり、翌七〇年一月に、生協労連の一〇〇番目の単位組合として加入する、という具体的な連帯も踏まえて、本気で「安保廃棄・沖縄全面返還」をめざした方針でした。この方針を足がかりに、私たちは、「すべての民主勢力とと

もに、平和で豊かな、民主主義の国を築こう」と、ロマンに満ちてたかったのです。

あの時代の燃えるような思いは、今も私の胸によみがえります。祖国復帰を実現した沖縄の仲間のたたかいに、ずいぶん励まされたものです。

いま、三十九年前の「方針」を読み返した私は、「ページや行が抜け落ちている」という意味ではない、重大な「落丁」に気づきました。沖縄支配を合法化した「安保条約」を廃棄して「沖縄全面返還」を！と提起したこの方針は、返還は「全面的」でなければならぬと言いながら、「それがなぜか」というところまでは、メスを入れていなかったのです。

つまり、「本土の平和と民主主義」が、実は沖縄を基地として米軍に提供させられつつ築いたものであり、不完全な「返還」では、沖縄の犠牲を償うこともできず、逆に「本土の沖縄化」の危険を生じさせるという視点が「落丁」していました。

「日本国憲法」を審議したのは、旧憲法下最後の議会Ⅱ第九〇回帝国議会ですが、その段階で、すでに沖縄住民は切り捨てられていました。この帝国議会を構成した衆議院議員は、「四五年十二月に成立した改正衆議院議員選挙法によって選出された議員である。……この選挙法は、婦人に選挙権を付与する一方において、その付則で在日の旧植民地出身者と北方領土住民、そして沖縄県民の選挙権を停止した」（古関彰一「『平和国家』日本の再検討」岩波書店）というわけです。

沖縄返還が「基地抜き本土並み」への「全面返還」とならなかった結果、沖縄県民の「危険な隣人」がのさばり続け、いま、沖縄の犠牲の上につくった「日本国憲法」そのものをも破壊し、「本土の沖縄化」を進めようとする策動が強まっています。

しかし、これに反撃する国民的なたたかいは、全国に七千を超える〈九条の会〉の広がりに見られるように、広く深い討論のプロセスを大切にし、そこから一致する課題を掘り当てる奔流を形成しています。多様な価値観の交流を大切にする流れの中では、かつて私が犯したような「落丁」が生ずることもないでしょう。

私は今こそ、戦前・戦後を通して重大な犠牲を担わされてきた沖縄の仲間たちへのねぎらいと労わり、感謝と連帯を込めて、「沖縄問題」を「日本の問題」として総力をあげるべき時だと思っていますし、そこから新しい「沖縄闘争」が拓けることを確信しています。（東京都・調布〈憲法ひろば〉世話人）

「沖縄の怒り」を、国会に伝えよう 三宅 征子

あごら「沖縄特集」を読んで、沖縄の怒りが胸に刺さります。

基地を、沖縄を、意識することから逃避している私自身の日常があぶり出されました。

東京にいと、安寧を脅かす騒音も、心に圧迫感を与えるフェンスもなく、夜の外出をためらわせる米兵も、身近には、いません。

沖縄は遠く、新聞にも滅多に「沖縄」は出てきません。そればかりか、沖縄の人びとの心を抉るような事件の報道も、隅に追いやられているのが現実です。

私は、二か月ほど前、『琉球新報』の松本剛記者が講演の中で述べた言葉に、衝撃を受けました。「沖縄があったから、本土では安心して九条を守る運動が出来た」。

面積比から見たら、基地の大部分を、沖縄が引き受け続けて、いえ押しつけられ続けてきたから、アメリカは、本土の護憲運動にそれほど目くじらを立てず、ある種、ガス抜きのように放任してきたのかもしれない、と。

アメリカは日本の自民党政権が、アメリカに決して楯突かず、どこまでも従順であることを前提に、沖縄を使ってきたのではないか。

沖縄に基地が存続するかぎり、本土の護憲の動きは、本土に住む国民の意識の免罪符にこそなれ、沖縄の人びとの心を軽くするものにはなりえない、と知ったときの衝撃は、大きいものでした。

強硬発言を繰り返す現在の在沖米総領事は、「基地に伴うさまざまな問題を、六〇年にわたって押しつけられてきた沖縄社会の反発力が、ここへきて多少弱ってきている、と見ているのではないか」と、松本記者は書いています。

基地があるがゆえに繰り返される人権侵害、生活侵害、環境侵害の数かず。理不尽を許さない沖縄の人びとの怒りのエネルギーが、何度も何度も、その都度、浪費され、アメリカ政府にも、日本政府にも、さらには本土の日本国民にも届かないとしたら、エネルギーを持続することに疲れが出たとしても、誰が責めることができるでしょうか。日頃、沖縄を意識の外に置いている多くの本土の人びとこそ、責めを負わなければならないと痛感します。

東門美津子沖縄市長が、「日本政府がアメリカにモノを言わないのなら、沖縄基地縮小・撤退の意

志がないのなら、全国民で応分の負担を」と、「あごろ」のインタビューでおっしゃっていました。
「みんなで肩にかついでください。背負ってください。」と。

今回の米軍再編で、日本全土が米軍の出先拠点となりつつあります。(本土の沖縄化)ともいわれています。東門市長のいう「応分の負担」とは次元の異なる、(日本全土の基地化)の強化にほかなりません。もはや誰も、傍観者でいることは許されません。

東京に住む私たちは、辺野古や高江には毎日行けなくても、国会には、行くことができます。

国会議員に働きかけることは、できます。「沖縄の怒り」を胸に、いま、できることをしていきたい、と思います。

(東京都調布市)

切ない。苦しい。申しわけない。

丹治 孝子

切なくて、苦しくて、申しわけなくて、読みきるのが大変でした。

沖縄は、ずっと本土の犠牲になってきた。それは、戦前も、戦後も、復帰後も……。

「その状況に怒りながらも、許してきた本土の責任」を痛感しました。問題や事件が起こるたびにしか、ハッと「沖縄」。一瞬「あ、沖縄」としか、思い出さなかったのです。

私が、今 住んでいるのは神奈川県相模原。米軍基地、相模総合補給廠の前ですが、戦中戦後の

娘時代は、横浜にいて、横浜大空襲を体験。火の海を逃げ回りました。

一九四五年の敗戦から二か月たった頃、焼跡をブルドーザーでならし、米軍のカマボコ兵舎が立ち並び、その夜から住民にとって恐怖の日々が始まりました。

三、四人の米兵が女探しにやってきて、ピストルを突きつけ、夫の前で妻がレイプされる。女がいなければ、「や」と防空壕でたすかった物を持つていく強盗」に変身するのです。隣のバラックのおじいさんは、孫娘をかばったために、半殺しのめにあい、その先のバラックでは、体に巻きつけてたすけ出したご先祖の位牌をもっていかれるありさまでした。

母は、地面に穴を掘り、年頃の姉を守りましたが、勤め帰りに米兵の集団強姦にあってしまいました。抵抗したために銃の台尻でなぐられ、人に担がれて来たときは、水をかぶった様に血まみれで、顔の相も変わっていました。そのことは、永い間、姉妹の中でタブーとなっていました。この沖縄特集を読んで、長い間、心の奥底に押しこめてきた怒り、悲しみ、屈辱感が、一挙にとび出してきました。当時の横浜では、米兵による暴行、強盗、強姦は、日常茶飯で起こっていたのです。

中国に出征していた兄に、戦場体験を迫りましたが、「忘れた」と言い、話すことを拒否しています。恐らく、米軍が行なってきた占領意識と同じような悪業を働いていたと思います。私は、たくさんの理不尽な死を見ながらも、友人、知人の苦しみを助けることもできず。きたことへのうしろめたさで、押しつぶされそうになりながら八〇歳を迎えたことを、恥ずかしく情けない思いで生きています。

以来、戦争につながるすべてに「反対」を叫んできました。実に諸悪の根源は「戦争」です。「基地・軍隊」です。

日本には憲法九条があり、「陸海空これを保持せず、国の交戦権は認めない」と、小学生でもわかる

ように書いてある。にもかかわらず、自・公政権は、ミサイル・クラスター爆弾・地雷を持ち、世界有数の軍備を誇っている。「こんな体制は打倒あるのみ」と思うことしきりです。絶望した時が敗北です。かつて「老人福祉？ 枯木に水は、やらないでしょう」と言った中曽根総理の発言を思い出し、「日本の基地の七五%を押しつけたばかりに、今も苦しみ続けている〈沖縄の基地問題〉を解決しなくては、人間としての尊厳をかけて生きることができない」と、317号を読みながら、改めて思いました。

(神奈川県相模原市)

「少女暴行事件に想う」の感想

荒井 素子

もう我慢できない！ 怒りで胸がどきどきしました。やるせなくて、悔しく、地団太踏みしました。私には三人の娘がいます。決して他人事^{ひとごと}ではありません。もし私がそこにいたら、米兵を殺してしまったかもしれません。

私は、「基地の街、相模原」で育ちました。父は旧社会党の市議・県議を長くしていました。父は、小学生の私に「(私が)高校生になる頃には、革命が起こって、誰でも行きたい高校に行ける世の中が来るんだよ」と言っていました。「私たちは、労働者階級なんだ」という話が普通にされていました。だから私はずっと、「そのうち革命が起こり、皆が幸せに暮らせる世の中が来る」と素直に思っていました。

でも大人になり、「革命」なんて口にする、周りの人に退かれる雰囲気、気が付き、(天真爛漫・思ったことを口から出さないと爆発してしまふ自分を抑圧するもう一人の自分)が居るようになりました。子どもができ、人の親になり、「私(自分)が生まれてきたわけ」がわかりました。若いとき、好きなことだけして、勉強をしませんでした。四〇歳を過ぎて心底学びたいと思いました。学ぶ中で社会の構造や社会の矛盾のわけ、飢餓・貧困・いじめ・自殺・差別・戦争の原因とからくりが、次つぎと明らかになり、不安のモヤから脱出し、それら私たちを苦しめる正体が見えた。「じゃあ、どうすればいいか?」は、自然に見えてきます。早い話、「私たち労働者階級に、決定権、権力をよこせ!」ということです。「ひと握りの資本家が政府と一体となり、権力を握っていること」が間違いです。革命は、「誰かがやってくれる」のではなくて、「私たち労働者階級の一人ひとりが自覚をもった団結の力で成しえるものだ」ということも学びました。そして、「その時」が「今だ」ということも。

(相模原市)

これこそは、ヤマトの問題

福島 幸子

今回の「少女暴行事件」は、あらためて、「私たち本土の問題だ」と思いました。

それは「ヤマトの週刊誌がプライバイシーをえぐり出す報道をし、インターネット上では、少女と、その関係者へのセカンド・レイプが乱れ飛び、二〇日後に提訴は取り下げられた」ことにあらわれて

います。

同じ頃に起きたイージス艦の事故は、毎日、ニュースで取り上げられて、自衛隊の問題点が日に日に明らかにされ、石破防衛大臣が現地入りして謝罪するなど、社会問題として大々的に報じられました。しかし、沖縄の事件はまったく逆の、悪質な本土のマスコミやインターネットによる被害者バッシングによって、何の落ち度もない被害者とその家族を、さらに傷つけるまでに至り、そして、日本政府のあり方や基地や軍隊の存在こそ問題にしなければならなかったにもかかわらず、うやむやにされていってしまいました。

こんなやり方を絶対許すわけにはいきません。今回の「沖縄の声」特集を読んで、「問題は、どこにあるのか、どういった闘いをしていかなければならないか」を、あらためて考えてみました。

日本政府が恐れているのは、「基地は要らない」「軍隊は要らない」「日米安保は必要ない」という声が、沖縄だけでなく、日本本土に響きわたることです。そういった声がつながることです。

だからこそ、政府もメディアも、沖縄で起こったことを封じ込めて、「沖縄だけの問題」にしようとしています。まさに分断攻撃そのものです。

この間、本土でも、事件後、闘う仲間たちが防衛省や米大使館への抗議行動などをおこないましたが、いっさい報道されていないと思います。

もし、沖縄の行動と合わせて、本土の闘いもテレビや新聞に載っていたら、福田政権は、存在してないと思います。

「根っこは同じ！ 自分の足を掘り起こしましょう」——十年ほど前に、桑江テル子さんが言われた言葉を胸に、自分の職場や地域で地道ながらたたかっています。そして今、この社会は、おかし

い——「希望は戦争ではなくて革命だ」と、青年労働者が声をあげ、行動しています。

この春の全駐労のストライキは、基地の労働者の怒りを解き放ち、私たちに、勇気と希望を与えてくれました。また五月の沖縄平和行動に参加した職場の青年労働者は、「団結の必要性を再確認させられた二日間でした」とビラに書いています。

分断の鎖を断ち切って、団結の輪を広げて、戦争につながるあらゆるものを、なくしていきましょ
う！
(神奈川県・川崎市)

沖縄の怒りは、全労働者の怒り

鶴田 ひさこ

「あごろ＝沖縄発」を読んで、「いったいどうやったら、この沖縄の怒りが 日本全体の怒りになるのか」——このことが、ひとつの大きなテーマであると思いました。

結論から言って、一緒に怒って、沖縄の問題を自分の問題としていく労働者民衆は、これからどんなひろがっていく！ そう私は確信しています。

たしかに日本全土に存在する米軍基地の七五%が集中するという「沖縄の基地」の現実と、本土のそれとのへだたり。またその被害の実態の大きさの違い、怒りの深さの違いは、本当に大きいと思い

ます。ヤマトの人たちは知らない、知らされていない、ということがあります。分断があります。しかし、いつまでも分断されたまま、なんてことは、ありません。

○八年に入って、世界の大地は大きく動き出していると感じます。世界中で、労働者のストライキ、食糧暴動、農民・漁民の決起が続いています。

アメリカのサブプライムローン破綻に端を発した、世界金融大恐慌が始まり、あふれかえった投機マネーが、原油・穀物の価格を高騰させ、ハイパーインフレがまた、世界の労働者民衆の生活を逼迫させている。もう世界中の人びとが、「生きさせろ!」と、みんなが怒りをもっている状態。——きっかけさえあれば炎が燃えさかり、燃え広がる状況に、完全に入っていると思うのです。

高福祉、社会保障制度の充実した、あのスカンジナビア半島でも、民営化反対の福祉労働者のストライキが起こり、アフリカ諸国で食糧暴動が起こっている……。また、イラク戦争継続下で、アメリカ西海岸全部の二九港が、五月一日メーデーに、ILWU(港湾倉庫労働組合)のストライキで封鎖されると、イラクの石油労働組合が、これに感動・呼応してストライキに入ることを通じて、交戦国同士の労働者が、戦争を止めるたたかいに入るなど! そして、お隣の韓国では、米牛肉の輸入に反対して、百万人のたたかいがまきおこっています。

そしてこの日本でも、昨年全駐労のストライキは、沖縄をはじめ、全国の米軍基地のあるところでした。たかれ、北海道教組の二十数年ぶりの一時間ストライキも行われました。若者の間に、プロレタリア文学『蟹工船』(小林多喜二)が、大いに読まれています。

「ワーキングプア」と呼ばれる、非正規で圧倒的に不安定な、将来何の保障もない労働者が生み出されて、その人びとが怒り立ちあがり始めています。正規職でも限界ギリギリの労働実態の中で怒りが沸騰しています。そして戦争への危機感と怒りが深まっています。

破綻した新自由主義の攻撃がその因だ、とわかった瞬間、ぜんぶが、いっきにつながります。

人間を生かしていけない資本主義の末期的な攻撃に対しては、必ず労働者民衆は、立ち上がる！
昨年九月の教科書検定での沖縄戦についての「革命」削除抗議十二万人の県民大会や、今年三月の米軍による少女暴行事件弾劾六千人県民集会は、全国・全世界を激励し、また世界の大決起を牽引したと思います。

私自身、本当に励まされました。「沖縄と断固団結するぞ！つながるぞ！ボジにいくぞ！絶対に分断されないぞ！」と思いました。桑江テル子さんが、よく、「足もとを掘りなさい」と言われ続けてきましたが、真剣に足もとの職場や地域の問題に取り組み始めたら、よく見えてきました。みんな、自分の職場や地域で、怒り、立ち上がれば、沖縄の決起の根底を必ずつかむことができるし、共有できる。そういう時代情勢が来ていると本当に思います。

私の属する〈婦人民主クラブ全国協議会〉は、「女性の解放・子どもの幸福・二度と侵略戦争を許さない。そのために職場・地域に自主的な力を育てる」を、綱領にしています。女性たちがかかえる問題をとらえるには、全世界をとらえることだと、お話をうかがって、あらためて痛感しました。

（相模原市 婦人民主クラブ全国協議会）

米軍基地問題と教科書検定問題

—— 共通する差別の構造

芦澤 礼子

なぜ少女を守れなかったのか

「あこら」317号「沖縄の声」を聞いてください」を読んで、まさにこれは「沖縄問題」ではなく「ヤマトの問題」である、と思った。その底には明治政府の「沖縄処分」以来、連綿として続く、根強い「沖縄差別」があることを認めなければならぬ。

五月五日、「9条世界会議」のシンポジウム3「平和をつくる女性パワー」の中心的話題は「軍隊と性暴力」であった。高里鈴代さん（沖縄・基地・軍隊を許さない行動する女たちの会）は、発言の中で、今年二月一〇日に起こった「米兵による女子中学生暴行事件」に触れ、「とにかく被害者へのパッシングがひどかった。私の事務所へ直接電話してくる人もいました」と述べた。

しかも、その電話たるや、「そんな時間にそんなところにいるのが、いけない」「声をかけられて、ついでいくのが悪い」「服装が未成年に見えなかったというではないか」……まるで加害者を擁護するような内容ばかり。しかも、その電話の大半は、沖縄県外からの男性からだったというのだ。

結果的に、被害者の少女は、告訴を取り下げた。（米軍人・軍属による事件被害者の会）代表の海老原大祐さんは「那覇地検は『そっとしておいてほしい……』という中学生の思いを汲み取った」と、発表。「米

兵は釈放された。なぜだ！なぜ少女を守れなかったのか」と述べる。〔被害者の会通信〕第二七号。一九九六年に、当時十九歳だった息子・鉄平さんを、米兵の交通事故で失った海老原さんは、まとも、はらわたの煮えくりかえる思いをしているのである。

三月二三日に行われた「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」（沖縄・北谷公園野球場前広場）には、激しい雨の中、六千人を超える人びとが駆けつけた（筆者は、残念ながら不参加）。一九九五年の「女子小学生暴行事件」以来、少しも変わっていない米軍の体質に、「もはや限界」という気持ちだが、参加者の中にあふれていたことと思う。

ところで、米軍人・軍属による事件・事故は、一年にどのくらい起こっているのか。防衛省（旧防衛施設庁）の統計によれば、二〇〇二～六年の五年間の平均は一、八三九件。うち沖縄防衛局（旧那覇防衛施設庁）の管轄内は一、〇三八件（共に小地点以下四捨五入）。半数以上は、沖縄で発生している。（ただし、届け出のあつたもののみ。実際は、この数倍と思われる）。

なぜ、在日米軍の中でも在沖米軍の軍人・軍属の犯罪が、突出して多いのか。一つには、沖縄戦で一万二千人を超える戦死者を出したアメリカにとって、沖縄は「血であがなった土地」であり、日本復帰後も「アメリカ統治下の意識」が続いている、ということがある。そして最大の理由は、言うまでもなく、「日本全国の〇・六％にすぎない面積に、在日米軍基地の七五％が集中していること」である。

米軍基地は、沖縄戦が生み出したもの

沖縄に米軍基地がこれほど多くなった源流は「沖縄戦」にあることも、また明らかである。

明治維新（一八六八）の十一年後の一八七九年、明治政府は琉球王国を併合（いわゆる「沖縄処分」）し、沖縄県を發足させた。しかしながら沖縄は、太平洋戦争が始まる直前までは、「軍隊も基地もない唯一の県」であった。沖縄で徴兵制が施行されたのは、一八九八年。他府県に二五年も遅れている。沖縄に長い間、常駐軍がおかれなかったのは、沖縄県民に徴兵忌避の傾向が強かったことが、理由のようである。学校教育のなかで沖縄の子どもたちに「方言札」を押しつけ、沖縄師範学校に「他府県学校に先んじて御真影を下賜（一八八七）する」などの、徹底した同化・宥和政策をとつてもなお、日本政府にとって沖縄は、「天皇制のもとになかった」異境の地であったのだ。

ところが一九四二年六月のミッドウェー海戦での敗北により主な空母を失った日本軍は、沖縄を、サイパンなどの「絶対国防圏」を支えるための拠点として重要視する方向に戦略を転換。沖縄県民を総動員しての基地建設が、四四年五月から開始。それは、「本土決戦」を遅らせるための、時間稼ぎの「捨て石」作戦の始まりだった。

その年の一〇月に、那覇が「一〇・一〇空襲」で壊滅。翌四五年三月末には、米軍が慶良間諸島に上陸し、四月一日、沖縄本島に上陸。沖縄の一般住民は地上戦に巻き込まれ、「軍民共生共死」の日本軍の方針のもと、県民の四人に一人が命を失った。そして県民総動員で作られた日本軍の基地は、米軍に接収され、米軍は生き残った人びとを収容所に入れる一方で、新しい軍事基地を次つぎに建設していったのである。

一九五一年のサンフランシスコ講和条約で、沖縄は、日本から切り離され、アメリカ統治下に組み入れられた。その後、「銃剣とブルドーザー」による、さらなる基地拡張が行われ、大規模な、土地取り上げに抵抗して、沖縄の人びとによる「島ぐるみ」の土地闘争が起こった。そしてその怒りは、

日本への「復帰運動」に向かつていった。

しかし、沖縄の人びとにとって悲願だった「核も基地もない沖縄を！」の願いは、一九六九年の佐藤・ニクソン会談で締結された「沖縄返還協定」によって踏みにじられ、米軍基地は残されたまま、一九七二年の「復帰の日（五月一五日）」を迎えたのである。

教科書検定と「大江・岩波沖縄戦裁判」

昨年三月三〇日に公表された高校歴史教科書検定で「沖縄戦『集団自決』記述に関して『日本軍の命令』を示す部分を削除せよ」という文部科学省からの検定意見がついたこともまた、差別の構造の上にある。

この検定の根拠の一つが、「大江・岩波沖縄戦裁判」であった。二〇〇五年八月に、大阪地裁に提訴されたこの裁判の原告は、梅澤裕氏（座間味島元守備隊長）と、赤松秀一氏（渡嘉敷島の守備隊長だった赤松嘉次大尉（故人）の弟）。訴えの趣旨は、沖縄戦初期に渡嘉敷島と座間味島で起こった、「集団自決」について、大江氏の著書『沖縄ノート』と、家永三郎氏の著書『太平洋戦争』に、「赤松氏及び梅澤氏が住民に自決命令を出していないのに、出したように書かれた」ことが名誉毀損にあたるとして、大江氏と出版元の岩波書店に、損害賠償を求めたものである。

裁判の発端は、「自由主義史観研究会」が〇五年四月に始めた「沖縄プロジェクト」。「日本軍による『沖縄戦集団自決強要』は事実ではない」ことを明らかにするのが目的で、教科書記述の削除は、中心的な目標だった。彼らの意識の中には、「日本軍の名誉」を復活することしかなく、「沖縄戦で踏みにじられ

た沖繩の人びとの心を、再度、自分たちが踏みにしてゐる」という意識は、全くなかったはずである。第三回口頭弁論（二〇〇六年三月二四日）で、原告側準備書面を朗読した女性弁護士は、こんな一節で締めくくっている。「日本人が、戦後の図式による呪縛から解かれ、真実と日本人の本来の姿に目覚めるためにも、この裁判を通じて沖繩戦の真実が明らかにされることを、心から望んでいます。そして、日本人として、今一度、当時の誇り高き日本人の心について考えてみてほしいと思います」。

——あまりといえば、あまりにもあからさまな態度である。

そして、原告梅澤の主張が高校歴史教科書検定意見の根拠の一つに挙げられていることにも、文科省と日本政府の、抜きがたい「沖繩差別」意識が感じられる。ちなみに、この検定には、沖繩戦研究の専門家は、いっさい関わっていないことが明らかになっている。

教科書検定意見に対する沖繩の怒りは、保守・革新の違いを超えて、大きく盛り上がった。

昨年六月二八日までに、県議会を含む沖繩の全地方自治体議会（四一議会）で、「教科書検定意見撤回を求める」趣旨の意見書が採択された。そして九月二九日の「教科書検定意見撤回を求める県民大会」には、八重山大会を含めて十一万六千人を超える人びとが参加。その動きを背景に、教科書会社は「訂正申請」を文科省に提出。ところが文科省は、沖繩からの再三の要請団による要請にも、耳を傾けず、「日本軍の関与」という表現は認めたものの、「日本軍の命令・強制」という表現は、認めなかった。

「大江・岩波勝訴」と教科書検定の今後

三月二八日午前一〇時過ぎ、大阪地裁前に掲げられた「大江・岩波勝訴」の文字。集まった百人を

超える被告支援者は歓声をあげ、東京から駆けつけた高校歴史教科書執筆者も涙があふれたそうだ。「原告らの請求をいずれも棄却する」というのが判決の主文である。判決文では「自決命令それ自体まで認定することには躊躇を禁じ得ない」とはしながらも、「日本軍が深く関わったもの」と認められ「原告梅澤及び赤松大尉が集団自決に関与したものと推認できる」とする。

このような判決を導いた背景には、教科書問題を契機にして「『集団自決』体験者の新証言が出てきたこと」がある。今回の判決は、「『集団自決』に対する軍の命令を裏付ける体験者の証言を盛り込み、「いずれも実体験に基づく話として、具体性・客観性を有するもの」と認めた。体験者が身を切り刻むような苦しみの中で証言した「事実の力」が勝訴を勝ち取ったと言えるだろう。沖縄地元マスコミの積極的な報道や、「県民大会」に、十一万六千人以上集まったことも、勝訴の後押しになったはずである。その一方で、梅澤氏の陳述書と、



波嘉敷島・集団自決の碑

本人尋問については「信用性に疑問がある」として退けている。「(天皇制のもとで) 住民は自発的に死を選んだ」という原告側の主張が退けられた意義は、計り知れない。

今回、教科書検定意見の根拠が崩れたことを受けて、四月一六日には「9・23県民大会実行委員会」が、また四月二五日には「沖縄戦検定意見撤回を求める4・24全国集会実行委員会」が、「集団自決」に関する軍の強制の記述回復を求める文科省への要請を行なった。しかし、地裁判決が出て、文科省は、「検定意見は正しかった」という姿勢を崩していない。池坊保子副大臣は、要請に訪れた県民大会実行委員会に向かって「裁判の係争中に教科書を変える意思はない」と言ったという。それなら、なぜ「係争中」の原告の意見だけを参考に、昨年の教科書検定意見をつけたのか。改めて、文科省に説明してほしいものである。「教科書会社は、訂正申請をこの七月にも再提出する方向で調整中」と、「琉球新報」が報道しているが、市民の側でも教科書会社と執筆者への応援が必要である。

原告側は、四月二日に控訴し、六月二五日から大阪高裁で控訴審が始まった。

今回の公判は、九月九日 午後二時(大阪高裁二〇二法廷)。今までの経緯と判決文全文については「大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判支援連絡会」のホームページ(<http://okinawasen.web5.jp/>)を、ぜひ参照していただきたい。(大江・岩波沖縄戦裁判を支援し沖縄の真実を広める会・事務局)

【大江・岩波沖縄戦裁判と教科書問題を知るためのブックリスト】

【挑まれる沖縄戦 「集団自決」教科書検定問題 報道総集】沖縄タイムス社編集／発行(定価2500円)

【証言 沖縄「集団自決」―慶良間諸島で何が起きたか】謝花直美著 岩波新書(定価740円)

【沖縄戦の真実と歪曲】大城将保著・高文研発行(定価1800円)

『沖縄戦と基地——沖縄平和ネットワークの軌跡』沖縄平和ネットワーク会報部会発行・沖縄平和ネットワーク発行（定価1600円）

（注）この書籍は書店では売っていません。FAX 048-882-2777にご注文のうえ、郵便振替口座 02070-0-26116（名義…沖縄平和ネットワーク）に、1890円（送料290円込み）をお振込みください。入金確認後、発送します。

問い合わせは、TEL 098-886-1215。詳細は <http://okinawahelvet/>

基地や軍隊をなくさないかぎり、 悲劇は続く

木瀬 慶子

沖縄からの怒りの告発に、あらためて襟をただしている。

先日、沖縄に行ったとき、車の運転をしてくれた人が、「ヤマトの人は、（少女暴行事件などを）沖縄の問題だと思っている」と、声を荒げて言った。

その言葉が胸に突き刺さり、「そうだよな。沖縄の問題でなくて、日本全国の問題だよな」と、私は何度も、繰り返し、自分に言いきかせた。

基地がある限り、そして戦場に行く兵士がいる限り、基地被害はつづく。

三年前に亡くなった私の父は、フィリピンに行った戦争体験を語ると、「戦争は、人の心までも、餓鬼畜生にも劣るものにした」と、いつも哀しげに言っていた。

戦場にいく兵士は、「人を殺すことを任務とする」から、良心や人間的なところを捨てることを強制される。基地にいる兵士たちは、そんなさんだ生活をしているからこそ、レイプ事件などを起す。やはり、基地や軍隊をなくすこと以外に、根本的な解決の道は、ない。

一九九五年の少女暴行事件のとき、私は、どのように沖縄の闘いと連帯できるのかを考え、行動し、それからずっと平和のために闘おうと思い、活動してきた。

でも、基地の現実は今も変わらず、それどころか基地が強化され、私の住む神奈川でも、横須賀の原子力空母の母港化や日米軍事一体化が進んでいる。

なかなか現実是不変ではないけれど、「沖縄の問題ではない」という怒りの突きつけに、私は、あらためて、あきらめずに基地問題、安保の問題を問い続けていこうと思った。忙しい競争社会となり、他人をけ落したり、他人のことに無関心でいられる人間としての感覚の摩滅が、社会を腐らせているのではないか、と思う。

沖縄・北谷町の集会は、雨の中でも大勢の人が集まり、いろいろな主義、主張を越えて、怒りの集会となったが、本土での報道は、小さな記事でしか、なかった。

それは、「温度差」という言葉で言い表してはならない、本土の人間の無関心さを示したものとして、私は、恥じ続けたい。

(東京都〈9条連〉事務局)

「自分の言葉」で「沖縄」を語り、状況を変えよう

玉盛 清

二月に起きた米兵による女子中学生暴行事件は、九五年の少女暴行事件を再び思い起こさせるものでした。

十三年前、沖縄の女性たちが、「このような事件を二度と起こしてはならない」と怒りの声をあげたとき、私たちは、東京で彼女たちの訴えを聞き、沖縄の現実を重く受けとめました。基地や軍隊が存在すること自体が、こうした事件の根本原因であること、沖縄だけの問題にするのではなく、私たち自身の問題として声をあげていくことを決意し、沖縄との連帯を強く意識したのが九五年の事件でした。これを契機に、〈沖縄〉は、私たちの平和運動の重要な位置を占めてきたと思います。

しかし、今年、再び事件が起きてしまいました。どうしようもない憤りとともに、「闘い続けてきた沖縄の人びとの声を、決して無駄にしてはならない」と、再び強く感じました。

「あごら」には、そんな沖縄の怒りの声が満載されています。沖縄の現実が一三年間、何も変わらなかったことへの苛立ち、少女たちを守れなかった大人たちの責任。そして再び「沖縄だけの問題ではない」という叫びが、鈍感な「ヤマト」たちへの怒りを込めて伝わってきます。

『「沖縄の声」を聞いてください』という特集は、とてもタイムリーでした。私自身、所属する労働

組合の沖縄平和研修のスタッフとなったため、届いた「あごら」を携えて、沖縄に行きました。沖縄の現実や人びとの訴えを、自分の心に響かせたいと思ったからです。

沖縄に行き、私たちは「あごら」が訴えているように、九五年から、いやそれよりもずっと以前から、ヤマトが置き去りにした沖縄の厳しい現実を目の当たりにしました。

辺野古の団結小屋では、新たな基地建設のため、住民を犠牲にして、米国の戦争に加担する日本に、怒りを覚え、そこで繰り広げられてきた人びとの、〈勇氣ある闘い〉に、衝撃を受けました。

「団結して闘えば勝利できる」という、労働組合の原点を見た」と、参加者の一人は辺野古の感想を語っています。また、ひめゆり同窓生の方から話を伺い、日本軍が、住民を壕から追い出したこと、青酸カリや手榴弾を配ったこと、人間性を奪いつくす戦争の惨めさ、愚かさを、学ばせていただきました。

私は改めて思っています。沖縄の問題は、日本の問題であることはもちろん、世界の、あらゆる「戦争と平和の問題」に連なっていると。そして沖縄の問題を解決することは、世界の諸矛盾を解決する鍵になると思います。戦争をやめさせるために、兵士をイラクへ送らないために、基地をなくさなければなりません。そしてそのためには、この国を変えていかなければなりません。

*

今年二月一九日、海上自衛隊のイージス艦「あたご」が漁船と衝突し、二名の乗組員が犠牲になりました。高性能のレーダーで、敵機やミサイルの情報を探知し、瞬時に処理できる能力を持つイージス艦が、漁船を見つけれないわけがなく、防衛省のその後の対応を見て、私は、「この国は、決し

て国民を守らないのだ」と、確信しました。

昨年、辺野古を訪れた時も、そう思いました。基地建設の事前調査でボーリング調査が強行され、反対運動を鎮圧するために自衛隊が投入されたことを目の当たりにし、住民を守るはずの自衛隊が、米国の要請に応えるために 自国の人びとを弾圧したことに、憤りを覚えました。自らの行為を反省することなく、国民を騙すばかりのこの国を、私たちは、変えていかなければならない、と思いました。沖縄の人びとの訴えに耳を傾け 沖縄の現実を知った仲間たちは、自分の言葉で沖縄を語ることの大切さを感じ、それぞれの一步を踏み出しています。私も、どんなに時間がかかろうとも、平和に向かう連帯の輪を広げ、歴史を切りひらく人間として、自分の場で仲間語り継いでいこうと思います。そう、「沖縄の声」は、私たちの心に確実に響き、拡がっているのです。

（戦争を許さない女たちのJ・R連絡会 代表）

〈沖縄の問題〉は、

〈日本〉、そして〈日本人〉の問題

浮田 久子

私は、去る五月四・五・六日、幕張メッセで行われた〈九条世界会議〉に行ってきました。教えられることが多く、刺激に富んだ三日間でした。

二日目の分科会には「アジアのなかの九条・歴史認識と米軍再編を踏まえて」に参加しましたが、このシンポジウムのパネリストの一人が、高里鈴代さんでした。

会議から戻ると、机の側に積ん読状態になっていた「あごら」317号を、読み直すことになりました。

そして怒りをあらたにするとともに、いまさらのように、本土に住むものとして慙愧の思いと、責任感をかき立てられました。

沖縄の来歴について、今日について、私たちは決して無関心でいたわけではありません。現地から情報がいると、抗議の電話かけをしたり、カンパしたりは、するのですが、やはり現場から遠く離れていると、「大変だろうなあ」「けしからん話だ」などと、同情したり、憤慨したり……は、するけれど、結局は、それで終わってしまうのです。でも、「あごら」の「沖縄の声」特集号を読むと、しんそこ、胸を衝かれます。

「平和をむさぼる日本本土人の、深層心理はどうなっているのか。決して〈沖縄問題〉ではない。〈日本問題〉として考えてもらいたい」と桑江テル子さんに言われて、正直返すことが見つからない思いでした。

私はあらためて、本年（二〇〇八年）三月三日の「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会の決議」に、衷心から賛同するとともに、「ヤマトの人間たちは、自分たちが〈沖縄化〉するのは御免だから、沖縄の同胞たちの苦境を見てみぬ振りをしている」となじられても、ともに弁解

できない実状を、変えなくてはならない、と、強く つよく、思いました。

政府は当面当てにならないとしたら、私たち民衆は何ができるか。

まずは私たち自身の考えや行動を変えするために、徹底的な究明が必要でしょう。

それから、一人ひとりが真剣に考えたことを、ためらわずに実行に移すことです。

私自身は、次のように考えました。

日本政府も米国政府も、米軍駐留によって必然的に生じる〈沖縄問題〉を、あくまで、〈沖縄内部の問題〉として処理しようとしている。日本人は自分たちの誇りにかけて、これに「NO」と言わなければなりません。ひとの意識を変えていくのは、民衆にできる仕事です。アメリカの公民権運動の輝かしいお手本を思い出すまでもなく、自分たちも、そんな経験を、いくつもして来ました。

〈あこら〉の沖縄特集号の、あの血の叫びが、日本中の耳にとどかなければ。そして日本の自治体のあいだに、日米地位協定の抜本的見直し／改正を要求する機運が生まれるように、持っていけないでしょうか。

いま「無防備都市条例直接請求運動」が、静かに、しかし着実に、広がっています。そのような民衆の運動を考えて、計画をすすめられたら、すばらしいですね。容易でないことは、わかっています。それは、はじめから決まっていることです。

私は、どうも政治的な手続きに疎いので、困るのですが、周りには市会議員の方がたもおられます

し、たまたま私は、社民党・阿部とも子国會議員の地元後援会の代表なので、彼女の知恵も、借りることができません。

ほかに、〈もつと手近かにできること〉も、あります。

それは、〈自分が関わっているグループのなかで、できること〉を始めるのです。

私たち〈平和の白いリボン行動・藤沢〉は、二〇〇一年九月以来、毎月第二土曜日、十三時から十四時に、藤沢駅頭のサン・パール広場に立って、「戦争非協力宣言」を訴え、メンバーのイラスト入りの素敵なチラシを作り、配っています。

もう九十三回になりますが、次回八月のテーマは、「沖縄」にしました。
そのチラシをお目にかけます。(四一ページに掲載)

これには、いつものすてきなイラストは、まだ入っていませんが、ご推察いただければ幸いです。

最後に、何をするにも、お互いの交流が枢要です。

あらゆる機会を逃がさずに、連絡を取り合ひましょう。

「あこら」誌も、その役割を果たしつつつけてくださると、期待しています。

(神奈川県・藤沢市 〈平和の白いリボン行動・藤沢〉)

『沖縄』という文字をみたら、 かならず読んでください

聴いてください、わたしたちの沖縄の友だちのさけびを！

「日米同盟の名のもとに【日本人の安全を守るために】駐留している米軍。その構成員が、わが子ほどの幼い子を言葉たくみに連れ出して強姦する暴挙。これは一度や二度のことではありません。戦後62年間、毎年くりかえされています。しかも、彼らは米軍だから、罰はほとんどウヤムヤのまま。わたしたちは日本という立派な独立国の国人ですよ。これって、いったい何なの！」と。

いま沖縄では、普天間飛行場移転問題で、友だちは必死に闘っています。沖縄でわたしたちの同胞が36年間、非暴力手段の限りをつくして訴えてきたのは、何のためだったのでしょうか。

「もう基地は結構です。米軍再編で日本の安全がおびやかされ、そのために軍事基地が今まで以上に必要なら、沖縄は、もうマッピラ御免です。日本本土に造ってください。それがいやなら、基地撤去の為に、もっと本気で私たちといっしょに闘ってください」と叫ぶ声がきこえます。

『沖縄問題』は「日本、そして日本人の問題だ」と、きびしい言葉が投げかけられてきました。わたしたちは、当然、これに答えなければならないのです。

どうか、一緒に考えてください。

(浮田久子)

〈意見〉があれば〈異見〉がある――。

「あこら」317号に掲載の平山基生氏の「レイプされ続けるヤポネシア（沖縄をふくむ日本）」に対して、吉田正司氏から「異見」が寄せられましたので、それに対する「意見」を平山氏にご執筆いただきました。両者それぞれの論説を熟読のうえ、あなたご自身の意見があれば、どしどしご投稿ください。

「お互いが平等な誌面」の上で、「思うことを正確に伝える」わざを磨きたいと思います。

基地容認する人であつても、容認できなくなる日が来る 吉田 正司

本誌317号は「沖縄発」・少女暴行事件中心の沖縄特集。その四〇五ページに、三月二三日に、北谷町ちやたんで開催された〈抗議の県民大会〉の写真が載っている。その日、雨の中で燃え上がった六、〇〇〇人の怒りの表情がはつきり読みとれる。

今年二月一〇日に発生した米兵による少女暴行事件に対して、その九日後に北谷で開催された緊急女性集会（参加者三二〇人）での全発言も、特集号の九ページ以下に載っている。そこで注目すべきは、二四ページの「これは本土の人たちが起こした事件です」という小見出しである。参加者の知念ウシさんの発言がそれに続いて、「私たちはマイノリティーです。どんなに私たちが反対しても、本土の圧倒的な国民が『基地がほしい』と言ってますから、なくならないです」と。

このことをめぐって、私は、日本本土での米軍への抗議運動のあり方について、次のように考える。米軍の基地撤去を強く主張する抗議運動が巻き起こることが、まず第一に必要である。それは「綱紀粛正」要求が決まり文句になっていて「まるでマニュアル化されている」（八九ページの座談会）現状について鋭く告発するものである。「基地撤去なくして解決なし」とするものだ。

第二には、基地撤去は望まない人たちを含む、事件・事故への抗議運動が起こされなければならない。基地を容認する場合であっても、土足で日本に踏み込んで事件・事故を繰り返す現状に抗議する必要や権利は、どの国民にもある。基地容認なら米軍の横暴に抗議する資格がない、ということにはならない。現にイージス艦が引き起こした事件に対して——軍隊の存在への、はっきりした抗議ではなかったものの——福田首相も犠牲者宅を訪問・謝罪している（この時は謝罪したのに、沖縄に対しては謝罪されなかった。これは差別的である）。

第一の抗議運動だけが根源的で、第二の運動が「運動に値いしない」として否定されるとすると、日本政府が「基地は必要」と言っている現実を、なんら変更することができなくなる。両者を見据える必要がある。

「なぜ『安全教育』という前に、『基地あるがゆえの被害』『基地の撤去』を言わないのだろうか。それを言わない限り、被害者の少女は自らを責め、追いつめられるばかりだ」（六二ページ、安里英子さん）というのは、そのとおりである。「被害少女を、そっとしておいてやりたいが、沈黙すれば容認となる」（六ページ、桑江テル子さん）。だから沈黙はせず、たとえ基地容認（的）であっても、日本の国内法には拘束されないかのようにふるまう米軍に対して、怒りと抗議が起きて来る必要である。もともと日米地位協定には、米国に対する日本国内法尊重条項もある。このことは、意

外に知られていない。

それに安里さんは、そうではないが、「基地撤去」だけを強調する抗議運動には、「軍事基地の存在の不当性・不条理を指摘しても無意味だとする傾向」は、ないだろうか？

他方では「沖縄に基地を押しつけているのは、米日政府であつて、『日本人（やまとうんちゅ）一般』ではない。……『やまと』には、沖縄県民の敵と味方がいる。また沖縄県自体にも、事実上、米日政府を支持する勢力がある」（二〇一ページ、平山基生さん）という人もいる。

しかし日本政府を支え、成立させている「日本人一般」の罪は重い。この人は、「沖縄県民を基地重圧下に置いている（日本人一般）の一人ではない」つもりなのであろう。しかし彼もまた、その現実を変えられないでいる日本人の一人に過ぎないことを知るべきだ。

この人によれば、少女暴行事件は「日本全体の問題だ」（九一ページ、友利真由美さん）とは考えられないのである。

二月に北谷で事件が起きてすぐに、日本本土でも抗議の集会などがあつた。ある抗議の集会では、その集会決議文に「基地撤去」要求は、見当たらなかった。しかし、集会で発言した人たちのほとんどが「基地撤去」を主張した。中には「ヤンキー・ゴー・ホームでなければならぬ」と、それを五回も叫んだ人さえいた。いろいろな人が参加するのだから、矛盾した内容になるのは当然である。

このような「基地撤去」論でない人も加わる集会や行動が、実は運動全体を強化・拡大していくと私は考える。その結果、多数によって「基地が必要」とされている現実が音をたてて崩れる日がやってくる。ベルリンの壁が崩れ落ちたように。

（沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック会員）

ヤポネシア讃歌

平山 基生

「レイプされ続けるヤポネシア（沖縄をふくむ日本）」（『あこら』317号）で、この六十三年間、米兵によつて、レイプされ続けている沖縄をはじめとする日本の女性のことと、米帝国によつて陵辱され続けているに等しい政治経済文化など、全体としての「沖縄をふくむ日本社会」の現状について述べようとした。後者については紙幅の関係で述べるできませんでした。このことを述べるとき、決して忘れてならないことは、この「沖縄をふくむ日本」の現状は、直接的には、在沖日米軍基地の存在を通して、朝鮮半島、ベトナムなど、インドシナ半島、ラテンアメリカ、アフリカから、今や、とりわけアフガニスタン、イラク、パレスチナなどで行われている言語に絶する米帝国による暴虐と、表裏をなしているということです。

私が、先の文章を書きながら脳裏にあったのは、「日本の貞操——外国兵に犯された女性たちの手記」（一九五三年）でした。

二時間で一〇万人を焼き殺した東京大空襲で被災し、京都の親戚に身を寄せていた少女を、日本の警官に手引きさせて、米兵三人がジープで少女を拉致し、山中で強姦しました。そして、少女は、性病をうつされました。東京に出て、運悪く「パンパン狩り」に遭遇し、これがきっかけで、本人も「パンパン」にならざるをえなくなりました。「パンパン」とは、米占領軍兵士を相手に売春で生活を立てざるを得なくさせられていた女性のことです。二十五歳で死を前にして書いた手記は、特に衝撃的でした。

この手記集を読み始めたとき、あまりの衝撃で、しばらく読み続けることができなかったほどでした。

たしかに米軍の直接占領の時期と、それから「本土」では五十年以上（沖縄県では三十六年）を経た現在と、状況は、違います。しかし、沖縄県の米軍基地周辺をはじめ、横須賀その他米軍基地周辺では、表面化していないレイブ事件は無数であり、表面化した事件も非常に多いのです。ですから、実感として誇張でなく、六十三年間「ヤポネシア」沖縄をふくむ日本」は、レイブされ続けている、と書かざるを得なかったのです。

（一）なぜ「ヤポネシア」という聞き慣れない言葉を使わせたのでしょうか？

それは、沖縄をふくまない日本はあり得ない。沖縄で起こったレイブ事件は、まさに同時に、「本土」で起こった事件と、その重さにおいて全く変わりがなく、「まさに我が身に起こった犯罪である」ということを言いたかったからです。付け加えるならば、世界各地で米兵によって行われている事件も、その重さにおいて、我が身である「ヤポネシア」で起こっている事件と変わりがなくということなのです。この、筆者の私の意図は、偏見なくお読みいただければ、誤解しようもないものであると思います。しかし、残念ながら、「読み違い」をなさっている論者がいることを、編集部から知らされました。

かつて、大江健三郎氏は「沖縄ノート」において、「本土の日本人」「沖縄の日本人」という表現を使いました。この用語法は全く正しいと思います。と同時に、現在（あるいはかつて）「沖縄人」という表現があり、また「沖縄人」ではない本土の日本人という意味で「内地人」という用語法があることも事実です。そのことを考慮して、多少考慮し過ぎであるかもしれませんが、聞き慣れない言葉「ヤポネシア」という言葉を使用したのです。それは、「ヤポネシア人（民）」として、「本土の日本人（民）」「沖縄の日本人（民）」の違いをふくみながら、それを超えて、米日政府に対する共同の闘いをたたかう「ヤポネシア人民」としての一致を表現したかったからに、ほかなりません。

(二) 米日政府の戦後政策の最大の犯罪の一つは、まず沖縄県を、「本土」他都道府県と切り離したと。そして、復帰Ⅱ返還後は、そのまま米軍基地を存続することによって、事実上「本土」と沖縄県の分断を継続したことです。米日政府の抑圧と本土民衆の無理解（この無理解は沖縄県民衆にも存在するものです）を等値することは、米日支配層が戦後継続しているヤマトとウチナーの分断政策に手を貸すことになります。日本政府が考案した「沖縄大使」とは、いったい何なのでしょう。沖縄県は日本政府にとって「大使」をおくべき「外国」なのでしょうか？ 日本政府の沖縄県民への「機械取り」の政策に対して、「本土」からも沖縄県からも、抗議の声が起らないとは、どういふことでしょうか？ それは、「本土」と沖縄県の民衆が、米日政府の術中にはまっている面がある、このような政策にのせられている面があるからにはかなりません。私は、沖縄県を外国扱いする、このような米日政府の政策に、断固反対です。これこそ、差別ではないでしょうか。

沖縄県抜きの「日本」には、輝きはありません。九州抜き、あるいは、四国抜き、北海道抜きの日本が考えられないことと同じ、あるいは、地理的歴史的な意味を考慮すれば、「それ以上」です。沖縄県があるから日本は輝いている。心ある「本土」と沖縄県の日本人は、大江健三郎氏や、故 瀬長亀次郎氏もふくめて、そう考えていると思います。沖縄の日本人を「異族」と表現した論者もいました。しかし彼ですら、「沖縄県民」を「異民族」と表現はできなかったのです。なぜなら、沖縄県民は、地理的歴史的な問題をふまえても、事実としても、学問的にも、「異民族」ではないからです。（このことを指摘することと、「琉球独立」論の是非とは別のことであることを、念のために指摘しておきたいと思います。）

私は、島津藩による琉球王国侵略、明治天皇制政府による琉球処分、日本帝国政府によって意識的に「本土」国民に植え付けられた沖縄差別意識、皇民化教育という極悪非道な政策などの歴史的経緯

を十分に認識しているつもりです。現在も、「本土」の日本人による、「ある種の差別意識がなくなった」とは言えないことも知っています。

「読み違い」している論者は、「この人（注私のこと）によれば、少女暴行事件は『日本全体の問題だ』とは考えられない」と述べています。まさに正反対のことを、私は述べているのですが。さらに付け加えるならば、「沖繩をふくむ日本全体の問題であるだけでなく、世界を支配している米軍に所属する軍人の犯罪である」という意味では、「日本全体の問題であるとともに、全世界の問題である」ことも指摘したいと思うのです。この点では、フィリピンにおける米兵のレイプ事件とともに、私も参加して昨年（二〇〇七年）三月にエクワドルで結成された基地反対の国際ネットワークを通じて、全世界に知らされたことも、お伝えしたいと思います。

（三）同じ論者の「読み違い」は、「筆者（私）が、沖繩をはじめ日本全土に米軍基地を強制している米日政府と対立する『日本国民』（ヤポネシア人民）の一人でないかのように書いている」という「読み違い」もありますが、筆者私は、まさに米日政府側の人間ではなく、「本土」と「沖繩県」を超えたヤポネシア人民の一人であることは、言うまでもありません。

この「読み違い」をしている論者は、「日本政府を支え成立させている『日本人一般』の罪は重い」と書いています。この文章を読んで感じたことは、日本の侵略戦争について「一億総懺悔（ざんげ）」という考えを述べた政治家（首相）がいたということです。この思想は、天皇または天皇制を、侵略戦争から免罪する意図を持ったものでした。

日本人一般の「罪」と、米日政府の「罪」とを区別せず、基地問題に関して「ヤマトウンチユ総ざんげ論」を述べることは、米日政府を免罪することにつながる危険性があることを、指摘しなければ

なりません。また、「本土」の日本人民と「沖縄県」の日本人民を対立させる危険性も、あります。

かつて中国革命を成功させた直後の中国共産党は、旧日本軍兵士を収容所で扱うとき、敵として扱うのではなく、「政府と人民を区別する」という政策に従って、「中国人民に残虐な戦争犯罪行為を行なった日本軍兵士」すら、「侵略戦争を行なった日本帝国政府指導者」と区別しました。

米「帝国」と闘うとき、「アメリカ人だ」ということで政府も民衆も同じに見るのでなく、米「政府」と米「民衆」とを区別しなければなりません。たとえ、未だ目覚めず、米政府を「支え成立させている」役割を果たさせられている状況が、米「民衆」の状況であっても、また、多数派になっていなくても、米「帝国」政府に反対して闘っている「アメリカ人」がいるのですから。

「読み違い」をおかしているこの論者は、基地を認めている〈本土〉の民衆と、基地推進の勢力を、区別していると思います。それならば、なぜ、「〈本土〉の民衆と米日政府を区別すべきである」という筆者は、私の論点を素直に受け入れず、「読み違える」のでしょうか。その原因の重要な一つである「ヤマトウンチュ総ざんげ」論の誤りについては、既に指摘しました。

（四）「分析」的ものの見方と「偏見なき精神」の重要性

「ヤマトウンチュ総ざんげ」論は、「罪」一般を述べていて、米日政府の罪と「米日政府を支え成立させている民衆」の「罪」とが、方向性としては、全く反対を向いていることを、無視ないしは軽視する考えです。社会について分析的に考えれば、「支配するものとされるものの違い」は、あえて単純化するならば、全く違う役割を果たしていることに、すぐ、気づかなければなりません。「読み違えている論者も」、「基地容認する人であっても、容認できなくなる日が来る」と、米日政府と民衆とを区別する正論を述べています。これこそ、おしのべなければならぬ分析的観点です。

この正論を曇らせている思想的原因の一つは、既に繰返し述べている「ヤマトウンチユ総ざんげ」論と、ある種の「偏見」ではないでしょうか。「好き嫌い」は個人的嗜好としては許されるものでしょう。しかし、大きな国民的国際的運動に、それを持ち込むことは、国民的国際的な民衆の共同連帯を妨げる以外の何ものでもありません。ある革新的思想について、それを誤解しないためには「偏見なき精神が必要である」と説いた外国の論者がいました。米日政府の、沖縄をふくむ日本と全世界での許しがたい米軍基地容認政策は、六十三年間続いています。それを打ち砕く力は、党派や地域的相違、民族的相違を認めつつ超える「国民的国際的な民衆の共同連帯」の力以外に、あり得ないのです。そのためには、ヤポネシア民衆の結束、超党派の結束、国際的結束の三つが、先の小論で述べたように、不可欠なのです。この三つの結束を実現するためには、自己の内部にある思想的弱さと闘い、ここで述べたような「分析」的もの見方と「偏見なき精神」を、少しでも身につけるよう努力することが、お互いに求められているのではないのでしょうか。

「沖縄県をふくめた日本」Ⅱ私流に言えば「ヤポネシア」の再生は、可能でしょうか？
私は可能であると思います。

米日政府によつて踏みにじられ、民衆も未だ十分には目覚めず、闘う仲間にも結束が実現していない現在、このように述べることは、空想的であるとのそしりを受けるかもしれません。しかし、「沖縄県」と「本土」民衆の多様性を認めた上での一致が勝ち取られ、真に自立した「沖縄をふくむ日本」Ⅱ「ヤポネシア」が実現することは、歴史の必然です。永久に続いた帝国は、世界の歴史上ありません。今こそヤポネシア讃歌を歌うべきときです。（沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動・運営委員長）



教科書には書かれない歴史を映像テキストとして世に残そうと奮闘してきた高岩仁監督。戦争の悲しさを写し撮るだけでなく、その解決にはどのような社会が必要なのかを問い続けながら、今年一月二十九日に逝った仁さん。遺作を網羅して、われらが仁さんに捧げる上映会を開きます。

●8月29日(金) 18:00開場

- ①18:30～ 阿波根昌鴻94歳～伊江島からのメッセージ (1998年、17分)
- ②18:50～ 戦争案内 (2006年、70分)
- 20:10～20:45 お話/横手三佐子さん……②⑦⑨⑬の助監督、編集助手。

●8月30日(土) 10:00開場

- ③10:20～ 江戸時代の朝鮮通信使 (1979年、50分)
- ④11:20～ 消えた日の丸 (1992年、24分)
- ⑤11:55～ 土地の日～イスラエル占領下パレスチナ人民の闘い (1983年、48分)
- ⑥13:20～ 教えられなかった戦争・フィリピン編～侵略・「開発」・抵抗 (1995年、112分)
- 15:20～16:00 お話/小林明さん……⑥⑨⑬⑮の撮影、編集にかかわる
- ⑦16:10～ 教えられなかった戦争・第二の侵略～開発・投資・派兵～フィリピン (2002年、80分)
- ⑧18:10～ 「日の丸」と「君が代」 (1990年、32分)
- ⑨18:50～ 教えられなかった戦争・沖縄編～阿波根昌鴻・伊江島のたたかい (1998年、112分)

●8月31日(日) 10:00開場

- ⑩10:20～ ユンカーさん～ドイツ民主共和国の労働者たち (1979年、56分)
- ⑪11:20～ 説得～かわち1974年春～(1974年、56分) ※全道東大坂支部の審判とオルグ。
- ⑫12:30～ イルム～なまえ (1983年、50分) ※大阪バウ・デュジャさんの本名宣言と闘い。
- ⑬14:00～ 教科書裁判～歴史の法廷で裁かれるもの (1993年、40分)
- ⑭14:50～ 教えられなかった戦争・中国編～侵略からの解放・革命 (2005年、98分)
- ⑮17:10～ アジアとの友好のために～高嶋伸秋さんの教育実践記録 (1996年、40分)
- ⑯18:00～ 教えられなかった戦争～侵略・マレー半島 (1992年、112分)
- 20:00～20:40 お話/西浦昭英さん……⑩⑮の制作にかかわる。

各日、追悼のお話があります。

仁さんの映画制作に係った方々から、仁さんと作品についてお話を伺います。

高岩仁……映像文化協会代表。1935年福岡市生まれ。東京写真短期大学卒。東映の撮影部員を経て1968年に退社。フリーのカメラマンとして活動しながら、自主制作で多くの映像作品を次世代へ残す。

■前売り鑑賞券/2回綴り (2作品鑑賞可能) …800円

※30日、31日は2回綴り券3枚で当日の7作品全てを鑑賞ができます。

(つまり1日通いで2400円となります。)

※2回綴り券は、日程をまたがってもお使いただけます。

※当日券は2回綴りで1000円となります。※18才未満は無料です。

前売り2回綴り入場券ご希望の方は、お名前、ご住所、ご連絡先、枚数を明記してFAX:045-472-6349へ送信するか、伝える会の専用番号/080-1289-17591にお申し込み下さい。当日受付にて現金精算してお渡します。

主催/高岩仁さんの思いを伝える会、スペース・オルタ



戦争の中国で撮影中の高岩仁氏



SPACE ALTA

〒222-0033 横浜市港北区新横浜2-8-4オルタナティブ生活館B1 TEL&FAX:045-472-6349

軍艦がきた

堀場清子

美ら海が エメラルドグリーンにかがやく

魚湧く海 生命はぐくむ海

海藻の藻場には 魚たちが産卵にやってくる

ウミガメも棲み

ユビエダハマサンゴの大規模群落が

青 緑 黄色 褐色 さまざまな色に変化して連なる

むかし人魚伝説のモデルだった

いまは天然記念物・国際保護動物の ジュゴンまで

浅瀬に生える海草をたべて 悠々と泳ぐ



ここ 辺野古崎^{へのこざき}は 沖縄本島の東岸

大浦湾の南縁を画して尖り

豊かな海を抱いている

一九九七年一月 この海を潰して

普天間基地の代替施設を造る計画が知れたとき

地元は地域ぐるみの猛反発をした

赤土やヘドロに埋もれて 海が死ぬ

太古から岸辺のひとびとを養ってきた

貴重な海の生物^{いきもの}が 死に絶える

夜昼ない爆音と危険で 住民の暮らしが破壊される

「ジュゴン訴訟」が起こされたのは 二〇〇三年九月

ジュゴンとウミガメを原告とし

米国・国防総省と国防長官を相手どり

保護施策を求めて

サンフランシスコ連邦地裁に提訴したのだ

だが基地の建設計画は

住民の知らないところで変転し進捗していた

二〇〇四年四月一九日

那覇防衛施設局が海底ボーリングの強行を試みたが

住民に阻止されて中止せざるをえなかった

いらい事前調査阻止の座り込みは

一一五〇日を越えている

二〇〇七年五月

米軍再編にともなう有事の発進基地の要求から

(そして日本政府の対米追従の姿勢から)

新たな局面が展開する

五月二一日午前 海上自衛隊の掃海母艦「ぶんご」が

辺野古沖めざして 横須賀基地を出港した

大砲と機関銃とを 住民と反対派市民の胸元に擬し

恫喝が近海に居座った

軍艦がきた！

沖縄びとの肌はことごとく総毛立つ

艦砲の「喰えーぬくさー」の記憶

沖縄戦の恐怖が 怒涛となつてよみがえる

突き上げる怒りで 全身がわななく

かつても ヤマトの兵にガマを追われ 虐殺され

集団自決を強いられた

これは 第二次沖縄戦ではないのか

「復帰の日」をやり過ごして五月一七日の夜九時ごろ

辺野古漁港はざわめいていた

「今夜じゅうにも那覇防衛施設局が動きそうだ」

と情報がひろまり

県内各地から反対派の約百人が集った

港入り口の道路をふさぎ 夜を徹して座り込む

東の空が明け染めた午前五時すぎ

靄のかかった水平線に

海上保安庁の巡視船が姿を現した

海上自衛隊の潜水士も加わり

施設局の作業船約二〇隻が

調査機器を海底に設置する作業にかかった

「これ以上人殺しのための基地は造らせない」

反対派のカヌー隊一二人は 口々に叫んで飛び出し

捨て身で作業船にしがみついて中止を訴えた

数人は海に潜り 海中からも訴えた

結局 施設局は二〇日までに

サンゴの産卵状況を調べる着床具と音波探知機と
水中ビデオカメラとを海底に設置して作業を終えた
二二日の沖縄二紙が ともに第一面に掲げている
生きたサンゴを鉄柱が貫通し
無惨な亀裂の入った大きな写真を

八月七日には防衛省がアセスメント方法書を県に送付
権力がいいよ牙を剥いた
小池百合子防衛相は同日夜刻成田を出発し
ワシントン詣でして 手土産に辺野古を差し出した

日本最西端の国境の島

台湾と一衣帯水の 与那国島祖納港そないには

アメリカの軍艦がきた

沖縄では「復帰」後はじめての 軍艦の民間港入港だ

先島の軍事拠点として

米軍は大型艦船の着岸できる石垣港を目指したが市や市民の反対が強硬だったので手控え

まず国境の小港を選んだ

その与那国町でも 町長が「反対」を表明し

県も「自肅要請」をしたにもかかわらず

「慰霊の日」の翌六月二十四日

掃海艦二隻が日米地位協定を盾に強行入港した

「入港反対」「与那国から出て行け」

町内外約一二〇人がシュプレヒコールを繰り返す中を

まず「ガーディアン」が着岸

埠頭が短いため「バトリオット」は並行して接岸した

その傍では反対派・賛成派入り乱れて騒然となり

タラップ設置は三時間以上も遅れた

百人あまりの米兵が上陸して 海水浴などし

港の水深や島の状況等々の「調査」を終えて

二日後にはまた シュプレヒコールに送られて去った

人口一七〇〇人の過疎の島

姉妹都市 台湾の花蓮市との交流促進によつて

自立したいと切望し

年来国に「開港」を要請してきたが 許されない

それなのに米軍はなぜ入港できるのか

「日本政府の二枚舌」を町長は憤る

それにしても日米地位協定の極端な不平等に

あらためて驚愕する

米国の公用船舶は 日本国内の民間港湾を

必要な時には無料で自由に使用できる

適当な通告は必要で 港は通常「開港」を指すが

拒否されても「不開港」に強行入港できること

祖納港にみたとおりである

米軍再編にともなつて

全国の民間港への米艦の寄港は増加している

有事利用のための調査を着々と積み上げ

いつなんどき 戦争を担ぎ込んでくるか知れないのだ

しかも 米軍にとつての利益とあれば

軍艦の砲口を自国民に向ける国に生きている

私たちの生命いのちの なんとという危うさ

（「いのちの籠」第七号より）

歌と朗読でつづる小さな命のものがたり

新京敷島地区難民収容所の孤児たち

『満州の星くずと散った子供たち』

原作 増田昭一

「満州の星くずと散った子供たちの遺書」

夢工房刊 より

朗読 **南保大樹**
(劇団東演)



2008年6月22日(日) 開演 13:00

海老名市文化会館 音楽ホール

2008年8月19日(火) 開演 13:00

横浜みなとみらい 小ホール

ソプラノ独唱
(作曲・構成) **甘利真美**



豊君の手紙(初演)
正君の辞世の歌(初演)
星達のきらめき(初演)
アヴェ・マリア 他

入場料 3,000円(当日3,500円) 高校生以下 2,000円(当日2,500円)
全席自由

主催 **海老名芸術プロジェクト**

後援 神奈川県 神奈川県教育委員会

海老名市 海老名市教育委員会

協賛 株式会社コジマ クリエーティブカミヤ株式会社 朝日新聞海老名店

ピアノ **多賀ひとみ**



お問い合わせ / お申し込み 海老名芸術プロジェクト
TEL/FAX 046-232-3194
詳細は <http://www3.ctktv.ne.jp/~amarifam>

県議会で新基地反対を決議

県政野党、多数を取って初仕事

桑江 テル子

沖縄県議会の六月定例会の本会議が、七月十八日開かれ、「名護市、辺野古沿岸への新基地建設に反対する意見書・決議」が、野党から提案され、質疑・討論の結果、野党の賛成多数で可決された。また、全国で

官房長官の会合が、首相官邸で開かれ、二つのワーキングチームを設けることなどで合意していた。

その初の定例会で手がけた実績が、今回の二決議である。(新聞記事参照)

岩手県議会に続き二例目となる「後期高齢者医療制度の廃止などに関する意見書」も、約五時間に及ぶ質疑討論の末、賛成多数で可決された。

沖縄県民の意思は、あくまで「基地は、整理縮小。できれば撤去」で、新基地を認めてはいない。去る六月に行われた県議選挙の結果、県政は、野党(社民・護憲、共産、民主、社大・ニライ、改革・無所属)が、二六議席を獲得。自民・公明の与党を上まわり、議長、副議長、常任委員長ポストを占め、県政運営にも大きな影響と変化があるものと期待されている。

沖縄地上戦に痛めつけられ、六十余年の基地被害に苦しむ沖縄の人びとは、「もう、これ以上の基地被害はごめんだ!」という思いに満ちており、普天間を名護へ、A地点からB地点へ、しかも日本人の拠出した税金で思いやり予算を使ってアメリカの基地を新設することに、「ノー」の結論を出したものです。

くしくも、同日、沖縄県の仲井真知事、名護市の島袋市長が出席した普天間移設措置協議会(主宰・町村

今後、県や国が、日米同盟の名のもとに、どのような策を打ち出すのか、注目されます。



県議会が賛成多数で意見書を可決したのと同時に、立ち上がって拍手を送る傍聴人ら

18日午後3時15分ごろ、県議会本会議場

国民健康保険から移行した保険料変化の調査で、保険料増加割合は本県が全国平均を大幅に上回り全国最高となった。県民所得が全国平均の7割余しかない県民に大きな負担増だ。一段と高まる高齢化に伴い、広域連合を構成する市町村や被保険者へのさらなる負担増も予想され、県民に大きな不安と不満を与えている。

会

国民皆保険の原則に立ち、後期高齢者等のみを被保険者とする後期高齢者医療制度を直ちに廃止するとともに必要な財政上の措置を講じ地方公共団体、被保険者の負担軽減に配慮されるよう強く要請する。衆参議長、首相、財務相、厚労相、沖縄担当相あて
2008年7月18日 県議

後期高齢者医療制度の廃止等に関する意見書(要旨)

(7月19日 琉球新報)

名護市辺野古沿岸域への新基地建設に反対する意見書(要旨)

日米両政府は1996年4月、普天間飛行場の返還を発表した。しかしこれは県内への移設条件付きであり、紆余(うよ)曲折を経て、辺野古沿岸域でのV字型の新基地建設計画へと立ち至っている。本県は国土のわずか0.6

%の面積に全国の米軍専用施設の75%が集中する異常な状況下にある。県民は普天間飛行場の名護市辺野古での新基地建設には、基地の過重な負担と固定化につながることから一貫して反対してきた。地元名護市民も97年12月の市民

投票で辺野古新基地建設に反対する意志を明確に示した。辺野古海域は国際保護獣のジュゴンをはじめとする希少生物を多く含む、新たなサンゴ群落が見つかる世界にも類を見ない美しい海域である。ことから、建設工事に伴う環境汚染や大規模な埋め立てによる環境破壊につながる辺野古新基地建設には断固反対し、

世界に誇れる自然環境を後世に残し引き継ぐことがわれわれ県民の責務である。よって本県議会は、名護市辺野古への新基地建設を早急に断念されるよう強く要請する。首相、外相、防衛相、沖縄担当相あて
2008年7月18日 県議

会

中越沖地震から一年

押見操子

〈まなびすとin柏崎〉(代表 栗林淳子) というグループがある。

平成七年から九年の国の事業として、新潟県が主幹し、近隣市町村が実動部隊であった〈ウーマンカレッジinかしわざき〉が、新潟産業大学を会場に、実施された(実行委員会形式で行われ、成功であったと私は思っている。国の事業としての評価について大変興味がある。)が、その修了後、学びを続けようという受講者が集まってできたグループが〈まなびすとin柏崎〉である。生涯学習、男女共同参画、まちづくりを中心に、市のお膝もとに居たが、数年前に独立。現在、三〇名弱の会員数で活動

している。ちなみに、年会費は今年は一、〇〇〇円。

今年度は五月二四日に総会を行い、夢の森公園の散策と草木染を体験した。そして次は、六月二三日、月曜日午後七時から、柏崎市・市民ふらぎで柏崎市復興支援室長の白川氏を講師に「中越沖地震を体験して」と題して講演、座談会を行なった。今回は、この話を聞いてほしい。

まず、どうしてこの勉強会を行なったかである。まなびのグループである〈まなびすとin柏崎〉は、七月一六日の地震で、直接被害にあう。運営委員には、全壊をはじめ、もろ

もろの痛手を蒙った方が多い。しかし、特に被害が無かった方もおありであろう、またこんな時だから学びが必要だ、という意見もあった。

そこで運営委員は、平成一九年度以降の会合の中止を決め、九月二〇日締め切りで、安否と近況をお聞きするハガキを出した。栗林代表は、本堂全壊というなか、作業をしてくださった。「体験を伝えなければならぬ。この経験を無駄にしたいという思いがあった。私自身は、そのような偉そうな思いはなく、「会がないなら宿題ね」という軽いノリだったように思う。ハガキに答えて、メー

ルで返信したもの、手紙で返したものの、全員からではないものの、体験が集まった。

明けて一月。平成二〇年の企画をする運営委員会の席上、「体験をまとめたいね」という声が出たのは、当然の成り行きだった。しかし、地震二か月で思ったことと、地震一年で思ったことは、同じではないかもしれない。平成二〇年度のまなびは、「平成一九年度にやり残したこともさることながら、「復興」もメインテーマだよ」と相談がまとまった。復興支援室（きつと、とても忙しいに違いないが）のだれかに来てもらって、いろいろ聞きたい。わたしたちも聞いてもらいたいし。……というわけで、この勉強会が行われた。事前に集められた体験の感想等は、

復興支援室の講師に渡し、講演の資料として見ていただくこととした。

会は、ほぼ定刻に始まった。二〇人弱の人数である。会場は三階の一室で、ちょうどいいぐらいの広さだ。「地震から一年が経とうとしてい」と栗林代表が述べた。そして、「この講座の経緯と想いを語り、体験を残し、伝え、できること考え、活動していきたい」と挨拶した。

柏崎市復興支援室の白川氏を見るのは、二回目だった。三月の復興シンポジウムのシンポジストとして、「お話の上手な方」という印象である。きつとご自身の体験にひきつけた、面白いお話が、聞けるに違いない。「行政マンに話をさせるとつまらない」というのは過去の話になりつつあると、私は思う。市民に対し

て話すとき、すぐれた行政マンは、つまらない話など、持ってこないのだ。白川氏は、「平成一九年新潟県中越沖地震の被災状況」という、「平成二〇年五月末現在の柏崎市防災対策本部柏崎市復興本部の資料」を配布して、お話を始めた。

「柏崎市は、ここ四年、踏んだり蹴ったり」であった。平成一六年に、豪雨、中越地震、豪雪。一七年豪雨。一八年豪雪。平成一九年中越沖地震。原発立地で補助金が沢山あるに違いない、と思われている柏崎だが、財政赤字で、平成一九年、二〇年は、どん底で、人減らしとマイナスイーリングと外部委託という、苦しい運営を行っていた。

（実際、市の無駄使いという観点では見ておらず、所属していた図書

新潟から

館協議会で市に話しに行くと、「我慢してくれ」と言われ続けていた。人口の減少や不況、町村合併。きびしいだろうな、と思うが、民間は、なお厳しい状況で、市役所の職員は人気職種であることには変わらない。つまり、「原発の柏崎市」とはいえ、たくわえが潤沢にあったわけではないということなのだ。これが前提。

地震

平成一九年七月一六日(月) 休日
午前一〇時一三分

震度6強。マグニチュード6・8
震源地：上中越沖 新潟の南西60
キロ

北緯37度33.4分 東経138度36.5分
深さ17キロ

自衛隊派遣要請：発生から二七分
後。撤収八月二七日

激甚災害指定(局激) 八月十日
人的被害：死亡一四人(刈羽村一
人) けが人 一、六六四人

ご冥福をお祈りしたい。怪我をさ
れた方の、一日も早いご回復を祈る。
一周年の日に、合同追悼式を行う。

記念のイベントもあった。

建物被害(住居) 二八、二五一棟

うち全壊一、一一四棟

施設被害総額

二、二九〇億九、九〇〇万円

建物の倒壊が多いことがこの地震
の特徴のひとつ。先だつての宮城内
陸地震の時に柏崎から復興管理監が
状況把握に行ったが、倒壊家屋が少
なく、できることがなく、帰ってきた。

一部損壊の方には、なんの補助も
できなくて、苦情の嵐だった。よう
やく一軒四万円の申請ができるよう

になり、第一回目の入金が、本日で
ある。

「まなびすと」のアンケートなどを
総合すると、

「ありがたかったこと」ベスト5

●ご近所 ●自衛隊 ●災害ボランテ
ィア ●ガス水道の復旧支援隊 ●地
域FM放送(FMびつから)

「こまったこと」ベスト3

●ライフラインが使えない・携帯
など、連絡がつかない・情報が届
かない。

●人びとはテレビを観ている。が、
市役所の職員は観れず、現状を把
握しにくい。

●助っ人は、たくさんくるのだが、
物資がこなかったり、わからなか
ったり。市民・行政ともども、も

どかしい思いをした。

ライフライン被害

電気 停電二三、三〇〇戸

(復旧地震発生から三日後)

水道 四〇、二六〇戸

(全面供給、地震発生から二〇日

後)

ガス 三〇、九七八戸

(全面供給、地震発生から四三日

後)

ほんとうに水の大切さを思い知っ

た。ペットボトルに水を入れ、日向

において、温水化して行水に使った。

ライフラインの復旧は、非常に早

かった。凄かった。

ガス水道会社の人びとは、かなり

遠い市町村に泊まって、支援に向向

いていた。お互いさまとはいえ、頭

の下がる想いだった。しかし、「柏

崎市がたくさんお金を出したので、あるところでは連夜ドンちゃん騒ぎをしている」というデマが飛び、悲しい思いをした。

避難勧告(十一箇所)

避難指示(五箇所) 一五二世帯・

四二一人

継続中……四六世帯一二六八

避難所設置状況

ピーク時「七月一七日」 八二箇所

避難人数一一、四一〇人

八月三十一日解消

中越地震の時は市の施設であった

が、中越沖地震のときは外部委託だ

ったワークプラザ柏崎や産業文化会

館は「せつなかった」。

炊き出しの担当だったのだが、「避

難所の人数が減っているのに、炊き

出しの数は増えていく。」と、自衛

隊や県の担当から理由を聞かれて、「なんぎかった」。うちに居て、煮炊きが困る人も炊き出しに来ててもいいという方針だったからだ。しかし、こういうときに、人柄がわかる。それも「なんぎかった」。

応急仮設住宅の建設

三九箇所 一、〇〇七戸

ピーク入居時「二月二三日」

九〇二世帯二、四七七人

「五月三二日現在」

三七箇所 九八六戸のうち、七九

四世帯二、一四八人

仮設住宅は分散して建てた。コミ

ュニティを崩さなかったからだ。

空き地ばかりに仮設住宅を建てた

わけではない。テニスコート、少年

サッカー広場などが使えなくなっ

ている。

すでに自力で再建し、仮設住宅を出られた方が一〇九世帯ある。

被災者生活再建支援制度の申請状況

＊国の支援金

罹災棟数の七九・七%

三二億七、四六万四、〇〇四円

＊県・市の支援金

罹災棟数の八六・六%

三〇億二、七九六万七、七〇三円

＊中越沖地震復興基金の申請状況

被災宅地復旧工事、被災者住宅

復興資金利子補給、県産瓦使用屋

根復旧支援、事業所解体撤去支援

補助、中小企業者設備等復旧支援

六億二、九六〇万八、〇〇〇円

総額約一六一億一千万円が入って

きている。

まだ、申請していない人がいる。

市は建築業組合の方がたと相談し

て、七〇〇万円から一、五〇〇万円

の住宅を開発した。資金力のない方が求めやすいようにと思って、県産

杉を使えば一八〇万という1DK五

二〇万円を当初開発したが、不人気

であった。部屋数が少なすぎたのだ。

とくに今回倒壊した古い住宅に入

っている人は家財を沢山もっている。

せめて、2部屋付きの2Kの提案に修正したという。

原子力発電所の状況

全号機休止中

災害ボランティア

累計人数 二〇、六三三人

ボランティアを受け入れない土地

があるのかもしれない。

しかし、住民への聞き方がやはり

あった。

今でも少ないながら復興ボランティア

がいる。仮設住宅からの引越

のお手伝いなど、ニーズがある。支援

自衛隊（人命救出、炊き出し、給

水、物資輸送、ビニールシートか

け、入浴施設等）、内閣府、海上

保安庁、農林水産省、国土交通省、

厚生労働省、気象庁等、新潟県、

他都道府県 市町村 ほか

陸海空の自衛隊が派遣された。

柏崎には海があった。海から水が

供給された。陸の孤島にならなくて

スムーズに物資が供給された。

本場に、多方面から、支援を頂い

た。形ばかりだが感謝状をだし、気

持ちを示したい。

在宅高齢者安否確認

対象者数 九、〇一七人

七月二一日最終確認済み

町内会の自主防災の係だったが、水害の時に、何の役にも立っていない自分を経験した。自分は市役所に駆けつけてしまい、地域に居ないのだ。これではだめである。

今度の地震は休日だったから良かった部分があるが、平日だったら、どうだろうか。柳橋町の町内会長さんの話だと、二六%の人しか町内にいない。ほとんどが高齢者。これが実態なのだ。要援護者の登録に加え、平日、町内に居る人たちの体制作り、休日町内に居る人たちの体制作りが必要だ。

自主防災組織を作ることには先進的な地域があり、それぞれに動き出してはいる。でも、ふだんが大切だ。町内行事に参加したり、ごみ出しの時あいさつをしたり、向こう三軒両隣。「わたしにできること」をしよう。

自助、近助、互助。

公助・官助なんて小さいもの。

がんばろう！輝く柏崎。

さらなる未来へ。

*

白川氏の話の後、すぐに座談会に移った。

「防災無線が十分に聞こえない」という話から入った。非常に身近な発言である。防災無線は全戸配布なのだが、「小さい家にも一個、大きな家にも一個、事業所にも一個で、役に立たない」と指摘があった。

緊急情報はラジオと防災無線だというのに、大事なところで聞こえない。とくに平日の事業所はどうか。私自身もそのとおりだと思う。（設置に際して、対応がちがったという話をあとで聞いた。本当のところは不明である。）「お金を出せばよいの

か」とか、「実は市長に手紙を書いたことがあるとか」座談会らしい話になった。

「道路に倒れた家屋の撤去に対する地域の補償はどうなのか」という、まなまらしい話も出た。

道路に倒れている屋根を、「邪魔だ 邪魔だ」と思いながら、その権利を持つ人が、その場所におらず、連絡も取れず、なかなかできないで、市役所の担当者が困りきっているという逆の話を聞いていたので、驚かされた。取材に来ていた「柏崎時報」の記者の方も、情報を提供した。

「自主防災組織は必要だ」という意見がでる。町内会で数えると、五〇%をちょっと越えたらしい。中越地震の基金で申請すると、自主防災組織作りで補助金が出る。すでに中

越沖地震前に稼動している、試験稼動していた、という町内がある。「い

よいよ中央地区も話を聞きたいと言
つてきている」と代表の栗林さんが
明かした。プライバシー保護法と、
その地域地域の人材が鍵を握るので
はないかと思う。

地域の精神的支柱の、神社の再建
について、話が及んだ。

中越地震の時には二年後から神社
の再建の補助金が始まった。柏崎も
申請できるので申請しようとした矢
先、というところもあったらしい。

補助金のメニューは既にあり、コミ
ュニティーなどには伝えられている
とのことだ。その要望は、すでに
出ているという。

*

座談会に予定していた時間が、も
うすこしで終わる頃になった。誰も

言わないので、東京電力との関係や、
連携に関して質問した。

一拍おいて、「わからない」と答
えが返った。そして「市長は言葉
を選んで発言している」と、彼は答えた。

最後に、「子供の心のケア、お年
寄りの心のケアも大切だ」と、発言
する方があり、「へまなびすと」の運
営委員さんたちは大変だろうが、自
分たちの体験記を伝える仕事を、し
て欲しい」と、まとめてくれた。

*

会からちやうど三週間経つ。有意
義な話をまとめて、聞かせていただ
いて、ある意味、総括できたと感じ
ている。しかし、「実はああだった、
こうだった、こういう不具合がある、
違う」等々、耳に入る。これは、非
常に大きな関心事だから、どうしよ
うもない。

よく咀嚼して、行動しようと思う。
これから、震災住宅の建設に入り、
被災した市民会館が建てられる。

復興が目の前で展開される。もは
や、もとの姿にもどることはできない。

一所懸命に、よりよい姿に向かっ
て復興していくのだ。ひとつでもふ
たつでも役に立ちたいではないか。

大変だが、チャンスだと思ってへま
なびすとin柏崎は、学びつづけて
いくだろう。

夜遅くまで、文章を書いていた。
朝は、五時から夫と海岸へ散歩に
行く。

途中に、仮設住宅があり、非常に
おりこうさんらしきネコが三びき見
える。ちよつと、なでさせてもらえ
ないかなあ、と思っている。

(二〇〇八年七月一日)

平成二十年六月 岩手・宮城 内陸地震

三船照子

六月十四日。土曜日の朝、八時四

三分。朝食が終わり、テレビをつけたまま新聞を読んでいた。チャイムのような音に反応しテレビ画面を見ると、〈緊急地震速報〉を伝えるアナウンサーの声。すぐさま玄関に走り、ドアを開けると同時に、ズドンズドンという強い揺れに見舞われた。

「震源地は、岩手県の南部。震度6強」とは、ニュースで知った。

宮城県北部の栗駒山（栗原市）周辺の被害はすさまじく、崩れ落ちた道路や緑豊かな栗駒山の山肌が大きくえぐられている映像が痛ましい。

十三名が亡くなり、山中の行方不明者十名が発見されないまま、地震発生から三三日目の十六日に搜索が

打ち切られた。県警と消防二百余名

での搜索は、二次被害の危険と隣り合わせのなか、堆積する土砂を取り除きながら続けられてきた。状況次第で搜索が再開されるという。

亡くなった人のなかに、前日、栗原市で行われた「第二回くりはら田園鉄道の資産の保存と活用に関する検討会」に参加していた東京の鉄道博物館学芸員の岸由一郎さんと、地域づくりプランナーの、麦屋弥生さんが、いた。検討会のあと、栗駒山ふもとの「駒の湯」に泊まり、十四日は世界谷地などの周辺を見て歩く予定だったらしい。高山植物のニッコウキスゲが咲き乱れているところである。

地震から二日後の朝、麦屋さんの

名前を新聞で見たとき、一瞬、鳥肌が……。一昨年の秋、麦屋さんが『農村景観を活用した地域交流』という

演題で講演されたテーブルを、私は起こしていた。地域の光を観せること、

観光こそが地域交流産業であるなど、熱く具体的に語る土屋さんは、「各地での実践例などもたくさんおもちの、すてきな人」という印象があった。麦屋さんの栗原市での活動は一年半。地元の人たちと描いた夢、その意志は、引き継がれていくという。

宮城県が建設する仮設住宅六五棟のうち十棟が完成し、十一日から入居が始まっている。山里の穏やかな暮らしが早く戻ることを願うばかりである。

（7月18日）

窓

アレイダさんは、 父ゲバラのようにカッコよかった！

星野 弥生

318号でお知らせしたように、チェ・ゲバラの娘、アレイダ・ゲバラさん(四九歳)が、五月十四日に初来日。二八日までの二週間、日本の各地で講演を行なった。

三月半ばに「アレイダ・ゲバラ招聘実行委員会」を立ち上げてから、二か月を欠く準備期間は、あまりにあわただしく、「大丈夫？」と自問自答。周りからも心配されつつ迎えたアレイダさんだったが、予想を大きく上回る人びとでいっぱい、各会場で、これまた、期待を何倍も上回る内容のお話は、大きな感銘を残した。

チェ・ゲバラが生きていれば今年で八〇歳！ そして一九五九年一月一日の革命記念日も近く、フィデル・カストロが最高権力者の座を降りる、など、キューバが大いに注目される中のタイムリーな来日だった。折しも、日本は「後期高齢者医療制度」なる「姥捨て

山」のような非人間的な政策に国民の大半が不快感をあらわにしている時期。マイケル・ムーアも絶賛の、「キューバの医療」には、いやでも注目が集まる。

アレイダさんには、広島で三回、東京で二回、大阪、神戸、京都で各一回、沖縄で一回と、合わせて九回の大きな集会での講演。さらに、お母さんのアレイダ・マルチさんの本の出版記念会でのトーク、長野県の佐久総合病院でのトーク、そのうえ、国会議員、市民を集めた院内集会、記者会見などを含めれば、二〇回近く、しゃべってもらったことになる。

「二日も休みをくれなかった」との、グチとも恨みともつかないアレイダさんの言葉を、傍らでチクチクと受けながら、心の中で「ごめんなさい。でも、どうしても、たくさんの人に聞いてほしい。キューバのこ



左から、アレイダ・ゲバラさん、星野弥生さん、阿部知子さん

とを知って、日本の現状を捉え直してほしい、と思っているので、赦してね。」と謝っていた。

「疲れも手伝ってちよつと機嫌の悪いアレイダさんをなだめすかしながら壇上に導くんだけど、ひとたび口を開くや、朗々たる声での「アジテーション」のよ

うな語りが始まる。力強いけれど、どこか優しい。そして最後は必ず「歌」で終わる、という「ハプニング」が素晴らしいものだった。

その場の雰囲気、テーマに合わせた歌が、さっと口をついて出る。

なんと、かつこいいい終わり方！「世界で一番かっこいい男」（とジョン・レノンと言った）ゲバラと目もとがそっくりの娘も、負けず劣らずかっこよかった。

休みなく語り続けてくれた講演の内容は、父ゲバラの思い出、キューバの医療、平和など、多岐にわたったが、彼女自身が現役の小児科医ということもあり、医療は最大のテーマだった。もちろん、医療を切り口にして、キューバの社会主義社会、国際主義など、さらに大きな問題へと広がっていったのだが……。

ここでは、五月十七日、東京の明治大学で開かれたフォーラムでの話をもとに、医療と、その背景にある社会主義国キューバの「ものの考え方」について、少し触れてみたい。

スペインからの独立、アメリカからの独立、そして革命……。変革の、どの場面にも、必ず登場するのが、キューバ革命の原点ともいえるホセ・マルティの思

想だ。アレイダさんも、何十回となくホセ・マルティとその言葉・思想に触れた。

「人民は教養を身につけて、はじめて自由になれる」一九五九年の革命達成後、ホセ・マルティがまず取りかかったのは、識字率を上げることだった（革命前は三三%の人びとが、読み書きができなかった）。誰にでも無料で供される教育の普及により、変革は始まった。

もう一つの緊急課題は、公衆衛生。「医療に従事する専門家は、人の聖なるいのちを守る義務を持つています。人間の痛みで商売をしてはならない。だから、革命政府のとった次なる手段は、（すべてのキューバ人に行き渡る無料の医療）ということだったのです。しかし、第三世界の国の人びとが、どうやって医療や教育を無料にすることができましょう。世界銀行やIMFに頼らず、自分たちの社会を変える資金を、どこから引き出せばいいでしょう。それは、『五〇〇年も他の国に搾取されてきた国の、少ないながら持っている天然資源を国有化し、人民のために使う』ということでした。そこから、アメリカ合衆国政府との衝突が始まります。」

アレイダさんは、アメリカ合衆国による経済封鎖、「キューバ製品を買うな」という他国への圧力と制裁について、怒りをこめて語った。

「経済封鎖は、食料や医薬品には適用すべきでない」と想定されていたのに、まず食糧と医薬品に適用されたのです。

十の薬のうち八つはアメリカの研究所で作られており、キューバ人は他の国の人たちと同じように薬を必要としています。経済封鎖法によれば、キューバに薬を売った会社は、五〇〇—一〇〇万ドルの罰金の制裁を受けます。薬がキューバの人々のところに届くまでには、多くの中間業者の手を経なくてはならないので、いったいどれほど払えばいいのでしょうか。これが正當なことですか？ キューバ人は、どんな悪いことをしたのでしょうか。」

アレイダさんは拳をふりあげ、聴衆に問いかける。

「かつては、ほとんど字も読めなかった人たちの国に、今日では、世界の他の地域に住むたくさんの人びとを助けるための専門家がいるのです。例えば私のような女性は、『訓練を受け、世界の片隅にいる人たちと連

帶すべきだ。」と教えられます。『私たちの個人的な幸せをほんのちよつと犠牲にすれば、ベネズエラの私たちの兄弟たちに三万四千人もの医療専門家を送ることが出来るのだ』と。また、『私たちのアメリカ大陸に住む先住民たちに読み書きを教えるというすてきなプロジェクトを展開することも出来るのだ』と。

「いったい、キューバがどんな罪を犯したというのでしょうか。」

アレイダさんの激し語りかけに、私は、思わず、「そうだ!」と相づちを打ちたくなるような、気分になった。

「『よりよく生きるためには、人民は自分の国の富の所有者でなくてはならない、ということを示したから、キューバは罪を犯した』というわけです。『キューバ人は、『喜びと国民主権、自由を持つて生きることが出来る』ということを示したからこそ、『罪を犯した』と、されたのです。だから私たちは、制裁を受けたのです。』

アメリカ経由で入ってくるキューバの情報のほとんどが、『キューバには自由・人権がない。だから経済

的制裁もやむを得ない』というものだ。(考えてみれば、北朝鮮と日本の関係も、こんなもんだ)。これは、まるで逆じゃないか。ブッシュのお題目を真に受けて、キューバを、「悪の枢軸」と信じこむ、日本の政治家たちに、アレイダさんの言葉を聞いてほしい、と心底思う。

ちなみに、不用意に「アメリカ」などと言ってもうが、これは「アメリカ合衆国」と訳さなくてはならない。何回となくアレイダさんが強調したように、「われらがアメリカ」、つまり北はアラスカから南はチリの南端まで、アメリカとは「全アメリカ大陸」を指すのだ。アメリカと、星条旗の国、ブッシュの国は、決してイコールではない。

アレイダさんの言葉を続ける。

「完璧な人間は、いません。でも、キューバの問題を解決できるのは、キューバ人民だけです。他の国の国内問題に干渉する権利は、いかなる国も、持ちません。他の国の人民の、いのちに敵対する行為をとる権利は、だれにもありません。」

そして、アメリカ合衆国政府の偽善性を明らかにする。

「合衆国大統領が、公の場で言いました。『世界中のあらゆるところでテロと闘わなくてはならない』と。

しかし最初のテロリストになったのは誰でしょうか。

合衆国政府は、〈反カストロのキューバのテロリズム組織〉を、合衆国内で経済的に支え続けています。」

そして、七六年にキューバの旅客機がテロ組織によって爆破されたのに、首謀者は無罪放免になったこと。

デング熱菌を蒔かれ、多くの子どもが死んだこと。そして、テロを終わらせるための適切な情報を得ようと

テロ組織に入った、五人の勇敢なキューバ人たちの不法拘留への抗議などが語られる。

医療チームがすっかり政治へシフトしてしまったなあ、と思ったところで、「合衆国大統領が、若者をイ

ラクに送って死なせているとしたら、自国での、このようなテロを、一刻も早く終わらせるべきです。

キューバは、このようなテロに対抗するための、最もいい方法として、医師、教師、エンジニアを、他の

国に派遣し、貧困や飢餓を引き起こすこのような苦しみから人びとを解放することに決めたのです。」と、

ここで「武器や兵隊を送る代わりに、医師を派遣する」という、キューバの「国際主義」につながった。

「キューバ人民は、平和、人類すべての平和のために闘う用意ができています。チェが別れの時に言ったように、「アスタ・ラ・ビクトリア・シエンプレ」勝利の日まで闘い続けなくてはならない。」と、アレイダさんのトークは「かつこよく」締めくくられた。

*

まだまだ記したいことは山ほどあるけれど、第二部の冒頭でトークの相手となった、衆議院議員の阿部知子さんの質問、「なぜ小児科医になろうと思ったのですか」に対するアレイダさんの答えを紹介したい。

「父の影響はありますが、もっと大きな影響を与えてくれたものがあります。私たちは、いつでも受け取ったものに対してはお返しをすべきだ、と教えられています。キューバの人たちは、チェの娘である私に、いつでも愛されていると感じることができる特権を与えてくれました。

一方、私は子どもが大好きです。

ホセ・マルティが言っています。『こどもたちは世

界の希望である。なぜなら子どもたちは、愛されていることを知っているからだ」と。本当にそうだと思う。ですから健康な若者になれるように子どもたちを守ることは、私たちがまず最初にやらなくてはいけないこと。そして、いただいている無償の愛に対して、私がキューバの人たちにお返しができれば、と思ったのです。」

アレイダさんの「お返し」はキューバにとどまらない。彼女は医学部四年の時にニカラグアで一年、その後アンゴラで医療支援活動に従事し、大変厳しい経験をしている（その話をするときのアレイダさんは涙声だった）。そうして、お父さんと同じく「国際主義者」として、国際主義連帯活動に奔走する。

国際主義……なにやら固い言葉に聞こえるが、近頃のわけのわからない「グローバリズム」に比べたら、なんときっぱりとした言葉かと、改めて思う。世界の人たちが、連帯でつながりあうことの大切さのメッセージを、今一度アレイダさんから私たちも「お返し」のおすそわけとしていただいた。

初めての日本、しかも短い滞在なのに、ちよつとした情報を受けると、たちまち理解してしまうアレイダ

さん。最後の集会となった、衆議院議員会館での院内集会で、多くの議員、そして一般の人たちの前で、こんなふうに言っていた。

「最近、お年寄りを困らせるような法律ができた、と聞きましたが、ここまで日本の経済発展を支えてきたのは、このような方がたの労働です。お年寄りたちを守らなかつたら、またその人たちの面倒をみなかつたら、いったい誰がこの国で生産し続けるのでしょうか。」と。

革命後の過程が達成した「キューバの医療」。もともと「持たざる国」が、「国際連帯」という「志」をもつて、それ以上に大変な国を支援していくことができていて、という事実、私たちはもっと学びたいと思う。

「ちつぽけな貧しいキューバにできたことが、あなた方にできないということがあるでしょうか？」

これが、どこの会場でも、私たちに投げかけられた問いだった。

（アレイダ・ゲバラ招聘実行委員会・通訳）

コスタリカ通信 1 「軍隊のない国」から

弁護士 笹本 潤
(日本国際法律家協会事務局長)

コスタリカというと「軍隊のない国」で有名です。私はコスタリカのカルロス・バルガス弁護士の招待により、今年の六月から一二月まで、コスタリカに留学することになりました。

バルガス氏は、五月に幕張メッセで開かれた「9条世界会議」にもゲストスピーカーとして参加し、「9条の理念を世界に広げよう」という強烈なメッセージを発信した方です。「日本の法律家や市民が、もっと世界の平和運動で活躍できるように」ということで、英語やスペイン語の文献を読んだり、コスタリカの政治・文化に触れたりすることが、留学の中心的な課題です。留学の最初のテーマは、「米州人権裁判所」です。

アメリカ大陸には、南北アメリカの、すべての国が参加している米州機構という地域共同体があります。紛争の平和的解決をめざす機構で、一九四八年に、設立されました。

その後、守られるべき人権の種類が列挙され、人権を保護する機関として、米州人権委員会と米州人権裁判所を定めた米州人権条約が一九六九年に定められ、十一か国が批准して一九七八年にその条約の効力が発生し、米州人権裁判所が動き出しました。

この米州人権裁判所はコスタリカの首都のサンホセにあります。私も、このサンホセに滞在し、今は人権裁判所付属の図書館(写真)で、毎日文献を読んだり、

調査・研究しています。中には英語だけでなく、スペイン語の文献も含まれています。

コスタリカは、公用語はスペイン語なので、なかなかすぐにはしゃべれず、大変ですが、ホームステイをしているので、毎日話す機会があり、徐々に、通じるようになってきています。

米州人権裁判所などの地域の人権裁判所は、ほかにヨーロッパとアフリカにあります。

アジアには残念ながらありません。そして、その前提となるアジア共同体などの組織も、まだありません。東アジア共同体や東南アジアの友好協力条約、東北アジアの六カ国協議の枠組みなど、いろいろなアジア共同体論が始まっていますが、アジアでは、是非とも「平和共同体」を、これから何年か、かかって作り上げ、ゆくゆくはアジアにも人権裁判所が設立され、アジアで問題となっている、もろもろの人権事件が裁かれるようになってほしいものと思います。

今後も、留学中の話題など、できる限りお伝えしていきます。



(米州人権裁判所付属図書館)

女性差別撤廃条約の選択議定書の 批准を求める請願を参議院で、全会一致採択

福島みずほ

先日閉会した通常国会において、沖縄選出の糸数けい子さん紹介の「女性差別撤廃条約の選択議定書の批准を求める請願」が、参議院で、全会一致で採択された。

国会のなかで請願が採択されるためには、基本的に、全会一致でなければならない。ということは、すべての政党が、女性差別撤廃条約の選択議定書の批准に賛成しているということである。調べてみると、請願が採択をされたのは、六度目である。ところで、参議院では採択をされているものの、同じような内容の請願は衆議院では採択をされていない。

選択議定書の批准とは、いったい何か。

個人通報制度を認めるということである。

つまり、国内法の手続きを尽くしても救済をされなかった場合に、その当事者は国連の機関に個人通報ができると

いうものである。この個人通報制度が規定をされているのは、女性差別撤廃条約、国際人権規約、拷問等禁止条約などである。

韓国をはじめ多くの国が、この選択議定書の批准をしている。先進諸国のなかで批准をしていないのは、日本とアメリカぐらいである。

女性差別撤廃条約に基づいて個人通報がなされ、審議されたケースは、実はそんなに数多くはない。

しかし、私は、日本の裁判所が、条約や国際人権の考え方から判決を出すようになれば、それは極めて大きなことであり、また、国内において救済されなかった当事者が、国際人権の観点から救済されるようになれば、ダイナミックな動きが起きていく、と考えている。

先日、最高裁判所は、「認知を受けただけでは日本の国

籍を取得できず、両親が結婚する必要がある」という国籍法の規定は、違憲である」と判断をした。この判決は、画期的なものである。今の国籍法は、「日本人の父親が胎児認知をすれば、生まれた子どもは日本国籍を取得できる」のに、「生まれた後に認知を受けても国籍を取得できない」というものである。確かに、生まれる前と後で、区別する理由はよくわからない。

この最高裁の判決は、憲法だけでなく、直接、国際人権規約、子どもの権利に関する条約違反としたことも、画期的なことである。最高裁が、直接条約違反を理由にしたことは、実は初めてである。

婚外子（両親が結婚届けを出さずに生まれた子ども）の法廷相続分を、婚内子の二分の一と決めた民法九〇〇条四号但書については、少数意見も記載されるものの、最高裁では残念ながら合憲とされている。高裁では違憲決定がいくつか出されているにもかかわらずである。

民法は、「憲法に違反する」と、なぜ言えないのか、私は不思議である。

ともあれ、この例のように、国内で救済ができないものも、申し立てれば救済されるようになれば、人権状況は大

きく変わっていく。

ところで、国会のなかで、何度も何度も繰り返し質問をしてきた。「最高裁が反対をしているという意見もあるがそれは本当か」と、法務委員会で質問をしたところ、最高裁判所は、「それはえん罪です。」と答弁をした。

うーん。だとすると、いったいどの役所が、はばんでいるのだろうか。

*

予算委員会で、鳩山法務大臣に質問をした。

大臣は、「司法権の独立に反する。」と、答弁。

「諸外国にも司法権の独立はあるが、多くの国が批准をしており、司法権の独立は理由とならない。」と反論をすると、大臣は、今度は、日本には日本の事情がある旨答弁。おかしい答弁である。

最高裁は、条約を直接の根拠としており、「司法権の独立」を理由とすることは、いかなる理屈からでもない。

一九八八年。二〇年前、私は、ジュネーブの規約人権委員会に、日本の報告書の審査を傍聴に行った。そして国際人権の考え方に勇気づけられた。

選択議定書の批准を、みんなの力で勝ち取りましょう。

〈連載〉台所の科学力！

足もとから科学しよう

第3話 放射能は除去できる？

(物質不減の法則)

松崎早苗

(環境と健康の会代表、放送大学大学院客員教授)

チェルノブイリの汚染は除去された？

チェルノブイリ事故の後、「汚染除去」という文字が新聞に現れました。私は目を疑いました。化学研究に携わっていたので、「汚染除去とは、何らかの化学反応を起こさせて有毒物質を無毒な物質に変化させること」と考えていました。「放射性元素を人為的に無毒化する」、すなわち、「別の元素にする技術」は現存しないのだから、「汚染除去は不可能」なのに、いったいどうするのかしら、と思いました。実際は、汚染された物体をかき集めてどこかに封じ込め、半減期を忍耐強く待つことでした。

放射性元素は放射線を出しながら別の元素に変わります。最後には無放射性の元素になりますが、放射性原子核の出す放射能が半分に減る時間を「半減期」といいます。原発が作り出す放射性元素では、良く知られているように、「ブルトニウムは万年」というオーダー、「ヨウ素は一週間以内」という期間ですが、いずれにしても自然な減衰を待つばかりありません。

「かき集めて封じ込めることは、高濃度の放射性物質が、まとまって存在しているときだけ有効」なことは、言を待

ちません。広く環境中にばら撒かれてしまったあとは、手のつけようがないのです。

爆発したチエルノブイリ原発は、外部を厚いコンクリートで固めましたが、できるだけ高濃度汚染物を狭い範囲に集めるために決死隊が投入され、「原発建屋の上に着いたら六十秒間大急ぎで作業して、走って戻ってこい！」と命令されて、交代しながら作業したのです。それでも何年分の放射能を浴びてしまったのです。

住民が住む近くの高濃度汚染地域ですら、広範囲すぎて汚染除去はできず、住民を排除して、埃止めの散水をするしか方法がなかったのです。まして、遠く離れた地域に降った死の灰は、手の施しようがないのです。

汚染化学物質は除去できた？

しかし、実は、化学物質も、汚染除去、すなわち、無毒化は、それほど簡単ではありません。化学物質といっても水銀など、元素そのものの場合は存在を消すことはできません。これは「物質不滅の法則」という自然科学の法則のため、誰もこれを破ることはできないのです。

田中正造翁が天皇に直訴したことで有名な「足尾銅山の汚染は、煙突から出た亜硫酸ガスと鉍毒でした。煙突からの煙は、遠目には、だんだん消えてゆくようにみえますが、そう見えるだけで、物質は厳然として存在するのです。

亜硫酸ガスは、あたりの山という山を禿山にしてしまいました、そのガスがどんな形になったのか、誰もトレースしていません。

一方、鉍毒は、銅と砒素を含み、下流の田畑に毒を流し込んでいましたが、その汚染除去対策は、放射性物質に対するものと、ほぼ同じです。百年以上も経った現在でも、田畑の土壌を入れ替えたり（耕す深さとして30cmまで）、天地返しをする作業が続いているのです。「今も続いている」ということは、それだけ膨大な予算がかかるということです。それ以外に逃げる方法はありません。「物質不滅の法則」が厳然と支配しているのです。

水俣湾を汚染した、メチル水銀を含んだヘドロも、浚渫して陸に積み上げてあるだけです。漁を禁止して、海水と魚の濃度をモニターしながら、潮流で拡散するのをじっと待っていました。あるいは、底泥が表面から下層に埋め込まれて、再び浮き上がって来ないようにするまで、じっと

待ってきました。その結果、「三年ほど前に漁が解禁になったと新聞に出ました。

しかし、水銀は拡散し、あるいは底泥の下にもぐっただけで総量は不変です。海か、あるいは蒸発して大気中か、どこかには存在しているのです。

*

ダイオキシンのような有機塩素化合物が問題になりました。毒性が極めて強くて分解が遅く、無毒化が非常にやっかいなので、発生させないための対策が採られました。パルプ工業での塩素漂白の取りやめや、ゴミ焼却炉での塩素除去と高温分解・再結合防止対策などに大金が投じられ、発生量を一年間で十分の一に減らすことができましたが、十分の一になったからといって、安心できるレベルではありません。

ダイオキシンより前から問題になっていたPCBも、無毒化の過程で二次汚染が出ることを恐れて、保管（野済み状態もあったと言われるが）されてきましたが、昨年からようやく無毒化対策が動きだしました。二千億円投じられたそうです。これによっても、順調に行って十年間かかるということですよ。

このように、「物質不滅の法則」は、きわめて厳しい法則

であることがわかります。富山県で起きたイタイイタイ病の原因は、カドミウムでした。これが田畑を汚染すると、

米に吸い上げられますので、いま日本では、米の中のカドミウムを測定して一定レベル以上のものは廃棄したり、食物以外に（最近壁紙接着のり用に大量に払い下げられたそうです。米のりだからと安心させられては、かないませんね。）使わせるようにしていますが、カドミウム山から出たこの元素は、消滅することなく「拡散」しているだけです。ときに、稲のように、それを吸い上げて濃縮してしまう生物があります。ところが、人びとは簡単に、「こうこうすればダイオキシンをなくすことができる」というような技術を開発したりします。環境汚染が大きなビジネスチャンスになってから、そのような話が出てくるようになりました。

ダイオキシンを化学的に分解したなら、別の何物かが生まれているはずですよ。その形を明確に示し、かつ、投入エネルギーや装置コストなどの周辺情報を完全に明らかにしなければなりません。そこまで公開される技術は、なかなかありません。一九七六年に、イタリアのセベンで農薬工場が爆発してダイオキシン汚染を起こした有名な事故があります。専門家たちは、最初、汚染土壌をかき集めて焼

却しようと計画しましたが、「二次汚染を恐れる住民たちの、根強い反対にあつて、地下の施設に厳重に保管することになりました。表面から一メートルもの深さまで土を剥がして「汚染除去」された広大な地区は、現在は「自然公園」のような緑地となつていますが、立ち入りは禁止です。濃度が下がってきたら、年一度の公開が実施されたというような状況です。外見的には、とても豊かな自然生態系が保存されているように見えますが、自由に出入りする鳥や動物による拡散の恐れがあります。

チェルノブイリ原発は封じ込めが不十分で、今一度外側に新たな石棺を作らなければならないと言われています。

日本が中国大陸に遺棄してきた化学兵器については、無毒化がどのように進められるのでしょうか？ 日本の化学兵器工場があつた広島県大久野島では、終戦直後に残つていた毒ガス兵器を、米英国軍が命令して、高知県沖の黒潮に捨てたり、島で焼却したり、防空壕のような穴に詰め込んで中和剤で無毒化したとされています。島は現在、国民休暇村になっていますが、私が数年前に訪れたとき、マスタード・ガスの臭いがしたので、環境省に申し入れて一緒に現地調査をしました。まだ残っているのは間違いありません。

研究者は「原発の使用済み核燃料中の放射性元素」を無毒化する？

このように、放射性元素も、有害化学物質も、人間の都合で消滅させることはできません。ところが驚いたことに研究者たちは「発電用原子力炉の燃料棒の中にできた超ウラン元素を分解する」と言い出したのです。つくばなどに、大型加速器という施設がありますが、そこでは電子や水素の核（陽子）を電磁場で加速させてぶつけ合つて、出てくる素粒子を研究しています。

この、装置で加速した粒子を、使用済み核燃料、再処理後の高レベル放射性物質に当てて、核反応を起こさせ、「もつと半減期の短い放射性元素に転換する」というのです。

使用済み燃料の中には、燃え残りのウランと生成したプルトニウムがあり、これを再利用したいと、再処理の道を歩んでいます。その他に使い道の無い放射性核種が、たくさん含まれています。それらの中には半減期数万年以上というような、管理不可能なものがありますので、これを壊そうというのです。「これに加速された粒子を、雨あられのようにぶつけば、核崩壊が起こつて、運がよければ、

半減期数百万年の核種が、数秒の核種に転換するかもしれない」という構想なのです。

しかし、その放射性元素の割合は、燃料中で極微量です。加速された粒子が、本当に当たるのでしょうか？

加速器の中で加速される粒子の大きさは、非常に小さく（水素の原子核である陽子とすれば 1.6×10^{-24} グラム。アルファ粒子としても、その四倍）、それをべつの原子核にぶつけようとしても、普通は、はじかれてしまつて、中に入り込む確率は大変低いのです。

確率が低い現象でも、世界初の発見をねらつた実験には、研究者は情熱を傾け、「フル稼働すると一日で一億円の電気代がかかるという加速器」でも動かします。国民は崇高な科学の研究にまい進している研究者を敬つて、それだけの税金を使わせてあげているのです。

このような装置を、ゴミである使用済み核燃料の半減期を縮めるために本気で使うのでしょうか？ 絶対にあり得ないことです。それでも、使用済み核燃料の貯蔵所を見つめることができないので、研究者が幻想を振りまけば、多額の予算が出るのです。

この件は一〇年以上前にアドバルーンが上がり、新聞に

載りましたが、今はまったく聞きません。研究者の倫理が問われ、同時に、納税者の見識が問われる問題であります。

宴のあと

人類は、地下に埋め込まれていた物質を掘り出して、便利のために利用してきましたが、地下に固まっていたものを地表に広く散らばしてしまい、後始末ができません。

地下にあったときと地表に散らばったときとで、科学的に何が違つているのでしょう？

科学の法則でいうと「エントロピーが増大した」のです。エントロピーを減少させることは、できません。それは、「永久機関が成立しないこと」と同じです。

エントロピーを減少させる機能を備えているのは、「生物のからだ」だけです。このことだけでも、生物は、尊敬するに値します。

「その機能を真似たり利用したりすれば、良いのではないか？」という技術信仰の聲が、またまた聞こえますが、それは不可能です。

このことは、いつか機会をみて書くことにしましょう。

輝け9条!世界へ未来へフエスティバル2008

人間が
人間らしく
生きられる
そんな国に
そんな世界に
したいもの
日本だけが
平和であればいい
自分だけが
幸せであればいい
そんな風に思いたくない
9条のころを
真に大切にするために
日本国憲法はあると
思いたい



みんな
夢をみよう
みんな
夢を実現しよう
世界から
戦争がなくなる
そのために
戦争放棄の9条を
世界に広めよう
飢える人がいなくなり
すべての人が
希望がもてる
そんな国を、世界を
実現するために
今年も
みんな
集まりましょう
考えましょう
楽しみましょう



9条をまもって平和なくらし

と き: 2008年10月18日(土) AM 10:15~PM 6:00 (開場 AM 10:00)

ところ: きゅりあん (品川区立総合区民会館) (連絡先: 9条フェスタ2008事務局 TEL 03-3442-2333)



野坂昭如「戦争童話集 沖縄編」

『ウミガメと少年』

作 野坂昭如 絵 男鹿和雄

スタジオジブリ編集・発行 徳間書店刊

B5変判七八頁一七〇〇円＋税

二〇〇六年に吉永小百合さんの朗読CD「第二楽章 沖縄から」が広島―長崎―沖縄と続く三部作の最終章として発売されました。この本は、その朗読の原作「ウミガメと少年」に、男鹿和雄氏の絵を添え、さらに草川敦子さんの英訳文を加えた、多相的な絵本です。

野坂昭如氏の原作は二〇〇一年に『野坂昭如戦争童話集 沖縄編』として講談社から出版され、この時は黒田征太郎氏の挿絵が使われていました。今年の四月末にあらためて出版されたのは、CD三部作に添えられた男鹿和雄氏の原画三六点が、都立第五福竜丸展示館で公開されることになったためと思われます（六月二四日より八月一九日まで）。

男鹿和雄氏は、アニメーション映画の背景・美術や美術監督に携わり、一九八八年の『となりのトトロ』以降は、近日公開の『崖の上のポニョ』まで、主にスタジオジブリで宮崎駿監督に協力して活動しています。CDに添えた絵は、吉永小百合さんからの直接の要請に応じて取り組んだそうです。さて、先に「多相的」と書いたのは、この本が誰に向かって編集されたのか、についてです。男鹿さんの絵は、それをじっくり眺めるだけで幼児も十分楽しめます。文は、小学高学年生向けに書かれていますが、ゆっくり読めば、大人にも魅力的です。一番薦められるのは、一緒に絵を愉しんだ後で、親が子供に向かって読み聞かせることでしょうか。野坂さんの文章には想像力を働かせる空白が残されています。吉永さんほどに上手でなくとも、読み聞かせた子供から「……って何」「どうしてなの」といった質問を呼び起こせば、それこそ最高でしょう。（牧 梶郎）

トトロの森の画家が 福竜丸と出会う

沖縄の海岸に脚を産むウミガメと、
戦争でひとばちになつてしまった
少年の出会いに、
胸がいっぱいになりました。
この物語を、
戦争のない世界を願いながら、
朗読し続けようと思います。

吉永小百合



[特別展] 男鹿和雄の描くヒロシマ・ナガサキ・オキナワ

ウミガメと少年 第五福竜丸と海へ

「忘れてはイケナイ物語がある」

野坂昭如戦争童話集・沖縄編より

「語り継ぎたい、物語がある」

吉永小百合原爆詩朗読・ヒロシマ・ナガサキ編より



新刊「ウミガメと少年」野坂昭如作・男鹿和雄絵（徳間書店）

6月24日(火)～8月17日(日) 都立第五福竜丸展示館 入館無料



沖縄大がアメリカに

占領された日

黒澤亜里子編

青土社刊

四六判二八八頁一六〇〇円＋税

宜野湾市の沖縄国際大学を訪ねた。正門を入ってすぐに、石碑が建つ。「真の自由 自治の確立」と刻まれた文字は、大学という場の意味を端的に表している。

門の近くに公園のような新しいスペースが作られていて、コンクリートの壁の一部が展示されていた。四年前のヘリ事故の痕跡である。事故当時の煤けた壁の色よりかなり白っぽいためだろうか、あの焼けこげた壁が、目の前のコンクリートであることが、どうもし

っくりこない。沖縄大の学生も、この四年間で、ほぼ入れ替わった。何人かの学生に声を掛けたが、「今年入学したのでよくわかりません」などと、コミュニケーションがあることを知らない学生もいた。

二〇〇四年八月一三日に起きた米軍ヘリ墜落事故。本書は事故と、それに続く「七日間にわたる大学構内の占拠」という、あまりにも異常な出来事について広く社会に問題提起したいという目的で編集された書である。

事故の前年の二〇〇三年十二月、米国防長官ラムズフェルドが、普天間基地を査察した後、「この基地は非常に危険である」と発言したが、発言通りの事故が実際に起きてしまった。墜落したヘリと同型の機種の事故記録を詳細に調べて報告している一文もあるが、イラクやアフガニスタンなど、さまざまな場所で墜落している実態は驚くばかりである。ベトナム戦争時代から使用している、最も古い老朽化した危険なヘリコプターであるという。死者が出なかったことは、まさに奇跡であったことが、改めてわかる。

事故は、さらにもうひとつの深刻な「事件」へと続く。加害者である米軍が、こともあろうに「真

の自由と自治の確立」を謳う大学の構内を占拠し、大学職員はじめ、報道関係者、住民、消防隊員、県警などすべての地元関係者を排除。周辺一帯を嚴重に封鎖して、軍の管理・統制下に置いたのである。

何が自治か。何が自由か。日頃、住民の権利や個人の尊厳などを議論する学問の場であるというのに、自分の敷地内で起きた事故について何も知らされないことは、大学関係者にとって自身のアイデンティティを否定されたのも同然だ。米軍に武力占拠され、治外法権状態に置かれたことのショックを、編者の黒澤亜里子さんは「『基地問題』というより、身体レベルの問題」と表現している。

大学の私有物である土壌や建物

外壁の壁の煤、事故現場近くの樹木なども、無断で持ち去る米軍の行動を、多くの人が目撃した。

土壌などを持ち去った理由としては、劣化ウランに比べても、さらに危険な猛毒放射能だといわれるストロンチウム90の汚染隠しであろうと、専門家は推測している。しかし、すべての科学的な情報は、沖縄側にはない。加害者である米軍が情報を占有しているのである。今年二月、北谷町で米兵による女子中学生に対する性犯罪が起きた。その後も米兵や米兵の家族によるタクシー強盗致傷事件などが次つぎ起こっている。一連の事件との関連で、米軍人の基地外住居の問題が浮上した。基地の中の宿舎に「空き」があるというのに、

雨後の竹の子のように、基地外に外人住宅が建てられている。軍事基地という巨大な暴力は、やすやすとフェンスを越えて県民の日常に入り込んでいたのだ。市民の安全が脅かされようと、軍の論理が優先される沖縄の現実。米軍基地がらみの事件・事故が起きるたびに怒りや抗議の声が挙がるものの、基地は変わらずに存在している。そのことが、忘れてはならないはずの基地の侵略性を記憶の向こうに追いやってしまうこともある。

ヘリ事故直後に「沖縄からの緊急報告」として編まれた本書だが、四年を経た今、いよいよ読まれて欲しい。「軍事基地との共存」がいかに危険なものであるかを検証し、認識するために。

(山城紀子)

米国産牛肉に危険部位

伊藤忠が輸入した米国産牛肉に〈危険部位〉の脊柱が入っていたのを、四月二日、吉野家が発見した。購入は〇七年八月。残り六九九箱には問題がなかったが、廃棄処分に。農水・厚労両省は、当該工場からの輸入を停止、米政府に調査を要求した。輸入の全面中止は、行わない。

沖縄で、米軍化学弾二二発を発見

防衛省は、四月中旬、沖縄県浦添市で自衛隊が不発弾として回収しようとした米軍の追撃砲弾の中に、化学弾の可能性がある二二発を発見。化学兵器の可能性があり、米軍に照会を。

国交省諮問機関が淀川ダムに「待った!」

ダム推進の国土交通省が建設をすすめている淀川水源の四つのダムに、国交省の諮問機関から、「ダム建設より、堤防の補強をすべき」との意見書が出た。

根拠の一つは、ダムの建設費が高いこと。四つのダムで三、八〇〇億円。計画より八二〇億円もふくらんだうえ、活水効果をあまり期待できないこと。ダムの造成よりも、危険な堤防の造り替えのほうが急務、とわかったため。

国交省がダム建設にこだわるのは、「始めた以上は、というメンツ」と、「注ぎ込んだ金額のため」だが、流域委員会の声が重視された。

千葉・四街道市、住民投票で市民交流施設建設を中止

千葉県四街道市が市有地に計画した「地域交流センター」は、「まちづくり交付金」から十二億五千万円を受けることになっていたが、〈市民ネット〉など主婦を中心とする住民の反対で住民投票を実施。その結果、交付金を返上、建築

を中止した。

反対の理由は、「一一〇〇席の市文化センターが既にある。子育て支援や教育の充実こそ必要。一億円で保育園ができ、福祉バスを、全市域に走らせることができる。」など。決定後、まちづくり交付金の四割は道路特定財源と判明。同財源が道路以外に転用されている例が全国にあることも判明した。

力士暴行死一年、変わるか相撲協会

傷害致死罪で起訴された前時津風親方の公判準備が進むなか、「弟子が悪いことをしたら、しごくのは当たり前」と開き直った間垣親方(二代目若乃花)は、一夜明けて前言を取り消し、「今後は違う指導をしないといけない」と謝罪したが、角界での暴力に対する温度差は歴然。

「指導はまず言葉で」は、今は通用しない。生活態度の悪い者は必ずいる。「破門」が最適では——という意見の反面、「指導せずに辞めさせてしまえばいいのか」と悩む親方も、少なくない。「破門できない一般家庭の親」の悩みも、似たりよったり。

諫早湾干拓事業訴訟、「堤防の排水門を五年間開放、原因説明を」と、判決は国に要求

潮受け堤防によって漁場の潮流が鈍化。赤潮プランクトンの発生で貝類が減少など、漁業の受けた被害は大きい。

「干拓地での営農と、諫早湾や有明海での漁業が持続的に両立するための開門調査」を命じた判決に、地元では喜びの声。

増え続ける「自然葬」と、その対策

日本では法的に認められているのは墓地葬だけだったが、九一年に設立された〈葬送の自由をすすめる会〉が、相模灘で散骨による初の自然葬を行なって以来、目覚ましい広がりを見せ、発足時二〇〇人だった同会の会員は一万二千人。実行した自然葬は一三〇〇回を越えた。年間一〇万人の死者の一割は、自然葬と推定されているが、現在の法律では、遺体や焼骨の埋蔵は、墓地以外では禁じられている。土・火葬などの遺体処理の公的規制は当然だが、自然葬も含めた「葬送基本法」の制定が叫ばれ始めている。

十月から「政管健保」は「協会けんぽ」に変わります

政府管掌健康保険は、現在、国(社会保険庁)が運営しているが、平成二〇年十月一日から、新たに、全国健康保険協会が設立され、協会が運営することになる。

この協会は、〈非公務員型の法人〉として新たに設立される保険者であり、職員は公務員ではなく、民間である。

現在、政府管掌健康保険に加入している人は、新しい被保険者証に順次切替えられるが、切替えが完了するまでは現在の被保険証でOK。

十月一日以降に新しく加入した人には、協会から、新しい被保険者証が送られる。

なお自己負担の割合や、高額医療費の負担限度額、傷病手当金など、健康保険の給付の内容は、従来と変わらない。

国際女性の地位協会・会長、山下泰子さんに

〇七年七月、設立七〇周年を迎えた国際女性の地位協会。会長・赤松良子さんは、名誉会長に。常務理事の山下泰子さんが会長に就任した。

「サミット粉砕デモ」禁止に、全国各地で怒りのデモ

「サミット粉砕！ 団結勝利！」

洞爺湖でのサミットを目玉に、〈反論無用〉の体制を固めようとする国の体制に、札幌で、東京で、抗議のデモが。

アジアで、相次ぐ大災害

五月二、三日、ミャンマーでサイクロン(被災者二五〇万人。五月十二日、中国・四川省で、マグニチュード8の大地震(死者三万二四七六六、負傷者二二万一〇七人)。余震による二次被災者もあり、日本政府は救援隊を派遣。民間からも救援基金のカンパが相次いでいる。

反対・抗議のなか、MOX燃料輸送を強行 もんじゅの運転再開

一九九五年十二月のナトリウム漏れ事故以来、十三年間停止している高速増殖炉(もんじゅ)を、十月に運転再開するため、日本原子力開発機構は、五月十六日、取換え用

のプルトニウム・ウラン混合酸化物燃料(MOX燃料)を、市民の反対・抗議行動のなか、大型トラック三台で強行搬入。原子炉起動前に、炉心の燃料一九八体を、「もんじゅ」と茨城県東海村の原子力機構施設に保管している燃料」に、交換した。

原子力空母の配備及び安全性を問う 住民投票条例案、またも否決

五月十六日、横須賀市議会は、賛成八、反対三二、棄権一で、五万二千名にも及ぶ反対署名にこめられた〈市民の意志〉を、市長と議員で否決した。

〈原子力空母化の是非を問う住民投票を成功させる会〉は、直ちに遺憾声明を発表、「本日新たな始まりとして、運動をさらに広げていく」決意を表明。今後とも反対運動を続ける。

熱く燃えた〈9条世界会議〉

五月の連休に、千葉・大阪・広島・仙台の四か所で開かれた〈9条世界会議〉には、合計三万人以上の参加者が集

まった。千葉・幕張メッセでは、定員七千人に一万五千人が行列をつくり、三千人が入場できず、大阪でも、五千人の会場に八千人が集まるなど、各会場とも大盛況だった。

海外三一の国と地域から一五〇名以上の活動家に参加。ノーベル平和賞受賞者や、ハーグ世界平和市民会議の中心人物、イラク反戦の元米兵など、各国の法律家や平和運動の活動家が、「武力では平和はつukれない。9条こそ世界平和の共有財産」と、一致して表明。「戦争を廃絶するための9条世界宣言」を採択した意義は大きい。

この会議は、幕張だけでも六千万を超える巨大プロジェクトだっただけに、市民運動を無視しがちだったマスメディアも報道したため、今後の運動の発展への、大きな力となったことも、大きい。各地の〈あこら〉からも、多数の会員が参加、多くの感動を得た。

会議の概要と感想は、「あこら」320号で特集する。

原子力空母の母港化、差し止め請求、棄却される

横須賀港を原子力空母の母港とするために行われている米海軍横須賀基地浚渫工事の差し止め訴訟(首都圏の六三五

人が提訴)は、五月十二日、横須賀地裁、横須賀支部で開廷。

小野 剛裁判長は、「工事の公共性・公益性も考慮すると、事前に差し止めなければならないほどの具体的な健康被害などの危険性があるとは言えない。工事に伴う環境汚染が起きる証拠もない。」と判決。原告は、直ちに控訴した。

沖縄復帰三六年5・15集会に 本土や韓国からも多数の参加

「沖縄の本土復帰は、沖縄の基地化だった」と、沖縄各地で開かれた、恒例の5・15集会。

今年は、韓国の人気民衆歌謡グループ「コッタジ」が、コーラスでアピール。フォートジャーナリストの李時雨(イ・シウ)さんが、「米軍による軍事政策と演習には国境がない」と、「佐世保基地で毎朝八時に、星条旗、日章旗、国連旗が掲揚されている情況」を報告。

「日韓両国の基地には、科学兵器・劣化ウラン弾薬を集結、駐韓米軍も駐日米軍も、国連軍司令部の名前で統合された完全な戦闘組織であり、韓・日の平和運動は、〈連帯〉ではなく〈連合的組織体〉として発展すべき。」と訴えた。

後期高齢者医療制度に、市民の怒り噴出！

「七五歳以上の高齢者」を、健康保険組合や国民健康保険から切り離す「後期高齢者医療制度」が実施され、「保険料は年金から天引き。主治医は一人に限定」に、高齢者はもちろん、ほとんどの市民から、すさまじい怒りの声。

「〈新老人党〉でも結成すれば、次の選挙では圧勝！」の声も……。

内閣支持率が二〇%を割った政府は、さすがに、①家族に扶養された高齢者二〇〇万人の保険料免除措置の延長」②「70〜74歳の窓口負担軽減の延長」③基礎年金(月額六万六千円)以下の低収入者の保険料負担」という軌道修正を打ち出したが、現役世代の負担増となるこの修正案にも不満が続出。野党四党は、「制度そのものの廃止案」を国会に提出した。

乱獲で激減、水産資源

「魚を食べる日本食はヘルシー」が、世界に喧伝されて、欧米や中国の「魚の需要」は急増する一方。米国は、国連海洋

法条約に基づいて各国が制定する漁獲可能量(TAC)を、一五〇万トンから一氣に一〇〇万トンに減らしたが、「幼魚を獲ることを規制しないかぎり、魚資源は、なくなる」との危機感が、世界に広がっている。

原油高騰で漁業もピンチに

原油の高騰と、市場価格の変動で、連休前後、ガソリンの価格も大幅に動き、各地で長い行列が出来たが、漁業はガソリン不足で、特に深刻な影響。イカ漁など一斉休業。

相撲協会、外部理事採用へ

時津風部屋の力士暴行事件で、再発防止のために外部の有識者採用などを求められていた相撲協会は、七月二五日、文部科学省に、再発防止策を提出。①力士出身の親方十人で構成していた理事及び監事に外部有識者を登用。②土俵の内外を問わず暴力を禁止。③けいこ場から竹刀や棒を撤去。暴力があった場合は、協会主導で「調査や関係者への処分を行なう」ことを明記した。

療養病床、二二万床は存続

高齢者の医療費抑制のため、厚労省は三五万床の療養病床を一八万床に減少する方針を打ち出したが、「受け皿となる介護施設の不足で患者が行き場を失う」との声が多く、後期高齢者医療制度への批判も強いため、とりあえず、四万床をプラス。

増え続ける高齢者の自殺

警察庁の発表では、〇七年の自殺者数は、三万三、〇九三人。十年連続で三万人を超え続けているが、そのうち六〇歳以上が、十年連続で一万人を超え、昨年は一万二、一〇七人。自殺者の三六・六%を占めた。

高齢の独り暮らしや夫婦だけの世帯がふえ、情報からも切り離され、医療の場にも福祉の窓口にも現れず、貧困や社会的孤立のままに死を選ぶのでは、と精神科医は推測。「対策は急務」と警鐘。

教員採用で教育長が「口利き」

大分県の教員採用に際し、複数の教育長が「口利き」をしていた事実が発覚。教員採用は難関で知られるだけに、大分県以外でも類似の事実があったのでは、と、全国に波紋が広がっている。

「またも日米軍需産業がらみ？ 社団法人理事が敗訴

脱税・所得税法違反の疑いで逮捕された社団法人「日米平和・文化交流協会」の秋山直紀専務理事が、総額一億七千万円の支払い命令を受け、そのうち七千万円は敗訴が確定したのにもかかわらず、支払い命令を無視し続けていた事実が発覚。先日の防衛庁次官の不正事件ともども、「軍需産業にからむ甘い汁」がクロースアップされ、「防衛庁の予算と決算を徹底的に洗え！」の声も高くなった。

「寝たきり母」殺害の看護師に、懲役九年

青森県弘前市で、一月に「寝たきりの母（八二歳）」を殺害した看護師の娘（五九）に、青森地裁、渡辺英俊裁判長は、「母親の〈死にたい〉という言葉は口癖で、〈死を望んで

いなかった」と、殺人罪を適用。懲役九年（求刑十二年）を言い渡した。

東京・秋葉原で〈通り魔〉シヨック

六月四日、午後〇時三〇分過ぎ、東京都千代田区外神田四丁目、神田明神通りと中央通りが交叉する日本一の小売り電気商店街、通称〈秋葉原〉で、一台の二トントラックが、神田明神下交差点から、赤信号を突っ切つて飛び込み、横断中の歩行者を数人、はね飛ばした。

トラックは、対向車線で信号待ちしていたタクシーに接触して停車。降りてきた運転者は、倒れた被害者や、救援に駆けつけた人びとを、両刃のダガーナイフで刺しまくり、男性七名、女性一名が死亡。七年前の大阪教育大付属池田小児童殺傷事件と同じ日の大惨劇になり、国外にも一斉に伝えられた。犯人はサイトで犯行を予告していた。

現場には、その後、献花台が置かれ、八十を超える献花が連日続いたが、四十九日の七月二八日、献花台は撤去された。

ダガーナイフは、その後、販売禁止になった。

物価、十五年半ぶりの「伸び」続く

食パン、チーズ、小麦粉、バターなどが急騰、トヨタも乗用車の一部の値上げを発表。夏の行楽にも、かげりがある……。四月、五月の物価上昇で「買いため」に走った反動で、六、七月は消費が横ばい……という楽観論の反面、値上げは収束しないという「景気瀬戸際論」も浮上している。

G8サミットに先行、「先住民民族サミット」開催

七月二～四日、北海道平取町や二風谷で、^{にふたに}先住民民族サミットとして、アイヌモシリ2008が開催され、北海道のアイヌモシリ、沖縄のウチナンチュはじめ、台湾、バン格拉デシユ、ニュージーランドなど、十二か国、二十二民族、延べ一五〇〇人が参加した。

〔惜別〕

岡部伊都子さん 随筆家の岡部伊都子さんが、四月二十九日、肝臓がんのため八五歳で亡くなられて二か月余、京都をは

じめ全国で「偲ぶ会」が開かれている。

東京は、七月六日、新宿の中村屋本店に、落合恵子さんはじめ、生前の岡部さんから多くの〈贈りもの〉をいただいた人びとが集い、岡部さんを偲んだ。

大阪・立売堀のタイル問屋の「こいさん」として生まれた岡部さんは、病弱のため女学校を中退。「この戦争は間違っている。こんな戦争で死ぬのはいやだ。」という婚約者に、「私だったら喜んで死ぬ」と送り出し、沖縄戦で失った。自らを「加害の女」と呼び、責め続けた岡部さんの、戦争を憎み平和を求める原点は沖縄だった。

結婚、離婚を経て、一九五四年、ラジオ放送「四百字の言葉」で執筆活動を開始。以後五十年余の間に「おむすびの味」から「清らに生きる」まで計一三四冊もの著書を、世に送り出した。

病弱なご自身のありようをそのまま受けとめながら、あらゆる差別とたたかい続けた岡部さんを、「たたかうべきときはあの弱い体で絶対に逃げない人だった」などと、ゆかりの方がたが信念を貫いた姿勢をたたえた。

沖縄から駆けつけた海勢頭^{うみせじどやぶ}豊さんの歌声が響き、岡部さんの沖縄への深いおもいが心にしみた。

(光)

会と催し

首都に広大な他国の軍事基地がある国

調布（憲法ひろば）第三三回例会では、四月下旬、マイクロバスで、横田および砂川の基地を見学してきました。

（ひろば）の世話人でもある案内役の富永信哉さんは、私立中学・高校の社会科の先生。簡潔でわかりやすい解説を聞きながら、車窓から旧米軍調布基地、府中基地（現・自衛隊府中駐屯地）跡を見て、旧陸軍立川飛行場・旧米軍立川基地跡へ。立川市の防災施設のほか、自衛隊、内閣府、国土交通省など国の施設が建ち並び、関東大震災級の地震等で首都機能が麻痺した際には、すぐにここへ移転するシナリオが作られているとのことショックを受けました。

多摩地区が変貌をとげはじめたのは、一九三一（昭和六）年の満州事変以後。一九二二（大正十一）年に作られた立川飛行場は、当初は民間機が利用する飛行場でしたが、三三（昭和八）年には民間機はすべて追い出され、軍専用。三五（昭和一〇）年に、陸軍航空技術研究所をはじめ、

陸軍航空工廠など、軍施設が設置され、滑走路も二千メートルに拡張。そして、敗戦後の四六（昭和二一）年より、米空軍の輸送基地として整備されました。

五〇（昭和二五）年に朝鮮戦争が始まると、ジェット戦闘機が使用できる滑走路の必要性が高まり、さらなる拡張工事が計画された。それが砂川でした。五五（昭和三〇）年、日本政府は米軍の立川基地拡張を受け入れ、基地の北側、五日市街道ぞいの接収にあたりましたが、砂川町長や町議会は反対を表明。労働組合、学生らの支援を受けて、反対運動を展開。翌五六年、警官隊と地元住民、支援の労働組合、学生らが激突し、千人以上の負傷者を出す惨事に。政府は世論の厳しい批判を受け、測量中止に追い込まれました。

その後も地元住民の粘り強い反対運動が続けられ、一九六八（昭和四三）年、米軍は、ついに基地拡張を断念しました。先日、新聞報道されたアメリカの公文書で、五九年の砂川一審判決（米軍駐留は憲法違反とした伊達判決）に衝撃を受けたアメリカ政府が、日本の最高裁判所に

直接圧力をかけた事実が発覚しましたが、アメリカがこの判決をいかに重く受け止めていたかを物語るとともに、日本政府がアメリカに屈従し、基地を存続・拡大させて、今に至った、歴史の転換点だったことを強く認識させられました。

再びバスに乗り、横田基地へ。途中、拝島の駅で、「新横田基地公害訴訟団」代表幹事の山野芳一さんに同乗していただき、横田の現状について解説を受けました。

横田基地は、嘉手納、三沢に次ぐ日本国内三番目の基地面積を持ち、四一町（福生市、武蔵村山市、立川市、羽村市、瑞穂町）にまたがっている。米軍は立川基地の拡張を断念すると同時に、横田基地の機能を拡大。朝鮮戦争時には、B29などの米軍戦闘機が朝鮮半島へ向けて出撃。朝鮮半島で使用された爆弾の八〇％は横田基地から運び出された、といいます。六〇年代後半のベトナム戦争では、F4ファントム戦闘機が戦場に飛び立つ基地として、重要な役割を果たしました。

一九七三（昭和四八）年、日本側が一千億円以上の経費を負担し、関東地方に散在していた米軍の施設を横田基地

に集中するという「関東計画」が決まり、多摩地区にあった立川基地、大和基地、府中基地、調布基地（関東村）などの機能も、横田に集中することになりました。

この計画に対し、東京都や周辺の市町は、「横田基地の機能強化と恒久使用につながる」と反対しましたが、七四（昭和四九）年には、在日陸海空三軍の調整を主な任務とする在日米軍司令部および日本や韓国の米軍を指揮する第五空軍司令部が置かれました。

面積的にも機能的にも巨大化した横田基地には、四千人の米軍・軍属、その家族六千人、合計約一万人のほか、日本人従業員約二千二百人が働いています。フェンス沿いに見た基地の中には、広びろとした敷地にゆったり建てられた将校用の住宅（寝室四、浴室三、十八畳の食堂、三三畳の居間）などがあり、年間二千億円を超える、私たちの貴重な税金で賄われる米軍への〈思いやり予算〉と、年々強化される社会保障費削減による国民への痛み押しつけの許し難い構図を、憤慨とともに考えざるを得ませんでした。

瑞穂町にあるスカイホールの四階展望台からは、広大な横田基地のほぼ全容が、春霞の中に眺められました。長い滑走路では、小型機がタッチアンドゴーを繰り返し、これ

がジェット戦闘機だったら、その騒音は、耐えがたいものだろうと想像され、沖縄や厚木へ、思いを馳せたことでした。

訴訟団の大野さんからは、騒音公害訴訟のほか、燃料流出による環境汚染(地下水汚染等)についてもお話を伺い、あらためて基地が存在することで引き起こされる様々な被害影響を考えさせられました。このような広大な他国の軍事基地が、とりわけ、首都にある例は世界になく、私たちは沖縄と共に、そのことを強く意識する必要があるのでは、ないでしょうか。

この後、バスは東大和南公園にまわり、市民の努力によって遺された旧日立航空機変電所の、空襲によるまなましい砲弾の傷跡を間近に見て、戦争の醜さ、愚かさを痛感しました。そしてその前で無心に遊んでいる子どもたちの姿に、「普通に生きることのできる日常を、世界中で実現しなければならぬ」と、心に誓ったことでした。

(調布憲法ひろば世話人 三宅征子)

「ぶっとばせるぞ改憲!」集会

五月二日、東京・飯田橋のしごとセンター講堂で「ぶっ

とばせるぞ!改憲」集会を開催しました。

「攻めの改憲阻止闘争」を、いかに闘うのか、事前の発言者会議で白熱した討議を行い、講演者・スタッフ一同が気持ちを一つにして集会にのぞみました。

二〇〇人を超えて満杯になった会場からも、積極的な発言が相次ぎ、かつてなく盛り上がりました。私たちは、この5・2集会をステップにして、今年の8・15集会に臨みたいと思っています。

集会は三本の講演と、二つの現場からの報告、そして、会場からの発言と、盛りだくさんでした。

*

この集会の成功は、青年労働者の感情をストレートにぶつけた司会なくしては、ありえませんでした。

司会は福祉労働者連帯ユニオンの永野佳世子さん。「敵の攻撃に、私たち労働者・市民のもっている力のすべてを鮮明にして、労働運動を徹底的にやりきること、改憲を絶対に阻止していきたい。そういう思いが、職場や地域や、国境もこえて、みんなで(ともに生きていきたい社会)をつくることになる。「これこそ本当に革命だな」って思います」と、冒頭にアピールしました。

主催者の8・15実行委員会の葉山岳夫弁護士は、「改憲阻止とは、労働者が生きるのか、戦争で殺し殺されるのかをかけた闘いだと思います」と提起して、改憲国民投票法案にもとづく憲法調査会の動きが水面下で進められていることに警鐘を乱打しました。

*

三つの講演の冒頭は、平和遺族会全国連絡会代表の西川重則さんの「憲法調査会、海外派兵恒久法、共謀罪——国会報告」です。

西川さんは、石破防衛大臣が、「イージス艦あたこの漁船撃沈事件」や「守屋防衛事務次官接待疑惑事件」などをひきおこして、辞任するしかないのに、「防衛省改革」の立役者として防衛大臣に居座り、恒久派兵法案を進めようとしていることを、怒りをこめて弾劾しました。

憲法審議会をめぐる動き、共謀罪をめぐる動きを紹介した後、西川さん自身が、一九九七年の「日米安保ガイドライン制定」をめぐる政府の動きに危機感を抱いて、以来、一日もかかさず、国会傍聴を続けていることに触れて、「私は、時間があるから傍聴しているわけではありません。一九三〇年代に戻ろうとしている日本の状態を、正確に、

皆さんにお伝えしたいだけだ」と訴えました。

*

次に講演に立ったのは、〈うないねっと・コザ〉代表の桑江テル子さんです。

桑江さんは、「沖繩はなぜ怒っているのか」と題して、昨年九月二十九日、十二万人が決起した県民大会の問題を、まず、とりあげました。

そして、「〈沖繩戦〉の記述で軍の関与を否定した教科書検定の白紙撤回を、なぜ沖繩県民は要求したのか」を訴えました。「軍隊は、いざという時には、年寄りや子どもや障害者や、足手まといになる者は、切り捨ててるんです。決して国民を守るものではありません」

「教育の力は恐ろしい。教育のやり方によって、国民を、どのようにでもリードしていける」「沖繩は、本土を防衛するための捨石だった」と訴え、「これを、沖繩の人たちは、自分たちの体に刻み込んだ、忘れようにも忘れられない体験として、誰もが知っている」ことを強調しました。

そして、二つ目の怒りとして、二月十日に起こった「米兵による少女暴行事件」のことを訴えました。九五年九月に、同じような事件があり、八万人余りが集まった県民大

会が開かれ、再発防止を誓いながら防げなかった。いくら米軍が「よき隣人」でありたいと言いつつ、（こうして犯罪を、繰り返して生み出す構造をもっていること）を告発しました。

「兵士たちは、新兵の教育で訓示を受けるとき、『これまでの価値観をすべて捨てろ』と、たたきこまれる。上官は、新兵の価値観をいっさいそぎ落として、軍の命令に従わせ、人殺しが自由にできるウォーマシンに変えていく」と訴え、海兵隊そのものを撤退させるしか解決の道がないことを、明らかにしました。

*

三つ目の講演は、「改憲阻止の先頭に立つ」という（憲法と人権の日弁連をめざす会）の、高山俊吉弁護士のお話です。

高山俊吉さんは、今年二月の日弁連会長選挙で、九千票対七千票という接戦になったことをとりあげて、どうしてこの結果になったのか報告しました。

「結論から言えば、私たちは、権力と資本に対決する絶対反対派であるがゆえに、多数派を形成したんだと思っています。弁護士を激増させる政策に、絶対反対。裁判員制

度絶対反対。刑事司法改悪に絶対反対。そして改憲を絶対に許さない改憲阻止」を確認して、それぞれの内容に触れつつ、「絶対反対で闘うことの大切さ」を訴えました。

そして、「弁護士とは、権力の中に、体の半分が、三分の二か四分の三、突っ込んでいる職業です。だけれども、もう一つ私たちの中には、『これでいいの自分たちは』という思い、『権力の手先にはならない。対決する』という思いがある。過去の戦争において、権力の手先になり、戦争政策の先頭に立った。二度とそんなことはさせない、という思いがある。その部分を、どんどん強めていくのは誰か、それは皆さんです。労働者です」と訴えました。

*

現場からの報告は、国鉄千葉動力者労働組合（勤労千葉）の田中康宏委員長と「（日の丸・君が代）不起立闘争」を闘う、教育労働者の河原井純子さんです。

勤労千葉の田中委員長は、「労働組合が改憲に反対するのは、当たり前だった。それなのに『連合』は改憲に賛成している。労働組合の幹部が腐っているから、改憲攻撃がここまで来た。この現実を変えたい。労働組合の本来の役割を絶対に果たしたい」と訴えたうえで、世界中で、労働

者が、新自由主義政策に怒り、立ち上がりつつあることを強調しました。

とりわけ、五月一日、アメリカで「イラク戦争に反対して、西海岸の二九の港すべてを封鎖するストライキに港湾労働者が立ち上がったこと」「それに応えて、イラクの港湾労働者が連帯ストライキに立ち上がったこと」を紹介しました。戦争の当事国同士の労働者が団結してストライキに立ちあがるという歴史的事件に、会場からは驚きと感動の拍手が起りました。

「全世界が、ストライキの津波のような嵐です。日本の労働者は、これと無縁ではない。間違はなく、ここから労働運動の再生をはじめます。自治労は一〇〇万人、日教組は三〇万人います。自治労一〇〇万人が改憲阻止で一人十枚ずつピラをまいたら、一〇〇〇万枚です。だから、労働組合がちゃんとした方針を持てば、改憲は阻止できる」と、闘いの展望を明らかにし、〈サミット粉碎の闘い〉を呼びかけました。

*

最後の発言者は、河原井純子さんです。

河原井さんは、冒頭、自分の「日の丸・君が代不起立」

の闘いこそ、「改憲阻止につながる闘いである」と訴えました。そして、「私の日の丸・君が代の不起立は、日々の教育活動の一つです。なんら特別なことではなく、ふだん着の不起立と思っています」と話され、都立七生養護学校で実践してきた「〈障がいのある子どもたち〉と向き合ってきた教育活動」を紹介しました。

そして、「すべては一人から始まる。そして、隣へ、さらにその隣へ。これが真の団結であり、連帯だと思う」と強調され、「孤立を恐れずに決起すれば、団結する仲間はず生まれる」という展望を、話されました。大同団結の大切さと、若い人との連帯の大切さを強調されて、「共闘の輪を広げよう」と訴えました。

*

最後に、8・15実行委員会の鈴木達夫弁護士が、まとめを行いました。

「秋の臨時国会は、間違はなく、海外派兵恒久法と憲法審査会始動に向かって動き出す。どうしようもない日本の支配階級は、改憲と戦争。労働者人民の団結を壊していくしかないんです。」「敵は〈希望は戦争だ〉と言って、とんでもない人さらいをやろうとしている。何が〈希望は戦争〉

であるものか。あえて言おう。若者の希望は、《革命》なんだ。本当のことを言つて前に進もう。改憲阻止は、実は、この世の中をひっくり返すチャンスなんだ。それが、《攻めの改憲阻止闘争》です」とまとめられました。

三時間、ただひたすら講演や討論が続く集会であつたにもかかわらず、参加者の緊張が途切れることもなく、壇上に集中し、熱気あふれる討論会でした。

*

この5・2集会をステップに、八月十五日（金）午後一時から中野ゼロ小ホールにおいて、『蟹工船2008 国益と排外に憲法は屈するのか』と題して、《労働者・市民のつどい》を開催します。ぜひ、みなさん、ふるつてご参加下さい。

（戦後五〇年を問う労働者・市民のつどい）

全国統一実行委員会実行委員会事務局 遠坂 裕夫

「一人からはじまる」——澤地久枝さんの講演会に感動

若狭高校の後輩、相津幸子さんから「澤地さんの講演会を企画したので、聞きに来ませんか」とお誘いを頂き、五

月十日早朝、あいにくの雨の中を、私を含む四名は、車で岡山から小浜に向かいました。私には十五年ぶりの小浜への旅になりました。

相津さんの計らいで、『あごら』317号（「沖縄の声」を聞いてください」と、『障害』者施設、NPO法人《ステップハウス》わーの刺し子や、私の手作りパンの、ワークショップを開きました。

澤地さんのお話は、「澤地さんと共に《九條の会》の発起人であつた小田実さんが、病床にあつても最後まで平和に向かう行動を諦めなかつた姿勢」や、大岡昇平さんのお話など、切々と胸に迫りました。

「世界中の戦争を体験したり、関わつたりした多くの人の取材をしたが、一人も『戦争をして良かった』と語つた人はなかつた。」とのお言葉は、とても心にしみました。

「私たち一人ひとりの力は小さいけれど、戦争の持つ意味を知り、深く考え、選挙に結びつけば、必ず大きな力になり、二度と戦争への道を踏まないことができる」という結びのお言葉に励まされました。

その後の交流会では、富山の《あごらメイト》山下清子さんご夫妻や、大阪からの田原素子さんなど、三名の方も出

席されて、二時間の交流会が瞬く間に過ぎてしまいました。前日には若狭東高校でも澤地さんの講演会が開かれ、六百人に及ぶ生徒さんが聴講されたそうですが、これは、日本史の授業の一環として事前授業としての取り組みだったそうです。このような若者への取り組みも、全国で広げたい、と思いました。

澤地さんは、翌十一日、「原発のある町の暮らしを知りたい」と、相津さんと、美浜市で原発反対の活動をしている方の案内で、敦賀市の原発を回られて帰路に着かれたそうです。

三日間のハードスケジュールを、やさしい笑顔とシャンとした姿で貫く澤地さんと、大勢のステキな方との出会いに、しっかりとパワーをいただいた小浜への旅でした。

(自然食研究家 伊東朋子)

「沖繩」で考える教科書問題・米軍再編・改憲のいま

沖繩在住の作家、目取真俊さんを東京に招いて、「沖繩で考える 教科書問題・米軍再編・改憲のいま」と題する講演会を、六月八日、北区・赤羽会館四階大ホールで開いた。

目取真俊さんは、「憲法9条と基地の島・沖繩の問題」、「基地を法的に根拠づける安保条約の問題」、「教科書問題」などについて鋭く批判を展開している作家だ。主催は〈第9条の会・オーバー東京〉。「第9条を地球憲法に！」を掲げて、一九九一年にアメリカ・オハイオで〈第9条の会／USA〉を創設したオーバービーさんと連帯している。

目取真さんの講演は、緊迫した話から始まった。日本政府が米政府に、二〇一四年までに辺野古飛行場の完成を約束したため、防衛施設局は必死で工事を急いでいる。これを阻止するために、老人たちまでが、この炎天下に座り込むという。

また、昨年九月、十一万六千人の県民が抗議した教科書問題がある。〈靖国応援隊〉や〈自由主義史観研究会〉グループが、どれほど周到に画策し、教科書から集団自決への軍命記述削除に反対する、大江・岩波沖繩戦裁判を提訴したか。

イラク戦争を機に、米軍基地再編と自衛隊による米軍の肩代わりがすみ、自衛隊は、米軍基地内で実弾演習を行ない、イラク市街を模した共同戦闘訓練まで受けている。

日米政府は、中国を敵視し、「南西諸島有事」には、自衛

隊五万人を配備する計画だ。基地建設・強化の巨額の交付金。甘い汁に利権屋たちが群がっている。

沖縄戦・集団自決を強いられた人びとが語り継ぐ記憶、「軍隊は国民を守らない」という記憶を、消し去らなければならないのだ。教科書から「集団自決は革命」だったという記述を削除させることは、政府が改憲を進め、日本を再び「戦争をする国」に変えていくためには不可欠なのだ。

*

会場を埋めた参加者は、息を凝らして耳を傾け、自らをかえりみて、今なすべき課題を確認しないではいられなくなる講演だった。最後に「いっしょに闘いましょう」と呼びかける目取真さんに、熱く長い拍手が続いた。

休憩後の質疑・討論も熱かった。(第9条の会・オーバー東京)の若い会員たちが、ある大学のゼミでの反応を語った。

「自衛隊・安保は、日本防衛のために必要ではないか」

「少女レイプ事件と基地問題を結びつけるべきではない」

まじめな若者からの声だったという。

目取真さんは、「レイプ事件を被害者の問題にすりかえる議論」に対して批判した。

基地・米兵と住民が普通にまじって生活している町で、夜の八時とはいえ、子どもたちが町にいることが、責められるだろうか。基地で特殊な殺人訓練を受けている海兵隊の兵士が、夜には街のバーで酒を飲んでいる。東京は、平穏だ。しかし、同じ日本、同じ憲法下にありながら、沖縄は、なぜ基地の町なのか。

日米両政府は、対中国の戦略基地として、軍事基地の再編強化を急いでいる。平和運動をしている人が、「九条があるから平和だ、安保は棚上げし、それでよい」と言うならば、沖縄の犠牲を、そのまま認めることを意味する。

基地から離れた東京で生活している人には、基地の街の現実を知り、そこから社会を見とおすことは、むずかしいだろう。

「しかし、地域での困難さを踏まえながら、東京からも、沖縄からも、共に憲法九条を破棄させず、戦争反対の運動を広げ、強くしよう。」目取真さんはこう結んだ。

目取真さんの熱い語りに、参加者すべてが深い感銘を受けたようがみられた。みんなで憲法九条を守り、戦争に反対する運動の輪を広げよう。そう思った。

(第9条の会・オーバー東京 和田隆子)

戦争の危機と貧困の強制に反対する 〈6・1怒りの大集会〉に、一〇五〇名が参加

二〇〇八年六月一日、東京・なかのZERO大ホールにおいて、十一人の呼びかけ発起人、一〇六人の呼びかけ人、二〇四人の賛同人のもとに、〈とめろ！「戦争のできる国」づくり 許すな！貧困の強制 6・1怒りの大集会〉が開催されました。

ガソリン税暫定税率の復活や「後期高齢者医療制度」の実施を強行し、支持率が一〇％台にまで落ちこんだ福田内閣が、さらに消費税の大増税などの攻撃をかけようとしているときに、これを許さない決意に燃えた、一〇五〇名の労働者・市民・学生が集いました。

集会は、はじめに主催者を代表して、弁護士で、元・日弁連会長の土屋公献さんが挨拶しました。「日本は、世界に一つしかない立派な憲法をもっているながら、大きな軍隊をもっている。しかもそれは自国を守るためのものではなくて、アメリカの世界戦略に奉仕するための軍隊であり、とくにアジアをターゲットにしています。日本が侵略して非常に大きな迷惑をかけたアジアの人びとを敵にまわすよ

うなアメリカの動きに、日本の軍隊がお手伝いをする。これは、とんでもないことです。いま大切なのは、アジアと仲良くすることであり、そのためには、かつての戦争で彼らに対して行なった大きな罪を清算することです。正しい歴史をはっきりと認識し、その歴史に立って、現在を、将来を、見つめ直し、それにふさわしい行動を起こす。これが正しい平和への道です。」と呼びかけました。

実行委員会が作成した、〈福田政権がすすめる「戦争のできる国」づくりと労働者民衆への貧困の強制の実態〉を映しだしたビデオが上映され、ひきつづいて普天間爆音訴訟団幹事の栄野川安邦さんが「沖縄からの報告」を行ないました。栄野川さんは、「『集団自決』の『軍命』記述の削除」は、「沖縄戦の真実を教えなくするため」にやっているのです。沖縄戦は、「軍隊は、決して住民を守らないのだ」ということを私たちに教えている。日本はもう、戦争できる体制ができあがっています。いま私たちが立ちあがらないと、大変なことになります」と、警鐘を鳴らしました。

貧困の強制と戦争への加担は表裏一体

実行委員会からの提起をうけて、パネルディスカッション

ンをおこないました。パネラーからの二つの問題提起——日本がいまアメリカのミサイル防衛(MD)システムの最前線基地になっており、「戦争のできる国」へと一気に変貌しつつあること。激増する「ワーキングプア」の実態と、それが小泉式の構造改革の帰結であり、貧困の強制とアメリカの戦争への加担は表裏一体の攻撃であること——をめぐって、榮野川さんら三人のパネラーと参加者で、活発な討論をくりひろげました。

「再雇用を口実にした経営者の悪い攻撃を、経営者の言いなりになった労組幹部の対応を許さずに打ち破った闘い」や、「団結すれば勝てる」を合言葉にねばり強く闘い、解雇撤回を勝ち取った報告。また、大学のサークルでの研究活動をもとにアフリカでの貧困・飢餓の実態をリアルに暴露し、「環境・貧困問題を生みだした元凶が集うG8サミットは、まったく欺瞞的だ」と告発した学生の報告。これらに対して、参加者から大きな共感の拍手がわき起こりました。

さらに、「福田政権は倒さなければならぬと思うが、また同じような政権が出てくるのではないか」という質問にたいして、榮野川さんは「国民の力で福田政権を倒すことが肝腎です」とキッパリと答へ、「既成の政党に頼るのではなく、

私たち自身が、職場・学園・地域から運動を大きくつくり出し、戦争と貧困を強制する政権はいつでも倒す力がある」ことが大切であることを、参加者全体で確認しました。こうした討論を通じて、参加者は「いま私たちが闘わなければいへんなことになる」という自覚をもち、闘う決意を新たにしました。

この国の方向を逆転させましょう

集会の最後に、森井眞さん(元明治学院大学学長)が閉会の挨拶をおこない、ご自身の悲痛な戦争体験に触れながら、次のように参加者に訴えました。

「私は、いま私たちが生きているこの国が、あんな日本に後戻りすることは、絶対に許してはならないと思います。『日の丸・君が代』の強制、日教組の集会の中止の事件、あるいは反戦ビラ配りへの弾圧を合憲とした最高裁判決、老人医療の問題、貧困の強制など、すべてこれらの根底にあるのは人権問題です。そして人権否定の最たるものは、もちろん戦争なんですけれども、いま日本は平気な顔をしてその戦争に近づきつつあるではありませんか。私たちは、なんとしても、この国の方向を逆転させなければなりません

で、にぎわいました。

(6・1集会実行委員会事務局)

真相の解明とともに〈平和と寛容〉を強く訴えた 「張作霖爆死八〇周年記念集会」

助け合い、そして、どんな小さなことでも権力が人権を侵そうとすることには断固として抵抗し、人間を愛し、戦争を憎む全世界の膨大な数の市民と連帯しながら、人間一人一人がすべて人間として大事にされ、人間を否定する戦争が、絶対に許されない世界を築くことをめざして、市民運動を、いよいよ盛り上げていきたいと思えます。」と。

全身全霊をこめたこの訴えは、参加者の胸をうち、割れるような盛大な拍手が会場を包み込みました。

こうした発言や討論とともに、会場のロビーでは、地球環境破壊を告発した池田龍雄さんのポスター「地球は青くなかった」の展示、橋本勝さんの絵本の読み聞かせ、労働者・学生が創意工夫をこらして作成したさまざまな展示、そして反戦平和・貧困・環境などの諸問題をテーマにした書籍・雑誌(「あごら」誌など)やパンフレットの販売など、盛りだくさんの催しが行われ、休憩時間は、たくさんの人

張作霖爆殺事件(一九二八・昭和三年六月四日)から八〇年。敗戦前の日本では「満州某重大事件」と称して、真相は、蔽い隠されたままであった。敗戦後も、日本の支配層にとって不利なこの事件を、歴史の片隅に追いやろうとする力が、陰に陽に作用しつづけて、現在にいたった。真相解明が、ぜひ必要である。

六月一日(日)に、学士会館で開催された「張作霖爆死・八〇周年記念集会」は、張作霖爆殺の真相の本格的解明を目指した。主催は、現代史を考える会と同集会実行委員会。後援は、二一世紀国際交流会、日本中国友好協会、海外音楽研究会、専修大学社会科学研究所、久保医療文化研究所。司会は、竜崎一郎氏。開会挨拶、関岡涉氏(現代史を考える会代表)の後、次の三題の講演。

①「張父子政權——その積極的な足跡を追って——」

三田陽(東京工科大学名誉教授)

②「張作霖爆殺事件の真相」

儀我壯一郎（大阪市立大学名誉教授）

③「中華民国史における張作霖・張學良」

洪谷由里（富山大学准教授）

①の三田講演は、「満州」の地に支配力・影響力をもった、清朝から中華人民共和国にいたる九本の「国旗」と、五つの敗北者——満州族・ロシア帝国・張父子政権・大日本帝国・中国国民党——の足跡と、その積極面などを論じる内容であった。「敗者の歴史的役割の検討」という斬新な視角である。

②の儀我講演では、セルビアの青年によるオーストリア皇太子暗殺が第一次世界大戦の口火を切った。張作霖爆殺は、一九三一年の「満州事変」からの「十五年戦争」を含む第二次世界大戦の火蓋を切った。直接の首謀者は、関東軍高級参謀河本大作大佐であるが、その支持者は、陸軍内部にとどまらなかった。張作霖政権支持派の田中義一首相の総辞職から、「二大政党制」・政党政治の軍部のテロによる終焉にいたる経緯などが検討された。

③の洪谷講演は、孫文・蒋介石を代表とする南から北への

革命と、張作霖政権を含む軍事政権の北から南への中央集権的支配力強化の動きを対比しつつ、孫文と張父子との関係、中華民国史にとつての張作霖爆殺事件の意味を考案した。

次はシンポジウム。パネラーは、四人であった。

①桑田富三子（河本大作大佐の孫。日本聖心同窓会JASH元会長。平和と寛容の国際絵本展「ハローディアエネミー実行委員長」が、三題の講演についての短い感想の後、家庭内での祖父・河本大作大佐、祖父の、祖母への結婚申し込みの言葉の紹介などから、敗戦後の日本兵二、六〇〇人の、中国共産党軍との戦闘（池谷薫『蟻の兵隊』新潮社、二〇〇七年、参照）と河本大佐との関係にいたるまでを報告。

②三田陽（大連生まれ、著書『満州の落陽』など）は、満州での敗戦前後の体験についても報告。

③儀我壯一郎（張作霖と同じ車輦に同乗していた張作霖の軍事顧問儀我誠也少佐（当時）の長男。共著『中国革命史』など）は、講演の補足。

④洪谷由里（著書『馬賊で見る「満州」』、『漢奸』と英雄の満州』も、講演のまとめと補足。その後、多様な質疑応答が重ねられた。

次に、佐藤光政（二期会）、小滝晴子（海外音楽研究会）による満州関連の歌曲。最後に山形放送製作（一九八七年）の「セピア色の証言——張作霖爆殺事件の秘匿写真」DVD上映という、充実したプログラムであった。

田中義一首相の孫、河本大作大佐の孫、東宮鉄男大尉の縁故者、儀我誠也少佐の子息、菊池武夫・張作霖軍事顧問の孫、その他、爆殺事件の関係者たちの子孫が八〇年ぶりに一堂に会して、真相を明らかにしたのである。テロと戦争の火蓋を切った張作霖爆殺事件の関係者の子孫が、「このような事件の再現を決して許さず、平和を守りぬこう」と訴えた。このことがこの会の最大の成果である。

なお、『朝日新聞』六月一日（日）の全一面の特集「張作霖爆殺事件」と別稿「張学良と私の関係」（儀我）（「あごろ」311号、二〇〇七年五月）は、この集会と深く関連する内容であり、参照していただければ幸いである。

（六月三〇日記）（大阪市立大学名誉教授 儀我壮一郎）

わたたちの戦争と平和史料記念館(wam) 第六回特別展オープニング記念証言集会

wamは、ジャーナリスト松井やよりさんの遺志を継ぎ、戦時性暴力の被害と加害の史料を集めた、日本で初の資料館として、二〇〇五年に新宿区西早稲田に開館され、この八月で、まる三年になる。

六月七日から、第六回特別展「ある日、日本軍がやってきた——中国・戦場での強かんと慰安所」を開催している。中国の山西省孟県、南京、海南島の三地域で、被害者の支援や聞き取り調査をしてきた四団体が、この中国展プロジェクト・チームに参加して、性暴力被害の実態と、その背景、被害女性の尊厳の闘いの記録のパネルを作成した。

日本軍が中国大陸を侵略した十五年戦争では、中国の人びとへのさまざまな残虐行為が告発されている。

日本軍と抗日勢力が拮抗していた山西省孟県では、村々は破壊され、多くの「惨案」（虐殺事件）が起こり、女性たちは「強姦所」に監禁され、日本軍兵士から輪姦された。

長く沈黙を強いられていた性暴力被害女性も一九九〇年代から声をあげるようになった。これまでに十六人の被害女性が、日本政府に、その被害の謝罪と賠償を求めて裁判を闘い、その実態を明らかにしてきた。しかし、いずれも

第6回特別展

wam

アクティブ・ミュージアム
女たちの戦争と平和資料館



2009年5月24日(日)

休館日：月・火・祝日・年末年始

日本軍がやってきました

— 中国・戦場での強かんと慰安所 —

日本軍が中国大陆を侵略した十五年戦争では、
住民への様々な残虐行為が告発されています。

おびただしい数にも関わらず

沈黙を強いられていた性暴力被害者も、

一九九〇年代から声をあげるようになりました。

日本兵はある日突然、家の戸を蹴破ってなだれ込み、

すべてを奪っていったのです。

かけがえのない家族も、家屋や家財や家畜も、

女性たち自身の人生も—。

2018年6月7日(土)

開館時間：水～日 13:00～18:00

結論としては原告の請求を棄却して、順次最高裁での敗訴が確定した。

大量虐殺と手あたりしだいの強姦が繰り返された南京。ここでも、近年、被害女性や目撃者からの聞き取り調査が粘り強く進められ、性暴力被害の惨状が具体的に語られるようになった。元日本兵への膨大な数の聞き取りは、それを充分に裏付けている。

日本軍の南方侵略の要所だった海南島には、現在わかっているだけでも、島内四か所に、「慰安所」という「強姦所」が作られていた。少数民族の女性たち八人が、ここでの被害を告発して日本政府を裁判に訴えている。

この中国展に際し、山西省から裁判を闘ってきた被害女性^{ツァイホウ}の万愛花さんと遺族の楊秀蓮さん^{ヤンシュウレン}を招いて、六月八日、千代田区のニコラ・バレ九階ホールで、オープニング記念集会が開かれた。

第一部は、万愛花さんと楊秀蓮さんの証言。第二部は、wam運営委員長の池田恵理子さんの司会で、中国展パネルを作った四団体の代表によるシンポジウム。

次の世代に日本軍の罪を伝えてください

中国人女性として、初めて性暴力被害を訴え、二〇〇二年東京で開かれた「女性国際戦犯法廷」でも証言した万愛花さんは、一九四二年、山西省、孟県の羊泉村で、十五歳の時に、日本軍に拉致監禁のうえ輪姦され、さらに、抗日組織のリーダーであったため、激しい拷問を受け、身長が二〇センチも縮んでしまった。戦後も養女に支えられながら、苦しい生活を強いられた。

「私は戦争の生き証人です。昔のことを思い出すだけで心が痛み、被害のことは言いたくありません」「九八年に日本政府を訴える裁判をしたが、敗けてしまった。敗けた理由を私は理解できません。裁判は敗けたが、この闘いを終えることはできない。私たちの想いを若い人たちが引き継いで、日本政府と闘ってくれると思っています」と語った。楊秀蓮さんは、自死した養母・南二僕^{ナンニハク}さんの遺志を継ぎ、裁判の原告となる。南二僕さんは十九歳の時に山西省、孟県の、河東村で拉致され、日本軍の「隊長専用」として、監禁・強姦され、男児を出産するが、その後、亡くなった。

戦後は対日協力者として裁かれ、当時三歳であった楊さんを抱きしめ、「この子が大きくなったら、私の不幸のすべてを伝えて」と夫に言い遺し、首を吊って自死した。

楊さんは、「小学生の時、憶苦思甜（昔の苦勞を思い出して今の幸福を考える）という授業があり、村の老人の話聞きしました。その時はじめて母の被害について聞いたのです。昨日、wamの中国展をみました。母のパネルの前に立ち、あらためて母の悲しみ、無念さが思われ、つらかったです」。

「皆さんにお願いしたい。次の世代に日本軍の罪を伝えてください。平和を愛してください。二度と侵略戦争をしないで、歴史をきちんと教えてほしいです。裁判は敗けたけれど、母の尊厳を取りもどすために、これから闘っていきます」と訴えた。

犯した罪を語り続けます

元日本軍兵士で山西省の現地を何度も訪ねている近藤一さんや、国会議員に証言するために来日した韓国の「日本軍性暴力被害女性」吉元玉^{キム・ゴン}さんも駆けつけて証言した。

近藤さんは、「こういう会場に私がいて、いいのでしょうか。残虐なことをした兵隊の一人なのです。私は、昭和十五年に召集され、菊の紋章のついた三八式歩兵銃を渡されて戦場に送られました。着いたところが中国の山西省遼県（現・

左権県）で、大隊本部がある所でした。そこで上官への絶対服従の姿勢や武器の使い方、残酷な刺突（生きた人を刺し殺す）訓練などの初年兵教育を受けました。

今年八九歳になりましたが、虫けらのように亡くなっていた戦友の無念を思い、生き残った者の使命として、自分の戦争体験を、命ある限り証言していきます」と語った。

吉元玉さんは、「ソウルの日本大使館前で行なっている、日本政府に、日本軍性暴力被害者に謝罪と賠償を求める（水曜デモ）は、八〇〇回を超え、十七年目を迎えています。日本政府は、いまだにそれに応えようとしない。でも、『あったこと』を『なかった』とは言えないでしょう。

痛んだ心や体が回復することはありませんが、真実を明らかにするために、皆さんの力が必要です。よろしくお願いします」と挨拶した。

被害女性とともにあゆむ

第二部では、〈山西省を明らかにする会〉の石田米子さん（岡山大学名誉教授）が、「山西省における性暴力被害の特徴は、戦場強かんと強かん所での長期にわたる監禁、自宅などの強かんです」と、語り、裁判の原告一人ひとり

の被害事実と向き合い、裁判を共に闘う中で信頼関係を築いてきた十年余の歩みを紹介した。そして、「万さんから『日本は変わったか』と聞かれたが、共に闘った大娘（おばあさん）たちと私たちは変わったし、中国現地の村人にも変化がありました」と証言した。

また、この秋開かれる中国山西省武郷県にある八路軍紀念館での「日本軍性暴力パネル展」について、「『尊厳』という言葉からは最も遠いところに置かれていた大娘たちが、パネル展示に同意されたことは、大きな闘いです。被害女性とともに歩むなかに、パネル展もあるのです。」と結んだ。

〈中国人「慰安婦」裁判を支援する会〉の大森典子さん（弁護士）は、「被害事実や性暴力制度とその背景が認定され、裁判は大きな進歩がありました。日本社会には、こうした認識が定着していません」として、大森さんも関わってこられた〈家永裁判〉以来十年の変化について語り、「女性への蔑視、民族差別意識、軍隊内での人間性を失わせる待遇が、加害兵士をつくっていったのです。これは、過去のことではありません。アメリカ下院、オランダ、カナダ、EUの議会が、現在も起こっている女性への暴力をとめるために、『慰安婦』問題に、日本政府が向きあうべきだと

決議した視点を、私たちも失ってはならない」と問題提起した。

〈南京大虐殺六〇カ年大阪実行委員会〉の松岡環さんは、「『南京大虐殺』は幻であった」とする右側勢力のいやがらせに対峙しながら、八八年から始まった会の活動について紹介した。

「九七年から元兵士二五〇人の証言を聞き取った記録と、写真集『南京大虐殺』のエッセンスを、wam展五枚のパネルに凝縮した」と語った。「被害者への聞き取りは一八〇人に及びます。傷ついた心と体は治りませんが、食事交流会や医療支援をしています。これからも日本の兵士と被害者の証言が、パズルをあわせると絵ができるように、事実をあきらかにしていきたい」と語った。

〈ハインナンNET〉の山下美美子さんは、「中国の南端でベトナムの近くにある九州くらい島の海南島が、当時は南方に向けた日本軍の拠点で、鉱物資源を狙った日本企業が多く進出した島であった」と説明した。

「〈海南島の被害女性の裁判〉は、唯一東京高裁で係争中です。〈ハインナンNET〉は、〇五年に発足した会で、これまで青山学院大学はじめ、多くの大学に出張授業を行い、

若い世代へ働きかけています。」と、若者を中心とした会の活動を紹介した。

沖縄の米兵による性暴力被害の実状と重ねあわせ、一人でも多くの方がたが、この特別展に参加して理解を深め、今も世界各地で起こっている戦時性暴力をとめるために、「慰安婦」問題の真の解決に向けて、さらに連帯を強めたと思った。

(小俣光子)

6・19福岡大空襲祈念 第27回2008平和のための福岡女性のつどい

主催 福岡女性団体交流会

米軍の福岡大空襲によって、一夜にして福岡の街が瓦礫の焦土と化した昭和二〇年六月十九日を朴して、今年も、この祈念集会が持たれた。

七〇年代、フェミニズムの運動の高まりのなかで始まったこの集会は、二十七年も続いている。平和を願い、求める運動は、長期持続が必要。途中で降りるわけにはいかない。今年も恒例により福岡大空襲体験の語り継ぎに始まった。

「六歳の心」に刻まれた〈戦争〉

松尾克子さん（元小学校教師）は、小学一年生で空襲下の街を逃げまどった。焼けた自宅が陸軍西部軍司令部の前にあったので、子どもだった目こぼしで、酒保や倉庫に入った。当時の庶民とかけはなれた食糧物資、軍隊の振舞を、子どもの率直な眼でとらえた情景を語った。

松尾さんは、戦後、教師となって、生徒らに戦争体験を語りつづけ、教師をやめた今も、続けている。

パネルディスカッション「基地問題と女性の人権」

今年は、

・沖縄から狩俣信子さん

（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会）

・築城から徳永克子さん

（築城基地に米軍は来るな！の会準備会）

・福岡から酒見辰正さん（福岡県平和委員会）

三名のパネリストを迎え、それぞれの現状を語っていた。



今も続く沖縄差別——狩俣さんの証言

沖縄は戦場の悲劇にさらされ、本土の犠牲となって敗戦を迎え、漸く訪れた平和も、米軍の駐留、そして基地化によって再び犠牲を強いられることになって六十三年。

その間、様々な人権、とりわけ女性の人権は、数かずの米兵の性的暴力によって踏みにじられ、その苦悩は、量りしれない。

今年二月に起こった女子中学生に対する海兵隊兵士の暴行事件も、「訴訟取り下げ」の形で幕引きしなければならなかった。基地がある限り、この苦悩は、続く。

政府の米国追従、沖縄県知事の弱腰。沖縄の苦しみを真摯に受け止めようとしなない証拠は、教科書問題から真実を取り除こうとする文部科学省の態度にも明らかだ。

「日本の米軍基地の75%が沖縄に押しつけられ、そこで日常的に脅かされる生活の現状を、全国の皆さんに知ってほしい」という狩俣さんの発言は、私たちの胸を衝く。

この重い課題に、どう向きあったらよいのか。

福岡に住む私たちの身辺も、米軍再編に伴う基地強化のため、住民の知らない間に、自衛隊の施設の新設や拡張が

進められている。至るところ、基地に抱きすくめられてしまふ不安。

築城基地に米軍は来るな！

徳永克子さんは、行橋市の市議会議員として、市議会でも、築城基地問題をとりあげるほか、『築城基地に米軍は来るな！』準備会の事務局長として活動している現状を述べた。

福岡県平和委員会の酒見辰正さんは、「いま、自衛隊は変貌しつつある」と、特に福岡県の自衛隊の配備の状況を説明しながら、「本来、国民を守るための自衛隊が、海外派兵型へ変わりつつあること」を指摘。その要因を「米軍再編、日米同盟変革」に求め、軍隊としての様相を帯びてゆく自衛隊に求め、「築城基地の米軍基地化、合同演習、訓練が加速されている実情を披露、福岡県がミサイル防衛の拠点としての危険をはらむおそれ」を指摘された。

*

世界の流れは、戦争を抑止し、紛争の平和的解決を望む方向に傾きつつあり、日本の憲法九条への関心も強まっているとも言われるが、三人のお話からは、その「世界の流

れ」と逆行する「日本の危機」が浮き彫りにされた。

軍隊と基地があるかぎり、性的暴力に終わりは無い。「沖縄の人権」は「日本の人権」であり、沖縄の苦悩を日本の苦悩として、粘り強く基地撤廃の重い課題に取り組むしかないことを、深く胸に刻む集会であった。（福田光子）

「南京」と「沖縄」を考える講演会（大阪） ——沖縄国際大学の石原昌家教授のお話

六月二〇日（金）午後六時三〇分から、大阪の官庁街にある〈エルおおさか〉で、「南京」から「沖縄」へ——皇軍血塗られた軌跡」と題する集会を企画しました。

この日の夜は、大阪府教職員組合や自治労主催の「橋下府政への抗議」集会と団体交渉がありました。各職場では参加者の記名名簿まで提出する大規模な動員があり、橋下知事の強引な賃金切り下げと文化施設の取り潰しに抗議する大きな抗議行動が行われました。そのために、集会に人が集まらないのではないかと、私たちは危惧していました。おまけに、朝から降り続く激しい雨に、会場準備する私たち実行委員は、はらはらしながら窓の外が気になりました。

しかし開場と同時に参加者がどんどん席に着き、開演時刻になると、後ろの席に補助いすを出して並べなければならいませんでした。

石原先生の講演概要や、それに関係する資料は、前もって印刷していましたが、前日の琉球新報に掲載された記事も含めて、先生自ら、新聞コピーを参加人数分、新たに持ち込んでくださいましたが、資料がなくなってしまう、急きよ、実行委員の持っている資料十数部をかき集めて、後から来た人にお渡ししたくらい、たくさんの方がありました。

*

まず、一九四五年の「戦場になった沖縄のフィルム」と、「二〇〇八年現在、米兵による少女への暴行に対する沖縄住民の抗議活動などの報道番組を編集した映像」を上映。

次に、南京大虐殺六〇周年大阪実行委員会の松岡環が、「大日本帝国陸軍内の勢力拡大抗争と南京攻略に至る概説」を話しました。〈南京のまぼろし化〉については、これまで大阪の集会では、何度も概説や対抗する運動、南京戦に参加した日本兵の調査、中国との共同研究に關してお話してきましたので、大阪の集会参加者は、本を読んだり、集

会で学んだりして、南京の歴史背景をよく知っていますので、今回は、「南京大虐殺に至る日本軍、特に陸軍内部の抗争と統制派の勢力拡大と現地暴走について話します」と、概要を語りました。

*

メインスピーカーの沖縄国際大学の石原昌家先生には、「まぼろし化される沖縄」をテーマにお話しいただくことになっていました。石原先生は、大江裁判に関する論文や本の執筆を、たくさんされてきましたが、数日前から琉球新報に「6・23企画——ねつ造された沖縄戦体験」と題して、大きな囲み記事を連載されています。

石原先生のお話は、戦時中、沖縄に駐屯した第三十二軍の話から始まりました。

陸軍の公的文書に書かれている沖縄住民観は、「沖縄語を以て間諜をするので、スパイとみなし、これを銃殺する。」とし、また「地上戦となった時の心得」として、「老若男女の住民が居ようととも、生命の長引くのを望まず皇国の戦捷を祈っていると信じ……敵を迎え撃つ我等は（住民を殺し）躊躇なく攻撃すべし」「沖縄の置かれた状況は、南京から沖縄へ、そして本土へと繋がっている」と、話され、さらに、

「沖繩戦ねつ造の背景には、朝鮮戦争、日米安保条約の発効で、日本の「再軍備」推進と抱き合わせに「援護法」が制定され、沖繩の住民にも援護法の適応を拡大した時に、「積極的に戦闘協力した（とみなした）者」は、すべて「戦闘参加者」として認定され、「準軍属」として扱われ、「靖国神社」に合祀されることになった経過を説明されました。

さらに、七〇年代「有事法制」制定の動きで、「日本軍が住民虐殺をした沖繩戦に蓋をしないと、世論操作の障害になる」と、「昨今の〈有事法制下〉の日本では、「自衛軍」を創設し国内戦においては住民が協力しなければならず、「憲法九条の改定」を視野に入れて、世論操作を行なっている。」と、国が、「日本軍の組織的な住民殺害」を、〈住民協力〉に仕立てあげて靖国に祭る、姑息な〈まやかし〉を行う事実を、わかりやすく説明され、「今の有事法制も、国民ぐるみの戦争協力を強いるに過ぎないまやかしである」と断言されました。この欺瞞性については、これまでも、市民運動の中でも、しきりに言われてきたことでした。

南京大虐殺、沖繩住民虐殺、現在の軍国主義拡大が、根本は全く同じ黒い水脈にたどり着くことに、耳を塞がれた大部分の国民は気がつかない状況にいます。

良心に従って市民運動をしている人たちは、「逆風のなか自分たちの運動が孤立しがちになってしまおう」と、力を落とす時もあります。歴史を修正し、社会を反動化する勢力は巧妙にはびこり、国民の考えを麻痺させているからです。軍国主義化反動化の根っこはすべて一緒なのだから、多くの市民にその状況を伝え、運動を連携していかななくてはならないと、私は、石原先生の話に強い共感を覚えました。

（南京大虐殺六十周年大阪実行委員会 松岡 環）

〇八年国際女性の地位協会シンポジウム 『国連とジェンダー'08』

二〇〇八年六月二日、文京区男女平等センターにおいて、国際女性の地位協会恒例のシンポジウム『国連とジェンダー'08』が開催され、（文京区女性団体連絡会と共催）。国連の女性関連の三委員会の最新情報を、まとめてうかがった。

今年は、二〇〇七年秋の「第六二回国連総会第三委員会」について、国連総会日本政府代表顧問の黒崎伸子さん（日本BPW連合会会長）から、また、二〇〇八年二―三月の

「第五二回国連婦人の地位委員会(CSW)」については、国連婦人の地位委員会日本政府代表の目黒依子さん(上智大学教授)から、二〇〇八年十一月の「第四〇回国連女性差別撤廃委員会(CEDAW)」については、一月に委員に就任した林陽子さん(弁護士)から、報告していただいた。

外科医として(国境なき医師団)にも参加されている黒崎さんからは、「女児が早期結婚・出産を強制されることで、出産時に産科的瘻孔(obstetric fistula)となり、その後、尿失禁などで苦しみ、社会的にも葬られている問題」が報告され、注目された。内戦が長期化している地域では、教育を受けていない人が増え、女性が紛争の犠牲者となっていること、(子ども兵士)の四〇%が女の子であり、性暴力被害を受けていること、などの指摘も、印象的であった。目黒さんからは、今次のCSWが優先テーマとした「ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための資金調達」について、「ジェンダー平等をすすめるナショナル・マシナリーと財務主管官庁の連携が重要であること、それにもかかわらず日本の財務省の参加がなかったこと、マクロ経済のなかにジェンダー平等の視点がないこと、が問題である」などの指摘があった。

林さんの報告では、政府が女性差別撤廃委員会に提出する定期報告書では、前回の審査で委員会から出された最終見解に関する情報を盛り込むことが求められているにもかかわらず、日本政府が最近提出した第六次レポートでは、個人通報制度を定める選択議定書を批准できない理由について、まったくおざなりの記載しかされていないという指摘がされた。

また、今回のCEDAW全体の特徴として、●女性に対する暴力への注目、●貧困の問題の強調、●加害者の不処罰をなくしていく動き、の三点を述べられ、「公的領域私的領域を問わず、加害者を訴追し、被害者を保護する責任が国家にはあり、政府にやるべきことをやらせるのが、NGOの役割である」と報告を結ばれた。

また、会場の福島みずほ議員から、「前日、六月二〇日の、参議院外交防衛委員会で、『女性差別撤廃条約選択議定書の速やかな批准に関する請願』が採択された」という情報も、もたらされた。

「選択議定書の早期批准を今年の最優先課題とすること」をあらためて確認しあったシンポジウムであった。

(国際女性の地位協会津田塾大学教授 武田万里子)

あじらのあじらのあじらのあじらのあじらのあじらのあじらのあじらのあじら

【316号】

316号の巻頭言（イーリス艦と沖縄と）を拝読して、もう四十余年近くも過ぎてしまったことを思い出しました。

私の友人のご主人が、海上自衛隊の音楽隊（彼は、戦時中、海軍幼年学校軍楽隊に所属）において、世界一周二百五十日間？の旅に出掛けるという話。

しばらく会えなくなるといふこともあり、見送りに出かけて行った時のことです。

私の知っていた横須賀の町は、小学校の二年生で大東亜戦が始まる二年くらい前、三笠会館で海軍記念日（五月二十七日の記憶）の式典に父が招待され、連れて行ってもらった思い出があります。

軍艦三笠は海軍旗に飾られ、とてもきれいで、日本海軍の雄大さを子ども心に感じ、記念品として頂いた三笠艦の文鎮を、六年生まで使っていたのです。それだけに、到着するまでの電車の中では、戦争中のいろいろ嫌な悲しかったことなど、頭の中は、表現のできない思いで、いっぱい……。

どんな風景になっているのか、とても不安でした。

到着してびっくり。なんと昔の戦艦より二倍か三倍の、大きく立派な艦……。

どうして、こんなに整備された船が目の前にある？

自分の国だけを護るのに必要な自衛隊？ 不思議な気持ちで、私自身の身の置きどころがない感じでした。

その頃は、合唱団（藤原歌劇団合唱

部にも所属）にいて、毎年千鳥ヶ淵で、終戦の日の前後に、戦没者慰霊の合同合唱祭に出席。原爆記念日には、千羽鶴を、皆で折り、交替で届けたりしていた時でしたので、とても複雑な……知らない間に、こんなに、戦時中より立派な海軍が仕上がった……と、帰宅の電車の中は、夢をみているような、なんとも言えない気持ちでボーッしていました。

私はそれから、事あるたびに「戦争はダメ!!」高校の友だちと、よく話します。

りっぱになった自衛隊の海軍。だからこそ、米軍から買入れた最先端のイーリス艦が、漁船を真つ二つにしても、平気なのでしょうね。

（東京府中市 石川瑛子）

カンパ少々ですが

いつもありがとうございます。31

6号を届けていただき、嬉しく思う反面、おカネも人手も……資金が底をつき……とうかがい、胸の痛み思いで、いっぱいですが、ほんと投げ出す資力もなく、お許しください。カンパ、ほんの少しですが足しにしてくださいね。私は、大きな力になれませんが、毎月、中高年世代の多くの方がたと、歌を通して、人生を語る、今の風の流れを語るなど、女の人生を歌の中で語ることがを心情として話し合っています。

(名古屋市 戸田順子)

*

「どうしたらあごらが続けてもらえるんだろ?」「どうすれば……」と何もできないまま悩んでいる私です。少しでも続刊に向けて「スズメの涙」

ですが送ります。いつも「あごら」の情報に感謝しています。

(松山市 吉村典子)

*

本をご送付ありがとうございます。貧者の一灯ですが寄付金送付します。マイペースで楽しく、規模を小さくしても、灯を絶やさず困難を乗り越切ってください。スタッフの皆様、くれぐれもお体を大切に各自愛ください。

(大阪市 土屋隆司・千津子)

318号

「あごら35年に想う」をご送付賜りましたこと、厚く御礼申しあげます。

最近まで知る機会がなかったのですが、お送り下さる「あごら」には、教えられることばかりです。また「そう、そう、そのとおり」と共感したり、良き代弁者を見つけたような気持ちにさ

せていただくこともあります。その貴誌が「空然の財政危機」とのこと、貧しい一読者はどうすることも出来ず、心が痛むばかりです。ほんの気持ちだけですが、カンパを振替で送ります。一言御礼まで。(東京 桑田喜美子)

おいしいですヨ。伊東さんのパン

ホームメイド(のら)のパン屋、岡山の伊東朋子さんがお店を開いてから十二年。

「毎朝、お店を開くと一時間で完売」と風の便りに、一セットお願いしてみました。クール便で届いたパンも、「○さんちの卵でつくりました」というプリンも、市販のものとは全く違うおいしさ。なるほど(行列のできるパン屋さん!)と、納得しました。お試しセツト千円(送料別)で送っていただけます。ご希望の方は、FAX086719517789へお申し込みを。(編集部)

おすすめ映画 「花はどいへった」

坂田雅子さんが初監督ドキュメンタリー映画の、「花はどこへいった」が、六月一四日から七月四日まで、岩波ホールで上映。その後、全国各地で、公開されます。

ベトナム戦争に米国兵士として送られたアメリカ人の夫グレッグ・デイビスさんを、肝臓がんで亡くしたことを機に、その死の原因と思われる戦争時の枯葉剤使用の実態を、坂田監督がベトナムで取材するという内容です。

ベトナム戦争中、米軍は、森林にひそむ民族解放戦線の拠点を一掃するためとして、猛毒のダイオキシンを含む枯葉剤・エージェント・オレンジを空中から散布しましたが、これは、ベトナムの人びとや米兵、韓国兵らに深刻

な被害をもたらしました。

常に権力を疑い、批判的な眼をもつて真実に迫るフォート・ジャーナリストとして活躍した夫の人生への思い。

枯葉剤がもたらした惨状と、不自由な暮らしの中でも愛情豊かに障害児を育てる家族たち。現地での障害児施設を運営する元米兵のインタビュなどを通して、反戦と環境問題へのメッセージが語られます。

作品には、六〇年代に反戦歌として、世界中の若者に歌われた「花はどこへ行った」(ポール&マリー)、「雨を汚したのは誰」(ジョン・バエズ)が使われていますが、両曲とも、著作者がこの映画の制作に賛同し、無条件での使用を許可した由。

忘れることはできません。ベトナム戦争のこと。枯葉剤のこと。このようなことを知らない若者にも、この映画

を観てほしいと思います。

(東京 小俣光子)

- 8月23日(土) 名古屋シネマテーク 052(733) 3959
初日、監督舞台挨拶予定
 - 8月23日(土) 9月5日(金) 神戸アートビレッジセンター 078(512) 5500
 - 9月13日(土) 9月19日(金) 東京・下高井戸シネマ 03(3328) 1008
 - 10月18日(金) 長野千石劇場 026(226) 7665
 - 10月25日(金) 11月7日(金) 群馬シネマテークたかさき 027(325) 1744
 - 今秋、京都シネマ 075(353) 4723
- 【配給】シグロ 03(5343) 3101

〔編集後記〕

◆桑江テル子さんはじめ沖縄の方がたが本土に投げてくださった直球は、しっかり受けとめられました。皆さまからお心のこもった御原稿を早くに頂戴しながら、事務所の移転等で、発行が遅れたことを深くお詫びします。

巻頭言をご執筆いただいた森口 豁さんは一九三七年生まれ。「沖縄を語る一人の会」主宰。米軍統治下の沖縄に渡り、琉球新報社会部記者、日本テレビ「沖縄特派員」として、十五年間報道にあたる。現在は本土と沖縄を往き来しながら著述生活。四月から、月刊『軍縮問題資料』に「森口 豁の沖縄ジャーナル」を連載中。

キューバ革命の父、チェ・ゲバラの長女で小児科医のアレイダ・ゲバラさん（四九歳）の訪日に際し、滞在中、

ずっと通訳をされた星野弥生さんの「窓」にも、ご注目を。

笹本潤弁護士の「コスタリカ通信」の連載が始まりました。笹本さんは、一九六二年生まれ、中国戦後補償裁判などに取り組まれ、現在国際法律家協会、青年法律家協会などに所属。憲法9条を護る運動を中心に活動しております。

◆〈沖縄〉を、〈ヤマト〉の人間がどれだけ受けとめたか、心配でしたが、それぞれの思いをこめた御原稿がぞくぞくと届き、ヤマトンチュにとっても〈沖縄〉は、深い、大きな問題であることを痛感しました。

ましてフェミニストにとつては、〈差別〉は、してはならないことです。長い間、輝かしい独立国であった琉球を、薩摩が強奪した歴史にさかのぼり、〈沖縄〉を、心の底から問い直し、〈ヤ

マト〉の犯した罪をつぐなわなくては、としみじみ思います。

〈あこら〉の財政は、いよいよ窮迫。事務所を、同じビルの十階、小さな部屋に移転。段ボールの山の中で右往左往しています。

印刷物は、「売れないと、断裁して『紙』として処分する」のが出版界の通例ですが、皆様心がこめてつくってくださいました、どの一冊も、断裁するのに忍びず、保存してきました。その倉庫料も払えなくなりました。次号に在庫リストを掲載します。格安価格に致しますので、ぜひ買ってくださいね。（千）

〔お詫びと訂正〕

318号に誤植がありました。深くお詫びして訂正させていただきます。

123ページ 下段6行目

ヤナト富 ↓ 安次富に訂正

〈あごら〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

〈BOC〉の登録もどっこい……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごら〉会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一〇九-四 中公ビル
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com #たはhoc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agorai/>

あごら 319号 「〈沖縄の声〉を聞いてください」を読んで

- 編集 あごら新宿 ●発行 2008年7月20日 ●印刷 藤田印刷(株)
 - 発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F
 - TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com
 - 定価 本体1,000円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部
-



9784893061744



1920036010004

ISBN978-4-89306-174-4
C0036 ¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4
定価 本体1,000円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集
校正・デザイン・レイアウト
各国語翻訳その他

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4
☎03-3354・3941 FAX3354・9014
E-mail XLV05467@nifty.com

平和と平等を追求する 『あごら』近刊シリーズ

「9条世界会議」に参加して

どうなる? 「後期高齢者」

「裁判員制度」って、必要なの?

サイレントマイノリティのBOC出版